

山園町遺跡調査報告

— 平成11～14年度、谷内（2）地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査 —

2004年3月

高岡市教育委員会

序

「山園町遺跡」は高岡市街地の北側、山園町や二上院内地区にあります。ここは二上山の南側山麓であり、丘陵の木端部の開析谷に営まれた集落遺跡です。

二上山の山麓には数多くの古墳があり、当遺跡周辺では鳥越古墳群、院内古墳群、城光寺古墳群が周辺の丘陵上に分布しております。

遺跡では山園町の宅地造成がなされた際、遺物が多数出土したことが知られています。周辺では、平成3年度に谷部中央の院内社参道工事中に墳墓と思われる中世地下式壙が発見されました。また、平成7年には谷の東側斜面より古墳時代末期の院内東横穴墓が発見されています。これらにより谷部やその周辺の丘陵部にも多くの遺跡が存在していることが確認されております。

この度、当地において急傾斜地崩壊対策工事が実施されることとなり、平成11～14年度にかけて発掘調査を実施しました。発掘調査の結果、横穴や土塁を伴う大規模な平塙面を確認し、信仰に関する遺物の出土がみられました。二上山麓における中世の様相を知る上で新たな資料と思われます。付近の射水神社や守山城との関連に興味を持たれます。

最後になりましたが、長期に亘るこの調査実施に御協力頂きました、関係各位、地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

高岡市教育委員会

教育長 細呂木 六良

- 例　　言
1. 本書は、富山県高岡市において谷内（2）地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う、山園町遺跡の発掘調査の報告書である。
 2. 当調査は、富山県高岡土木センター（旧：富山県高岡土木事務所）の委託を受けて、高岡市教育委員会文化財課が実施した。
 3. 調査地区は、高岡市山園町、二上院内地内である。
 4. 現地調査は、平成11～14年度に実施した。各年度ごとの内容は以下の通りである。
平成11年度：丘陵東側の試掘調査
平成12年度：丘陵東側の本調査、丘陵南側の試掘調査
平成13年度：丘陵南側の本調査、丘陵東側の試掘調査
平成14年度：丘陵東側の本調査
 5. 報告書作成事業は、平成15年度に実施した。
 6. 調査関係者は以下の通りである。
〔高岡市教育委員会文化財課〕
課長：宮村勝博（平成11・12年度）、大石　茂（平成13～15年度）
〔埋蔵文化財担当〕
課長補佐：天谷隆夫（平成14年度）
主幹：石浦正雄（平成11年度）、天谷隆夫（平成12・13年度）
副主幹：本林弘吉（平成15年度）
主査：山口辰一（平成11～13年度）
主任：根津明義（平成14・15年度）、荒井　隆（平成15年度）
文化財保護主査：根津明義（平成11～13年度）、荒井　隆（平成11～14年度）、太田浩司
 7. 現地調査は山口辰一（平成11～12年度）、荒井　隆（平成13～14年度）が担当し、近江屋成陽（山武考古学研究所）、井伊信一郎（中部日本鉛筆株式会社）が補佐・協力した。
 8. 整理・報告書作成事業は、山口、荒井が担当し、本書の執筆は荒井が担当した。
 9. 現地調査及び報告書作成において、以下の各氏より、御教示・御援助を得た。
(順不同、敬称略)
浦田稔、大野究、岡田一広、岡本淳一郎、川崎晃、小島俊彰、斎藤謙、晒谷和子
下山田誠、高橋真央、百瀬明子、西井龍儀、橋本正春、沙魚川博、沙魚川幸雄、日沖剛史
古岡英明、間宮正光、宮田進一、邑本順亮
- 発掘　池田薦史、上田晶子、上田工、岡田一広、桶谷潤、尾崎宏典、河原康弘、北川宏典
木原和美、神塙友里、小島善雄、小林央、笠島文克、佐野實、沢田和明、晴田建治
下平正幸、瀧律子、田中馨子、中山賀富、八箇良児、廣沢隆太郎、広谷弘昭
松原石洋、間野一純、宮原誠一郎、山崎一男、山崎亮、山城一夫、若林直人
- 整埋　荒尾恵、網英子、伊藤久美子、井出さち子、岡田一広、奥村安衣、桶谷潤、笠谷幸代
鎌仲勝子、勘田和代、黒崎祐美子、神塙友里、小島あゆみ、小林央、晴田建治
新谷晴紀子、惣元真理子、高田えみ子、瀧律子、田中美穂子、鶴崎理恵、道谷美奈子
中三希子、中谷圭介子、名越惠美、鶴井涼子、仁木日暮美、西田琴美、西山牧
横真理子、林真理子、早瀬清三、米見智子、武藤さやか、松尾春枝、松橋あゆみ
南尚子、三船美代子、宮野美重子、村田智恵子、村田理恵、室崎真弓、矢谷真流美
山口まゆみ、山崎美和、山本優、余詠墨香、米田枝里子

高岡市埋蔵文化財調査報告第10巻
山添町遺跡調査報告

目 次

序
例 言
目 次

第1章 序 説	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 調査経過	8
第3節 調査概観	11
第2章 各調査地区の調査	14
第1節 平成11年度調査地区	14
第2節 平成12年度調査地区	15
第3節 平成13年度調査地区	18
第4節 平成14年度調査地区	21
第3章 遺 構	24
第1節 横穴	24
第2節 陶削地	27
第3節 その他の遺構	32
第4章 遺 物	34
第1節 土器類	34
第2節 その他の遺物	36
第5章 結 語	37

図面目次

- 図面01 遺跡実測図 調査地区図面配備図 (1/800)
- 図面02 遺跡実測図 調査地区全体概略図 [1] (1/500)
- 図面03 遺跡実測図 調査地区全体概略図 [2] (1/500)
- 図面04 遺構実測図 山區町第1～5号横穴平面図・立正図 (1/100)
- 図面05 遺構実測図 第1号横穴実測図 (1/40)
- 図面06 遺構実測図 第2号横穴実測図 [1] (1/40)
- 図面07 遺構実測図 第2号横穴実測図 [2] (1/40)
- 図面08 遺構実測図 第3号横穴実測図 [1] (1/40)
- 図面09 遺構実測図 第3号横穴実測図 [2] (1/40)
- 図面10 遺構実測図 第4号横穴実測図 (1/40)
- 図面11 遺構実測図 第5号横穴実測図 (1/40)
- 図面12 遺構尖端図 第1・3・4号横穴前底部尖端図 [1] (1/40)
- 図面13 遺構尖端図 第1・3・4号横穴前底部尖端図 [2] (1/40)
- 図面14 遺納尖端図 平坦面SX09・11・13尖端図 [1] (1/400)
- 図面15 遺構実測図 平坦面SX09・11・13実測図 [2] (1/400)
- 図面16 遺構実測図 基壇状遺構SD10・溝SD09実測図 [1] (1/80)
- 図面17 遺構実測図 基壇状遺構SD10・溝SD09実測図 [2] (1/80)
- 図面18 遺構実測図 十型状遺構SX12実測図 (1/80)
- 図面19 遺構実測図 漢式遺構SD10実測図 (1/80)
- 図面20 遺構実測図 土坑実測図 [1] (1/80)
- 図面21 遺構実測図 土坑尖端図 [2] (1/80)
- 図面22 遺物尖端図 土器類、弥生土器・須恵器（古代）・土師器（中世） (1/3)
- 図面23 遺物実測図 土器類、珠洲 (1/3)
- 図面24 遺物実測図 土器類、珠洲 (1/3)
- 図面25 遺物実測図 土器類、珠洲 (1/3)
- 図面26 遺物実測図 土器類、珠洲 (1/3)
- 図面27 遺物大割図 土器類、中世陶磁器 (1/3)
- 図面28 遺物実測図 土器類、中近世陶磁器 (1/3)、土製品 (1/3)、石製品 (1/3)

図版目次

- 図版01 遺跡 1. 遺跡遠景（南）
2. 遺跡遠景（南東）
- 図版02 遺跡 1. 遺跡全景（南東）
2. 遺跡全景（北西）

- 図版03 遺跡 1. 平成11年度調査地区現況（北）
2. 平成11年度調査地区全景（北）
3. 平成11年度試掘調査地区遺物出土状態（南）
- 図版04 遺跡 1. 平成12年度試掘調査地区現況（南東）
2. 平成12年度試掘調査地区全景（南東）
- 図版05 遺跡 1. 平成12年度本調査地区全景（東）
2. 平成12年度本調査地区全景（北）
- 図版06 遺構 1. 第1・3～5号横穴全景（南東）
2. 第1・3～5号横穴全景（北東）
- 図版07 遺構 1. 第1号横穴全景（南東）
2. 第2号横穴全景（東南東）
- 図版08 遺構 1. 第3号横穴近景（東）
2. 第4号横穴全景（北西）
- 図版09 遺構 1. 第5号横穴全景（北東）
2. 平坦面S X06全景（南）
- 図版10 遺跡 1. 平成13年度試掘調査地区現況（南西）
2. 平成13年度試掘調査地区全景（南西）
- 図版11 遺跡 1. 平成13年度本調査地区全景（東北東）
2. 平成13年度木調査地区全景（南西）
- 図版12 遺跡 1. 平成14年度本調査地区全景（南西）
2. 平成14年度本調査地区全景（南東）
- 図版13 遺構 1. 基壇状遺構S X10現況（北西）
2. 基壇状遺構S X10全景（北西）
- 図版14 遺構 1. 基壇状遺構S X10南側土層断面（西）
2. 基壇状遺構S X10北側土層断面（南西）
- 図版15 遺構 1. 平坦面S X11現況（北西）
2. 平坦面S X11全景（南東）
- 図版16 遺構 1. 土堤状遺構S X12全景（南南東）
2. 土堤状遺構S X12全景（南東）
- 図版17 遺構 1. 盛土状遺構S X09現況（北）
2. 平坦面S X13現況（北西）
3. 深状遺構S D10現況（南東）
- 図版18 遺構 1. 平成12年度調査地区遺物出土状態（北）
2. 平成13年度調査地区遺物出土状態（南）
3. 平成14年度調査地区調査風景（西北北）
- 図版19 遺物 1. 須恵器
2. 十郎器（中世）
- 図版20 遺物 球形
- 図版21 遺物 球形
- 図版22 遺物 1. 中近世陶磁器
2. 土製品・石製品

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図〔1〕(1/15万)	3
第2図 遺跡位置図〔2〕(1/5万)	4
第3図 遺跡地図〔1〕(1/1万5千)	6
第4図 遺跡地図〔2〕(1/1万5千)	7
第5図 二上山周辺急傾斜地崩壊危険地区域等位置図(1/2万5千)	9
第6図 T字区域位置図(1/7,500)	10
第7図 調査地区位置図(1/5,000)	11
第8図 調査地区設定図(1/2,500)	13
第9図 平成11年度 試掘調査地区全体図(1/400)	14
第10図 平成12年度 本調査地区全体図(1/400)	16
第11図 平成12年度 試掘調査地区全体図(1/400)	17
第12図 平成13年度 本調査地区全体図(1/400)	19
第13図 平成13年度 試掘調査地区全体図(1/400)	20
第14図 平成14年度 本調査地区全体図〔1〕(1/400)	22
第15図 平成14年度 本調査地区全体図〔2〕(1/400)	23
第16図 山岡町横穴群一覧図(1/80)	38
第17図 勘削地設備概略図(1/400)	41
第18図 中世土器・陶磁器の種類別構成比率	42
第19図 中世土器・陶磁器の用途別構成比率	42

挿 表 目 次

第1表 山岡町横穴群一覧表	39
第2表 中世遺物の種類別組成表	43
第3表 中世遺物の用途別組成表	43

別 表 目 次

別表1 土坑一覧表	44
別表2 潟一覧表	45

第1章 序 説

第1節 遺跡概観

1. 環境

地理的概観

高岡市域の半野部は、現在市域の東辺を流れる庄川が形成したものとされている。庄川は氾濫を繰り返しながら扇状地や冲積低地を形成した。一方、西側には小矢部川が蛇行して流れている。丘陵地は北西側には石川県宝達丘陵から北東側へ広がる石動丘陵、西山丘陵があり、東側の二上丘陵へと続いている。西山丘陵は、高岡市北西側に広がる丘陵地で、西側は富山県と石川県との県境となっている。市域南西側には金山丘陵より広がる芹谷野段丘がある。北側は富山湾に臨む。山園町遺跡はJR高岡駅の北方約4kmに位置する。二上山南麓の中央部にあたる丘陵地とその間折谷からなり、眼下には小矢部川が北流する。

二上山

二上山は西側の西山丘陵と海老坂断層によって区画され、南北3.5km、東西4.5kmの山塊を形成している。二上山はいくつかの峰からなり、主峰（東峰、奥の御前、274m）と、西峰（城山259m）があり、北側に大師ヶ岳（254m）、小竹山（摩頂山251m）、東側に鉢伏山（211m）が見られる。北東側は富山湾に臨み、東側は伏木台地があり、小矢部川、庄川の河口となっている。西側は海老坂峠があり国道160号線が通っている。北西側は田子台地が広がり、水見平野へと続いている。南側は射水平野が広がる。

二上山は東北東に主軸を取るドーム状構造からなる。主体となるのは第3紀の新生代の中新世・鮮新世からなる地層である。また、山塊の周辺は台地状の地形が取り巻いており、大まかに2段の段丘からなる。海拔100m前後には二上山北側を中心に岩崎鼻灯台から自然休暇村のある台地があり、海拔30m前後には伏木台地、田子台地がある。これらの台地は主に第4紀の地層からなる。二上山南側は、伏木矢田から城光寺北側にかけて矢田砂岩層が分布する。城光寺から谷地付近には城光寺泥岩層が分布している。

旧二上村

北側に二上山が位置し、その南麓一体に広がる。西側から東側へ小矢部川が蛇行しながら富山湾へ注いでいる。旧二上村は明治22年に、二上、下八ヶ新、守護町、南八ヶ新、守護町新、渡り、二上新の7ヶ村が合併し成立したものである。大正6年には樋開発村の大字「城光寺」が合併している。二上山南麓沿いに西側から上二上、谷地、院内、城光寺の集落が位置している。下二上は平野部側の小矢部川寄りに位置している。高岡の北部地域であり、それぞれ高岡市の現行大字となっている。

二上院内

二上山南麓の東側に位置する谷部を指して院内、二上院内とされている。山麓の丘陵に囲まれた大きく3方向に分かれる枝葉状の谷である。東側の最も深い谷が院内大谷である。昭和37年には圃地造成がなされ山園町が成立した。山園町中央部奥の丘陵上に二上射水神社の摂社である院内社が鎮座している。

二上神

古くから二上山は信仰の対象とされ、神として崇められてきた。万葉集集録の大伴家持の「二上山の賦一首」にも二上山の神が詠まれている。二上神は宝龜11年（780年）從五位下に叙せられる。これを始まりとして、六国史などに5回記載されており、貞觀元年（859年）正三位に登っている。その後、二上神の名は史料から見られなくなる。「延喜式」神名帳にも記載はない、代わって射水神社が初見される。正応4年（1291年）の「白山記」によれば、氣多神が越中一宮となり、二上神が敗れたとされる。二上南麓の二上谷地には、かつて二上神社が所在した。神仏習合の形態をとり、別当寺として二上山養老寺があった。貞亨2年（1685年）の『寺社由来緒書上』では養老元年（717年）開基とされる。往古は講堂、鐘樓、堂塔、四十九院等、寺数3,800坊を数えたとされる。境内は尼門を構え、東門は城光寺村、北門は大田村渋谷、南門は大門村（現大門町）、西門は手洗野村にあり、この内が守領であったとされる。神仏習合により二上山養老寺となつた経緯は不明である。別当寺の金光院には平安時代後期の聖觀音立像や、二上神社に宝徳2年（1450年）在名の青銅製雲版があることから、平安時代後期には存在していたものと思われる。

戦国時代には兵火に遭い衰退したが、慶長15年（1610年）に前田利長により社殿の修築がなされ、越中国一円での知識米の徵収を許したとされる。

近世に入り式内社への関心の高まりから射水神社を二上神とする見解が定着する。慶応4年（1868年）には神仏分離令が出され、明治2年（1869年）には二上山権現が廃絶となり、射水神社が復活させられる。明治4年（1872年）には二上神社を式内社の射水神社とし、國幣中社とされた。明治8年（1876年）には古城公園に移設され、二上山山麓の二上神社は射水神社の分社とされた。大正11年（1922年）には祭神として二上神が復活されている。戦後になり二上山麓の射水神社は、越中總社射水神社として独立するに至っている。

史料的に不明確ながらも、二上神や二上神社の祭りは、古代の二上山の神に対する信仰に由来しているといえる。

守山城

二上山の城山山頂に所在する山城である。射水、氷見の平野部を一望できる地に位置する。築城時期や築城者は不明ながら、南北朝時代の史料に初見される。戦国時代には神保氏の居城となる。永正16年（1519年）には長尾景が越中に侵攻の際、守山城を攻め山麓に放火している。永祿3年（1560年）に上杉謙信に攻められた後、神保氏の居城となるが、佐々成政に支配が移る。その後、天正13年（1585年）に豊臣秀吉が佐々成政を攻めて降伏すると、加賀藩2代藩主前田利長が入城している。二上山麓の守山一帯は城下町として栄えたとされる。慶長2年（1597年）に前田利長が富山城に移った後に廃城となった。

交通路

古代の北陸道は小矢部川左岸から西山丘陵沿いを通り、二上付近に至るとされる。この間の駅路としては高岡市麻生谷付近に川人駅があり、国府近辺の日理駅を通り、白城駅に至るとされる。日理駅の位置については諸説あり、国府隣接地か、二上地内に比定する見解がある。

二上地内は、南北朝時代に越中守護職にあった斯波氏の守護所が置かれていたとされる。近世には、小矢部川左岸地域と高岡を結ぶ箇所に当たり、氷見往来として海老坂峠を越え氷見に通じる交通路として機能していた。また、旧庄川と千保川との合流地点でもあり、水運が発達した。

2. 従来の知見

山田町遺跡

昭和47年刊行の『富山県遺跡地図』には記載されていないが、昭和37年の市営住宅造成に伴い多数の遺物が出土したとされる。近年の開発による遺物の出土や、開発に伴う発掘調査によりその存在が明確になった。

二上周辺の古墳

昭和55年から西井龍儀氏により西山丘陵に所在する古墳の踏査・研究が行われた。昭和57年には城光寺古墳群B支群の調査が実施された。『昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報』において西井氏により「二上周辺の古墳」が発表され、当地区における古墳の全体像が明示された。

分布調査

昭和62年に当遺跡を含む二上地区、守山地区の二上山南麓一帯を対象に、当市教育委員会により分布調査が実施され、土師器、須恵器、珠紋が採集されている。これにより、当遺跡の存在が確認され谷部全域が遺跡範囲となった。遺跡の範囲確認と内容の把握、総括を行われ、昭和62年度に『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報V』に報告された。



第1圖 跟踪位置圖(1) (1/15万)



第2図 遺跡位置図〔2〕 (1／5万)

山園町遺跡院内社参道地区

平成3年10月に山園町、院内両町内の氏子の寄進により、院内社参道の整備工事が行われた。その際、参道脇に地下の空洞があることが確認された。その後の協議により、緊急発掘調査を実施した。その結果、東西に玄室を有する中世地下式塚を確認した。出土遺物は、土師器、珠洲、瀬戸がある。平成3年度に『市内遺跡調査概報III』で報告された。

院内東横穴墓

平成7年度に小矢部川水系院内大谷砂防改良工事に伴い、院内大谷の東側斜面擁壁工事が行われた。工事中に埋蔵文化財の発見の連絡があり、協議の結果、発掘調査を実施した。検出遺構は横穴墓1基である。出土遺物は須恵器、直刀、刀子、金環、ガラス小玉がある。平成9年度に『院内東横穴墓調査報告』で報告された。

3. 遺跡の分布状態

院内周辺の遺跡

院内周辺の遺跡として、当遺跡東側においては、上二上集落の周辺に上二上遺跡、上二上東遺跡がある。二上射水神社のある谷内谷の奥には二上谷内遺跡があり、昭和初年頃に遺物が採取されている。南西側の平野部には守護町遺跡がある。また、当遺跡西側にはかつて多くの遺跡が存在した。二上塙園南西隅には城光寺平子遺跡が存在したが、塙園造成工事に伴い破壊されている。繩文土器、十師器が採集されている。城光寺運動公園周辺の台地上には、城光寺表上野遺跡、城光寺上野遺跡が存在した。いずれも、土砂採掘により消滅し、繩文土器を中心に、土師器、須恵器が採集されている。東側の城光寺谷には、谷の奥側に城光寺遺跡が位置する。藤巻神社周辺には藤巻神社遺跡がある。谷の東側にある矢田上野台地上には矢田上野古墳群、高美町遺跡があったが、土砂採掘等により破壊されている。

院内の谷をめぐる遺跡

二上山南麓の丘陵裾部は幾筋もの谷部を挟んで枝状に広がる。山崎町遺跡は4条の丘陵末端部が延びている。それぞれの丘陵尾根の先端部には古墳群が位置する。西側の県立二上青少年の家のある丘陵の東南東側には鳥越古墳群C支群がある。前方後方墳1基と方墳2基である。北西側の丘陵先端部には、院内古墳群B支群があり、円墳4基である。北側の丘陵の院内社背後には、院内古墳群A支群があり、方墳4基である。東北東側の二上塙園から延びる丘陵先端部には、城光寺古墳群C支群があり、円墳1基、方墳2基である。

二上山麓の古墳群

二上山南麓には数多くの古墳が確認されている。二上山の南西側の東海老坂地区には、東海老坂ダイラ古墳群がある。方墳1基、円墳1基があり、2号墳は四隅突出墳の可能性がある。また、谷を挟んで東側には東海老坂ムカイ山古墳群があり、前方後方墳1基と円墳1基からなる。東海老坂地区東側、上二上集落の北側尾根上には二上古墳群がある。最高所には二上経塚があり、前方後方墳1基、方墳4基、円墳4基がある。上二上集落東側と谷内集落間の台地上には、谷内A・B古墳群がある。西側が谷内B古墳群で、円墳2基、方墳6基からなる。東側の南へ張り出す丘陵上に谷内A古墳群がある。円墳3基である。

谷内集落の東側、馬越台地上には、馬越古墳群A～C支群が位置する。A支群は方墳2基、円墳1基からなり、この内の3号墳は四隅突出墳の可能性がある。B支群は県立二上青少年の家のある台地上に位置する。かつて複数の古墳が存在したとされるが、現在は円墳2基、方墳状遺構2基が残る。C支群は二上青少年の家がある台地から東側へ延びる丘陵の先端部に位置する。先端部に円墳1基があったが消滅した。院内東側の二上塙園背後の丘陵上に、城光寺古墳群A・B支群があり、南西側の丘陵先端部にC支群がある。A支群は西側に位置し、円墳3基と、工事により消滅した円墳1基がある。東側のB支群は、円墳4基からなる。市営城光寺球場、陸上競技場のある台地は寺山台地と呼ばれ、かつて5基以上の古墳からなる寺山古墳群があった。また、城光寺谷の北東側、矢田上野台地の北西側の尾根上に、東上野II古墳群がある。円墳5基と方墳4基からなる。城光寺谷の奥には東上野I古墳群がある。矢田谷に挟まれた丘陵尾根上に位置する。前方後方墳1基、方墳2基、円墳3基からなる。3号墳は前方後方墳の可能性がある。城光寺集落の東側、矢田上野台地上に、11基以上の矢田上野古墳群が存在した。現在は2号墳のみ残し消滅している。

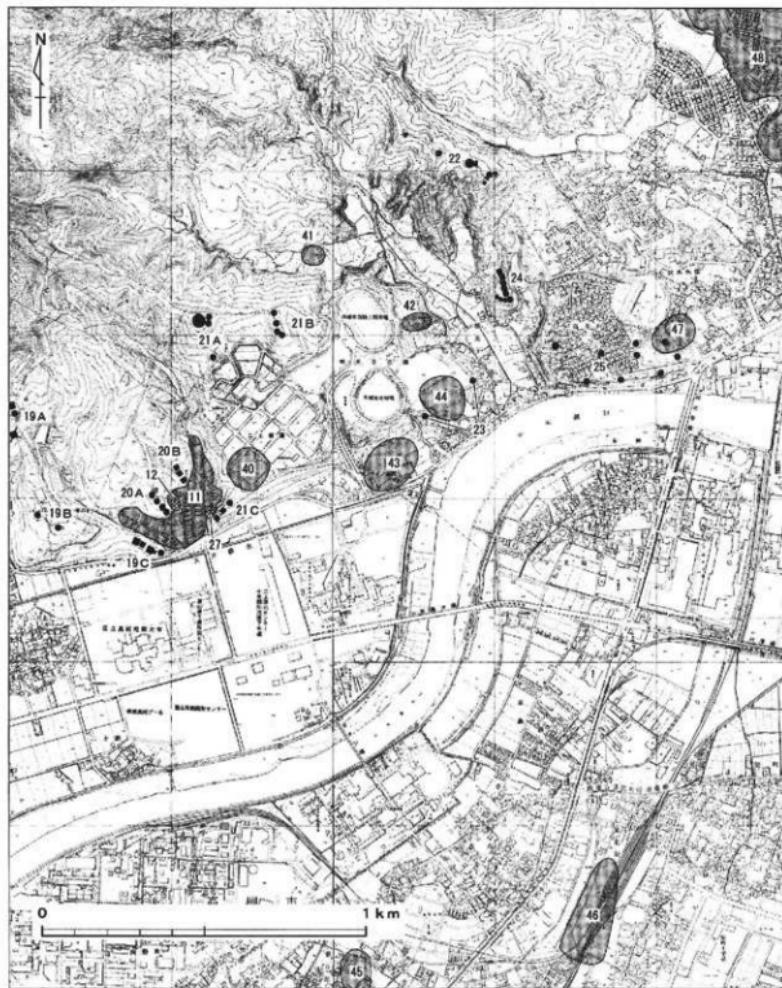
二上横穴墓群

二上山南麓の上二上集落にある金光院の背後にある。標高10～50mの斜面に築かれており、泥岩質の岩盤に構築されている。現在4基の横穴墓が確認されている。



第3図 遺跡地図【1】（1／1万5千）

13. 須田不動山古墳群、14. 西海老坂小田谷内古墳群、15. 東海老坂ダイラ古墳群、16. 東海老坂ムカイ山古墳群
 17. 上二古墳群、18. 谷内古墳群、26. 上二上横穴墓群、28. 須田藤の木遺跡、29. 百櫛宮田遺跡、30. 須田不動山西遺跡
 31. 西海老坂遺跡、32. 守山城跡、33. 上二上遺跡、34. 上二上経塚、35. 三上山頂遺跡、36. 三上谷内遺跡
 37. 上二上東遺跡、38. 守護町遺跡、39. 向野遺跡



第4図 遺跡地図〔2〕(1/1万5千)

11. 山園町遺跡、12. 山園町横穴墓群、19A. 烏越古墳群A支群、19B. 烏越古墳群B支群、19C. 烏越古墳群B支群
 20A. 院内古墳群A支群、20B. 院内古墳群B支群、21A. 城光寺古墳群A支群、21B. 城光寺古墳群B支群
 21C. 城光寺古墳群C支群、22. 東上野I古墳群、23. 寺山古墳群、24. 東上野II古墳群、25. 矢田上野古墳群
 27. 院内横穴墓、40. 城光寺半子遺跡、41. 城光寺遺跡、42. 藤巻神社遺跡、43. 城光寺表上野遺跡
 44. 城光寺上野遺跡、45. 江尻A遺跡、46. 驚北新遺跡、47. 高美町遺跡、48. 越中国府関連遺跡

第2節 調査経過

1. 調査に至る経緯

工事計画

高岡市域の北側に二上山が聳え、この二上丘陵から海老坂の断層崖を介して西方には西山丘陵が続いている。これらの丘陵は樹枝状の谷を発達させると共に、急傾斜の地形となり、災害が発生しやすい所となっている。これに対し、所管の富山県高岡土木事務所（現・富山県高岡土木センター）は、さまざまな砂防工事を実施してきている。急傾斜地を含むところの丘陵斜面（山腹）における遺跡（埋蔵文化財包蔵地）の認定は、現地踏査を主体とする地表観察からは、丘陵尾根筋や平野部に比べて難しい。不時に遺跡が発見されることが多々ある。二上山南麓に位置する山園町は、丘陵尾部で閉まれた谷地形の中にある。昭和37年の宅地造成時に上器類の出土をみており、山園町遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。また山園町と付近一帯は「谷内（2）地区急傾斜地」とされている所である。

山園町の東側の丘陵には近年、二上塁園が造成され、南端部には城光寺古墳群C支群がある。平成7年度にこの山園町側の斜面地で小矢部川水系院内大谷砂防改良工事が実施され、この時横穴墓が発見され「院内東横穴墓」と命名した。北側の丘陵には射水神社の摂社の院内社が鎮座し、その奥には院内古墳群A支群がある。この参道工事の時に中世の地下式壙が発見された。北西側は院内古墳群B支群を載せる丘陵が南南東方向に張り出している。西侧には富山県立二上青少年の家があり、南東方向へ延びる丘陵端部に鳥越古墳群C支群がある。

谷内（2）地区急傾斜地は、二上山南麓の中央部に当たる。ここを対象とする急傾斜地崩壊対策工事は、もたれ式擁壁工と重力式擁壁工を築造するもので、平成6年度から6箇年計画で施工に移された。西側の二上青少年の家のある丘陵の東側斜面の工事から先に行われた。谷の奥側から平野部側へ進み、平成10年度の工事は、丘陵端部の鳥越古墳群C支群の東側丘陵に達した。

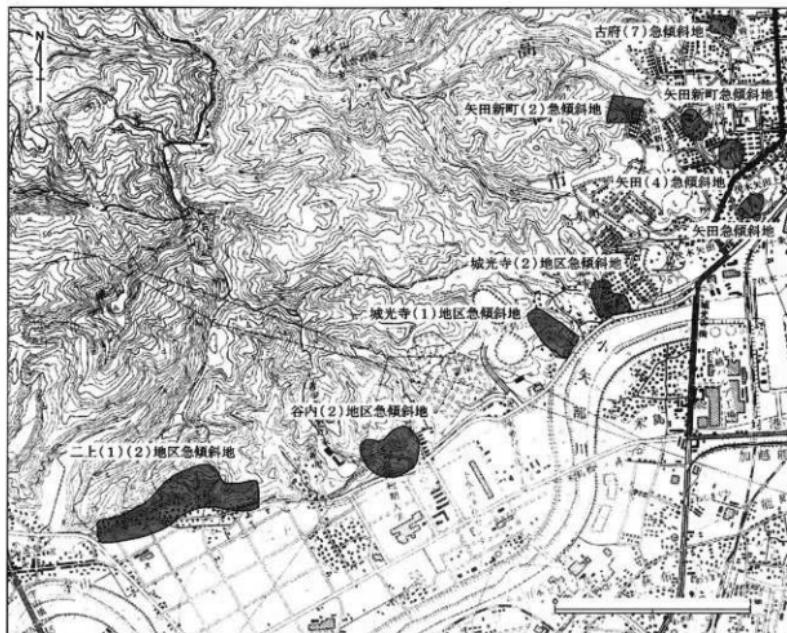
協議

この工事により占墳の裾部が一部削平された。このことの確認と今後の防止の為に、平成11年5月に、現地で協議を実施した。富山県高岡土木事務所・高岡市の主管課である建設部土木維持課・高岡市教育委員会文化財課の3者である。この時に、当該の山園町遺跡にかかる工事の件が話題となった。谷内（2）地区急傾斜地の次期の工事が、南南東方向に張り出す、院内古墳群B支群を載せる丘陵の斜面で実施されるものであり、遺跡保護の為の何らかの対策が必要と判断された。

平成11年6月に、前回と同様の3者で、山園町の現地で以下の内容の協議をもった。

1. 埋蔵文化財の試掘調査を平成11年度内に実施すること。
2. 本調査が必要となった場合は、平成12年度に実施することにし、平成11年度に予定していた工事を延期すること。
3. 上記のことも含め地元に説明すること。

このような経緯で、試掘調査を実施する方針が決まり、細部の調整や地元説明会を行った。



第5図 二上山周辺急傾斜地崩壊危険地区等位置図（1／2万5千）

工事計画では、当該の丘陵を取り囲むように、東・南・西側の各斜面で1年に1箇所づつ急傾斜地崩壊防止工事がなされるものであり、当面の予定地である東側斜面で試掘調査を実施することに至った。

2. 発掘調査の経過

計画策定

東側斜面に続き、南側斜面でも試掘調査を実施した。その結果、造構、造物が確認され、丘陵周辺部の工事範囲全体に調査の必要性が生じた。富山県高岡土木事務所と市文化財課との協議により、調査実施についての具体的な準備が立てられた。平成14年度まで現地調査を実施し、各年度の本調査終了後に工事を行うこととなった。富山県高岡土木事務所の委託を高岡市教育委員会が受託する形で調査を実施することになった。以下の調査計画が立てられ、実施に移された。

各年度の調査

高岡市教育委員会が調査主体で、各年度の調査は以下の通りである。

平成11年度：丘陵東側工事部分の試掘調査

平成12年度：丘陵南側工事部分の試掘調査、丘陵東側工事部分の本調査

平成13年度：丘陵西側工事部分の試掘調査、丘陵南側工事部分の本調査

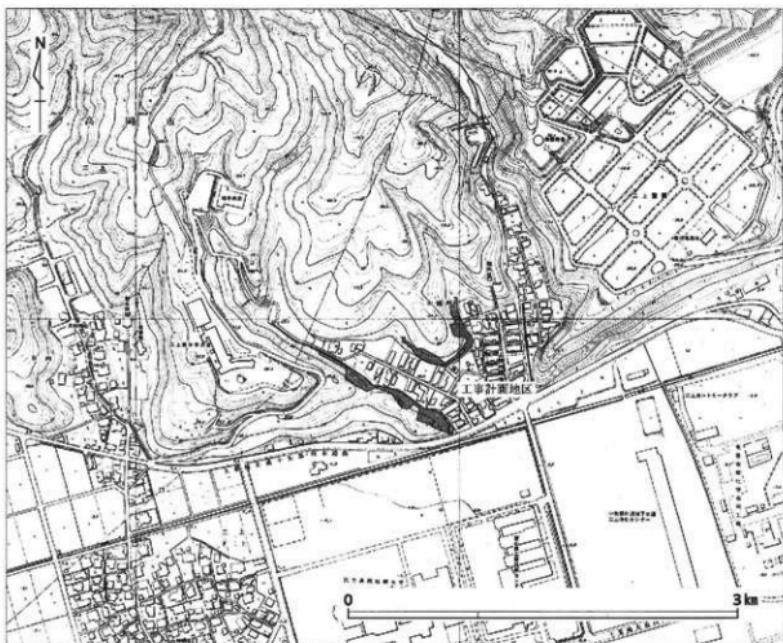
平成14年度：丘陵西側工事部分の本調査

平成11・12年度の調査は、高岡市教育委員会の山口辰一・荒井隆が調査担当で、現地の作業実務は、民間調査機関、山武考古学研究所（所長：平岡和夫）に委託して実施した。調査員は、近江屋成陽、間宮正光、日沖剛史、矢島博文である。

平成13年度の調査は、荒井が調査担当で、民間調査機関、中部日本鉱業研究所（社長：津嶋春秋）により、調査員1名（井伊浩一郎）の派遣協力を受けた。

平成14年度は、荒井が調査担当として実施した。

報告書作成作業は、平成15年度事業として実施した。



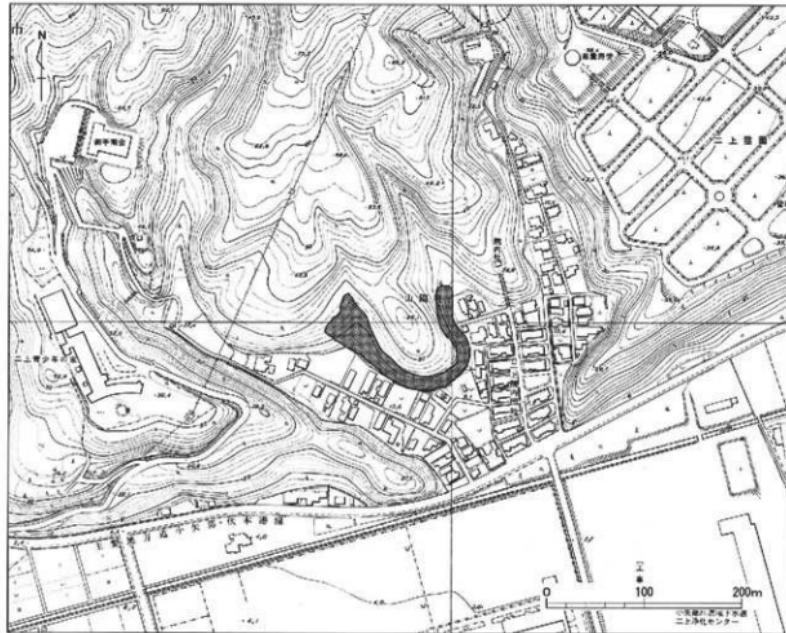
第6図 工事区域位置図 (1/7,500)

第3節 調査概観

1. 調査の方法

調査地区の設定

山岡町跡は、二上山の南麓南側に位置する谷部一帯に広がる。周囲には丘陵先端部が迫り、丘陵上には古墳群が分布し、丘陵斜面には院内社の参道において中世地下式壙が発見され調査された。院内大谷側では院内東横穴墓が発見されている。これらの調査により調査対象地区の丘陵周辺地や斜面地でも遺構の存在することが予想された。平成11年度の試掘調査において横穴が確認され、中世を中心とする遺物が出土した。このことから、調査地区は年度ごとの工事範囲を対象に設定した。次年度の工事範囲において試掘調査を先行して実施し、遺構・遺物の状況を確認しながら本調査を平行して行うこととなった。調査は、平成11年度から平成14年度にかけて行い、谷部中央の丘陵東側斜面から南側斜面を経て、西側斜面へと調査地区を移行しながら進めた。



第7図 調査地区位置図(1/5,000)

各年度の調査における現地調査期間・対象範囲・調査面積は以下のとおりである。

平成11年度：平成11年11月15日～同年12月22日。丘陵東側斜面（試掘調査地区）、調査面積130m²

平成12年度：平成12年6月14日～同年10月13日。丘陵東側斜面（本調査地区）

丘陵南側斜面（試掘調査地区）、調査面積780m²

平成13年度：平成13年5月21日～同年11月27日。丘陵南側斜面（本調査）

丘陵西側斜面（試掘調査地区）。調査面積817m²

平成14年度：平成14年5月2日～同年11月29日、丘陵西侧斜面（本調査地区）、調査面積1,100m²

遺構調査

調査に先立ち調査地区的樹木の伐採がなされた。調査地区が丘陵斜面地に位置し、人家の背後に当たるため、重機の進入が難しいこともあり、表土除去の大半は人力により行った。斜面のため場所によっては崩落土が厚く堆積する箇所もあり、安全対策上からも足場を設定して慎重に作業を進めた。調査地区内は樹木の根が多数残り、掘削は難航した。

遺構の検出作業は斜面地の崩壊の恐れを考慮し、まず試掘坑を設定し可能な限り検出範囲を広げた。斜面に沿った縦方向の試掘坑も設定し、崩落土の堆積状態の確認を行った。その後、遺構の範囲を中心に崩落土を除去し、遺構検出を行った。調査地区内の斜面地周辺では中世段階で大規模な平坦面等の造成がなされていることがわかり、その後の時代を経て崩落した土砂が厚く堆積していることを確認した。

平成12年度の本調査地区では、丘陵を構成する土層の中に泥炭層があり、この比較的安定した土層を中心横穴が構築されていた。横穴内に堆積した土は、全てふるいにかけ遺物の検出を行った。

平成13年度の本調査地区では平坦面と斜面に平行して走る溝を確認し、珠洲を中心とした多数の遺物が出土した。遺物には五輪塔もあり、墓地の存在を想定させる資料も見られた。

平成14年度の本調査地区では、平成13年度の試掘調査により、盛土を伴う大規模な遺構が確認されていた。このため、調査地区周囲を踏査し、遺構は斜面上部に平坦面を構築するなど予想を超える範囲の広がりを確認した。このため、周囲の測量調査を行い、現況の遺構範囲と性格の把握に努めた。

記録作成

記録の作成の内、写真撮影は6×8判白黒フィルム、6×8判リバーサルフィルム、35mm白黒フィルム、35mmリバーサルフィルム、35mmカラーネガフィルムを使用して遺構・遺物の撮影を行った。撮影に際しては、調査地区的状態、遺物の出土状態、遺構の状態を示せるよう注意して行った。全景写真の撮影については、地上から行うもののはか、無線操縦ヘリコプターによる空中写真撮影を行った。

測量による図面の作成は、部分遺構図を1/100の縮尺で行い、遺構平面図、遺構断面図、遺物分布図を1/20の縮尺で行った。

年度ごとの遺跡・遺構全体図は、無線操縦ヘリコプターによる空中写真測量を行った。

グリッド

調査地区的グリッドは世界測地系の平面直角座標系の第7座標系（原点は北緯36° 00' 00"、東経137° 10' 00"）に合わせた。この公共座標を基にして5m×5m方眼で、調査地区毎に設置した。調査地区や遺構図には南北方向、東西方向に座標の数値を表記した。全体図には一边10m四方を一区画とし、グリッドを割り付け、メッシュを表示した。

2. 調査概要

検出遺構

4カ年の調査を通じて全体の遺構数は以下の通りである。

横穴；5基、基壇状遺構；1箇所、土塁状遺構；1箇所、濠状遺構；1箇所

平坦面；4箇所、盛土状遺構；2箇所、谷状遺構；1箇所

土坑；10基、溝；9条

この他に、小穴6基を確認している。

出土遺物

調査地区全体から出土した遺物は以下の通りである。

土器・陶磁器類：赤生土器、土師器、須恵器、珠洲、越前、瓦器、青磁、白磁、瀬戸美濃

越中瀬戸、肥前

土製品：土錐

石製品：五輪塔、砥石



第8図 調査地区設定図 (1/2,500)

第2章 各調査地区の調査

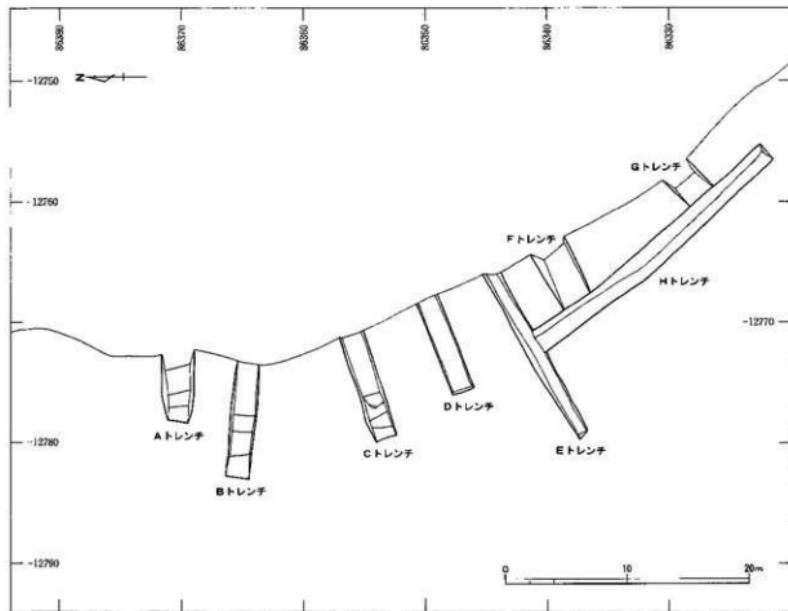
第1節 平成11年度調査地区

調査地区の位置

平成11年度の調査地区は、3方向の枝葉状に伸びる谷の内、遺跡中央部の丘陵東側斜面に位置する。院内社のある丘陵の谷を挟んだ南西側、山園町の北西側、工事範囲の東側部分にあたる。丘陵上には院内古墳群A支群が位置する。調査地区は標高約12m～25.5mで、調査地区の北側より南側が急斜面となる。

調査地区的現況

調査地区周辺の二上院内地区・山園町地区は、戦前から主に水田や畑として利用されていた。東側の谷部



第9図 平成11年度 試掘調査地区全体図 (1/400)

は昭和37年に市営団地が造成され、山園町と称されている。西側の院内地区も時を同じくして宅地化され、現在に至る。

調査開始時点では調査地区の斜面全般が山林となっており、一部谷部を含む。北側は谷が幅を狭めながら山中奥へと延びている。谷の奥は一段高くなっている、水田や畑の跡と思われる。南側は、人家の背後に隣接しており、斜面は削平を受けて改変されていると思われる。

調査地区的堆積土層

調査地区内の十層の堆積状態は、第9図にある各トレンチで確認した。斜面上部から下部にかけて、厚さ10~30cmの表土があり、その下層に厚さ20~25cm程度で暗褐色粘質土がある。その下層に白色土の泥岩片を含む黄褐色十層があり、基盤層である灰白色泥岩層となる。調査地区南側では、基盤層上に風化に伴う黄褐色土層が厚く堆積している。

調査地区中央部で設定したCトレンチでは、基盤層と思われる砂岩質の地層が、トレンチ上部から中段へ向かって急勾配で傾斜しており、中段に横穴2基が構築されている。

調査の成果

平成11年11月11日から同年12月22日にかけて実施した結果、横穴と思われる開口部を2基確認した。周辺部分にも他の横穴が存在する可能性が高いことを確認した。調査地区内では珠洲などの中世の遺物が出土しており、中世において斜面上や斜面周辺において人的活動がなされていたことが想定される。

第2節 平成12年度調査地区

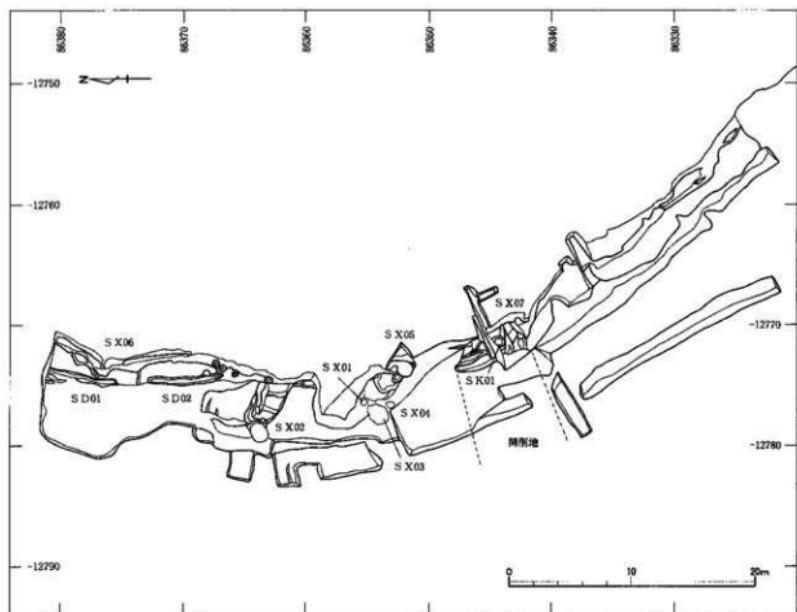
1. 本調査地区

調査地区的位置

平成12年度の本調査地区は、平成11年度の試掘調査地区、遠跡中央部の斤険南側斜面、丁寧範囲の東側部分にあたる。標高約18~26mの斜面地である。

調査の概要

平成11年度に行われた試掘調査の結果、横穴や中世の遺物が確認されたことにより、本調査が実施されることとなった。作業の安全対策を考慮に入れ、作業用足場を設置し斜面上部より表土を掘削し、順次下部へ掘下げた。一部の箇所を除き基本的に人力によって行った。試掘調査の結果により、横穴検出箇所の周辺部は慎重に掘下げた。調査地区中央部では、砂岩質ないし泥岩質の基盤層が斜面上部から下部にかけて堆積していた。この土層を中心に横穴が構築されている。横穴の覆土は全てふるいにかけ、遺物の確認に努めた。横穴の検出面が現地表面より低い箇所もあり、中世を主体とする生活面は土砂の堆積により現況より低いと思われる。調査地区南側は、人家の背後に当たることもあり、地図の確認にとどめ、全面の表土掘削は行わなかった。



第10図 平成12年度 本調査地区全体図 (1/400)

調査の成果

平成12年6月14日から同年10月13日にかけて実施した結果、横穴5基、平坦面1箇所、谷状遺構1箇所、ピット3基を確認した。横穴については、表道部の痕跡が見られず、古代の横穴墓と比較すると形状に差異が認められる。このことから中世段階で古墳時代の横穴を再利用した可能性も含め、中世の所産と考えている。

調査地区北側では平坦面を確認した。斜面をL字状に整形し、平坦面を作り出している。調査地区中央では上部の幅約8m、下部の幅約3mの谷地形の某部を検出した。下部は盛土により平坦に整えられている。旧地形を利用した何らかの施設の存在が伺われる。調査地区内では株洲などの中世の遺物が出土しており、中世において斜面上や斜面周辺において人的活動がなされていたことが想定される。また、株洲の中に通常では見られない遺物も見られており、調査地区周辺が信仰に関連する場であった可能性がある。

2. 試掘調査地区

調査地区的位置

平成12年度の試掘調査地区は、遺跡中央部の丘陵南側斜面、工事範囲の中央部分、二上院内公民館の北側

にあたる。調査地区は標高約16m～22mで、中央部より東側が急斜面となる。

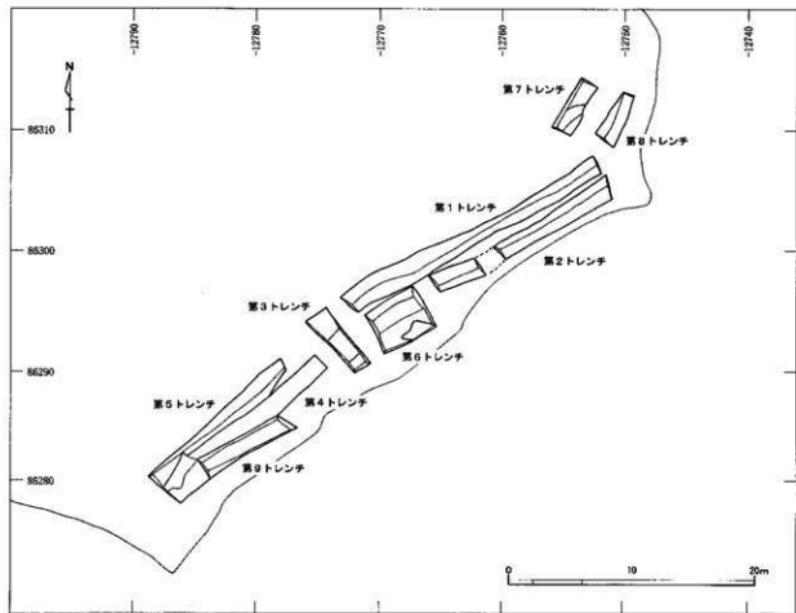
調査地区的現況

調査地区周辺の現況は、山林と一部畑である。斜面の下部は傾斜が緩くなり、平坦な地形となる。調査地区南側は谷部中央の平坦地が広がり、宅地や畠地となっている。北東側は、人家の背後に隣接しており、斜面は宅地化と共に改変されている。

地元の話によると、調査地区周辺にはかつて、高岡市京町の西光寺の納骨堂及び参道があったとされる。その後、納骨堂の移転とともに畑となり、二上院内公民館が建てられ、現在に至る。

調査地区的堆積土層

調査地区内の十層の堆積状態は、第11図にある各トレンチで確認した。斜面上部から下部にかけて、厚さ10～30cmの表土（腐植土）があり、その下層に厚さ30～50cm程度で黄褐色砂岩質ないし泥岩からなる堆積土がある。その下層に基盤層である灰白色泥岩層がある。調査地区東側では、基盤層上に風化に伴う黄褐色土層が厚く堆積している。斜面下部には平坦面があり、表土下に厚さ20～30cmの暗褐色土層がある。一部に近年のカクランが見られる。



第11図 平成12年度 試掘調査地区全体図 (1/400)

調査の成果

平成12年6月28日から同年8月27日にかけて調査を実施した。その結果、平坦面と溝状遺構を確認した。調査地区内では珠洲などの中世の遺物が大量に出土しており、越前、青磁、白磁、瓦器等の多彩な遺物が見られる。時期は中世全般に及ぶと考えられる。中には灯明台形製品と思われる特殊な遺物があり、信仰に関連する遺物と思われる。また、五輪塔も出土しており、供養塔や墳墓の存在が想定される。また、弥生土器などの古墳時代の遺物が出土しており、丘陵上の院内古墳群との関連も注目される。

第3節 平成13年度調査地区

1. 本調査地区

調査地区の位置

本調査地区は、平成12年度の試掘調査地区、遺跡中央部の丘陵南側斜面、工事範囲の中央部分にあたる。標高約9~17mの丘陵裾部の斜面地である。

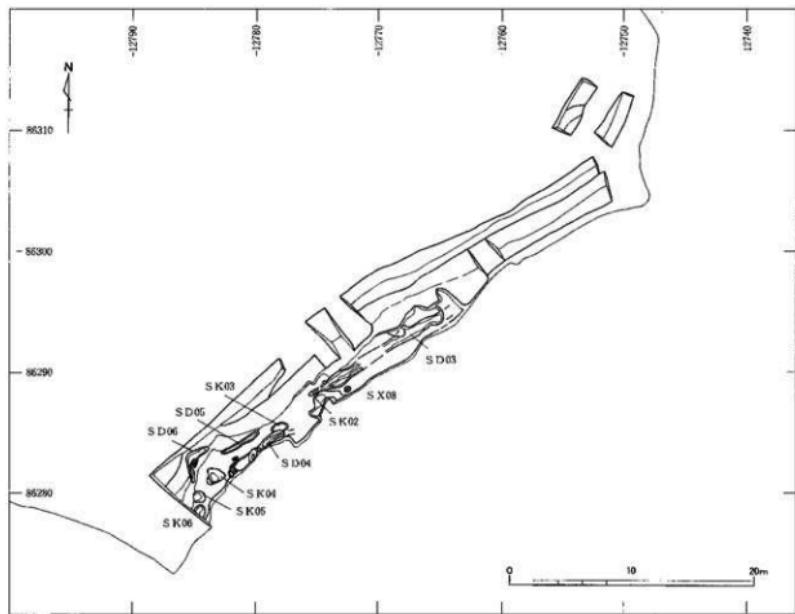
調査の概要

平成12年度に行われた試掘調査の結果、溝状遺構や多数の遺物が確認されたことにより、本調査が実施されることとなった。斜面上部より表土を掘削し、順次下部へ掘下げた。斜面下部の平坦面には遺構が存在しており、重機の進入が不可能なため基本的に人力によって行った。試掘調査の結果により、平坦面の周辺部は慎重に掘下げた。調査地区中央部から東側では、崩落上と思われる砂岩質乃至泥岩質土が厚く堆積しており、掘削に伴い崩壊する恐れがあった。また、調査地区東側は、人家の背後に当たることもあり、一部の確認にとどめ、全面の表土掘削は行わなかった。平坦面は表土と一緒にカクランに近年の廃棄物が含まれております、これらを除去して下層の遺物包含層（中世）を掘り下げ、遺構検出を行った。

調査の成果

平成13年5月21日から同年11月27日にかけて実施した。その結果、調査地区斜面下部では平坦面及び、上坑5基、溝4条、平坦面1箇所、ピット6基を確認した。平坦面は斜面をL字状に整形して作り出している。大規模な造成によるものと思われる。平坦面には斜面と平行に走る溝があり、排水の機能を有していたと思われる。昨年度の調査地区でも確認されており、斜面地を巡る溝か道路状の遺構として機能をしていた可能性もある。遺物は調査全体で平坦面を中心に大量に出土し、珠洲を主体に中世の遺物が最も多い。越前、青磁、白磁、瓦器等も見られ、時期は中世全般に渡ると思われる。

珠洲の中には灯明台形製品があり、通常の遺物と異なり、仏具に関する特殊なものである。周辺に信仰の場の存在が想定される。また、石製品では五輪塔の火輪が出土し、形状から南北朝時代のものと思われる。周辺に供養塔、墳墓の存在が想定される。この他に、弥生土器が出土しており、丘陵上の院内古墳群との関連が注目される。平坦面だけでなく斜面からの遺物の山上も見られることから、丘陵上も含めた遺跡の存在が考えられる。遺物には奈良平安時代のものも見られることから、弥生時代から中世に至るまで継続して営まれた集落遺跡としての性格が確認できた。



第12図 平成13年度 本調査地区全体図 (1/400)

2. 試掘調査地区

調査地区的位置

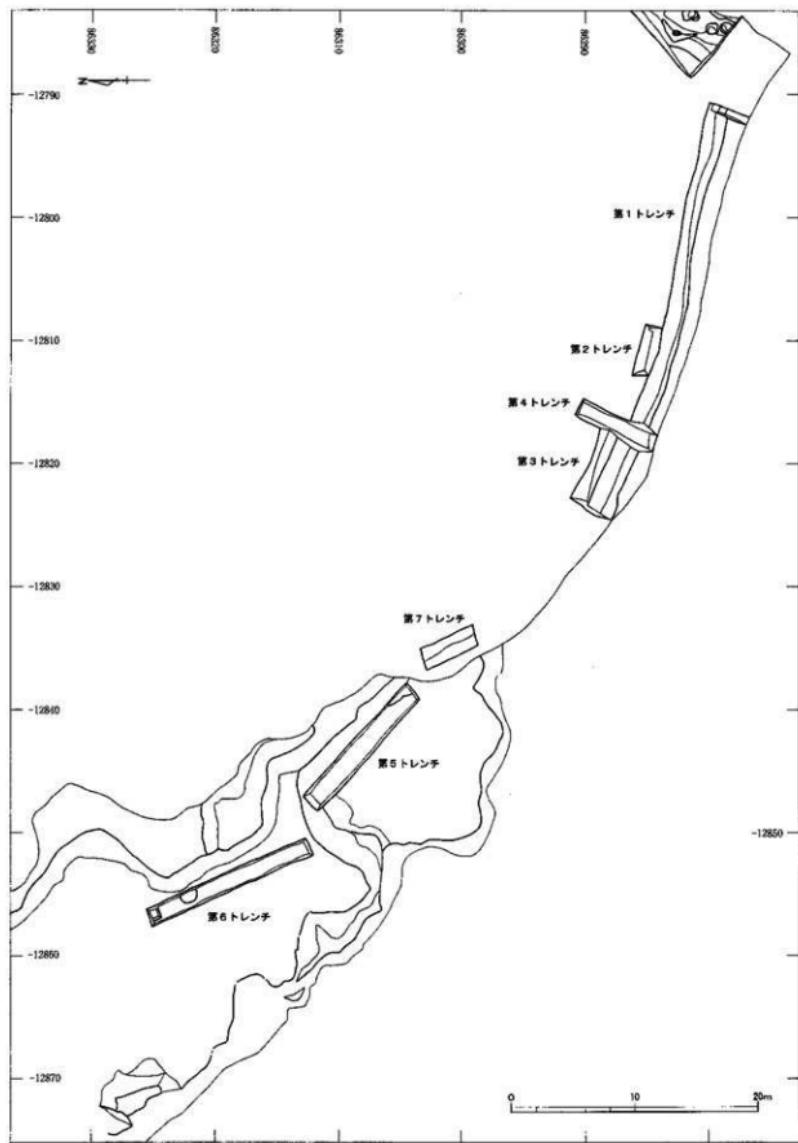
平成13年度の試掘調査地区は、遺跡中央部の丘陵西側斜面、工事範囲の西側部分、二上院内公民館の北西側にあたる。調査地区は標高約11m～24mで、北西側は谷地形に面し、中央部より南東側が急斜面となる。

調査地区的現況

調査地区周辺は全域が山林となる。調査地区南東側は急斜面となる。斜面裾部の一部は傾斜が緩くなり、狭い平坦な地形となる。丘陵に沿って平垣面が位置し、北北西方向へ段差を持って並ぶ。西側は島越占墳群のある丘陵に挟まれた谷部であり、院内地区の集落が位置している。

調査地区的堆積土層

調査地区内の土層の堆積状態は、第13図にある各トレンチで確認した。調査地区中央部から南東側では、斜面上部から下部にかけて、厚さ10～30cmの表土（腐植土）があり、その下層に厚さ30～50cm以上で黄褐色砂泥質乃至泥岩の十層がある。その下層に基盤層の灰白色泥岩層がある。調査地区北西側は表土（腐植土）の下層に暗褐色粘質土と黒褐色土層があり、この下層に黄褐色粘質土や灰白色粘質土の基盤層が見られる。



第13図 平成13年度 試験調査地区全体図（1/400）

調査の成果

平成13年8月6日から同年11月27日にかけて調査を実施した結果、調査地区北西側を中心に、基壇状遺構1箇所、土壠1箇所、平坦面2箇所、盛土状遺構1箇所、土坑などを確認した。調査地区内では主に珠洲や五輪塔などの中世の遺物が出土している。横穴の開口部と思われる箇所がある。これらは寺院や墳墓等の宗教施設である可能性があり、中世段階で、当時の権力者による大規模な造成によってなされたものと想定される。

第4節 平成14年度調査地区

1. 本調査地区

調査地区の位置

平成14年度の本調査地区は、平成13年度の試掘調査地区、遺跡中央部の丘陵西側斜面、工事範囲の西側部分にあたる。院内地区的北東側である。標高約10~23mの斜面地及び谷部である。

調査の概要

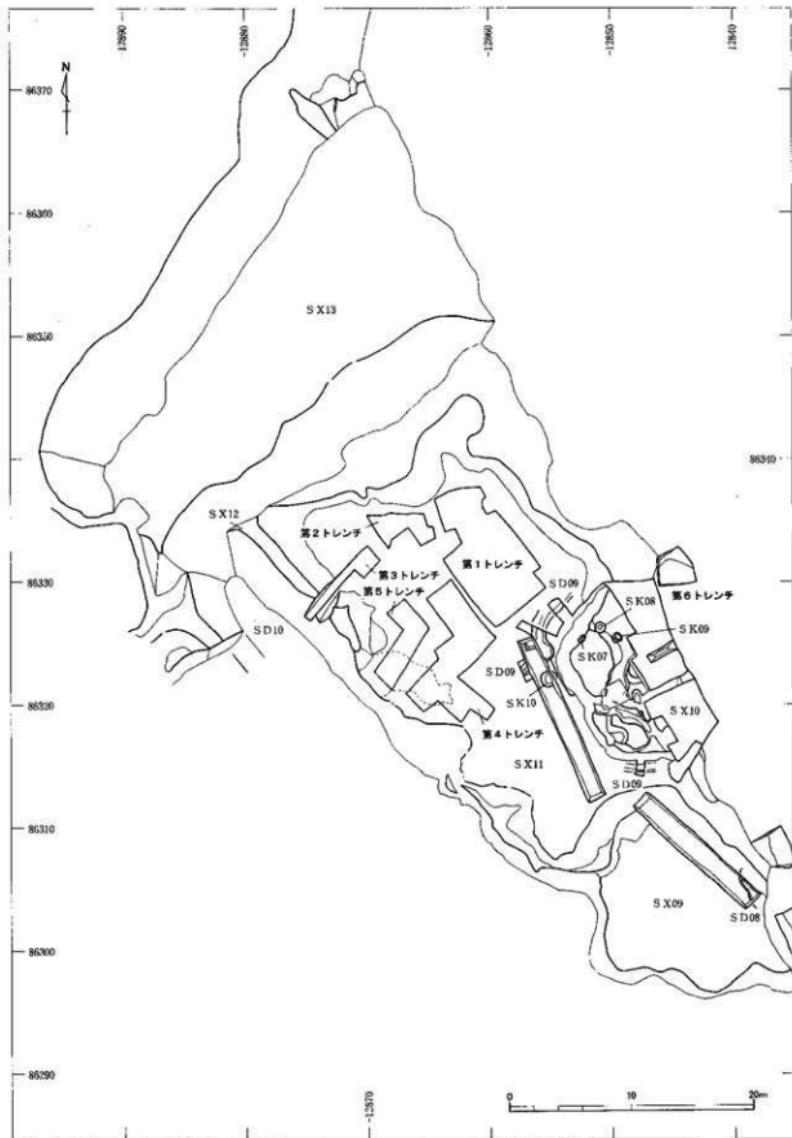
平成13年度に行われた試掘調査の結果、基壇状遺構や平坦面等が検出され、中世の遺物が確認されたことにより、本調査が実施されることとなった。急傾斜地のため崩落の恐れがあり、調査地区が狭く重機の作業が不可能なため基本的に人力によって行った。安全に配慮して足場を随時設定し、斜面上部より表土を掘削し、順次下部へ掘下げた。調査地区北西側は、試掘調査の結果により、遺構の遺存状況が良好と思われるため慎重に作業を行った。また、昨年度の調査で横穴と思われた開口部は、調査の結果、岩盤の割れ目であることが分かった。

基壇状遺構や平坦面の一部には、淡灰色泥岩の岩塊が斜面上方から堆積していた。この下層には埋没した樹木の根が残っており、比較的近年の堆積土と思われる。平坦面の東側にあたる丘陵頂部に、大穴があり、その掘削に伴う拂土が堆積したものと思われる。地元の話によれば鉄塔の移設に伴う基礎の跡であるとのことある。調査地区南東側では、崩落土と思われる砂岩質乃至泥岩質土が厚く堆積していた。調査地区中央部は人家の背後に当たることもあり、部分的な隙間にとどめ、全面の表土掘削は行わなかった。

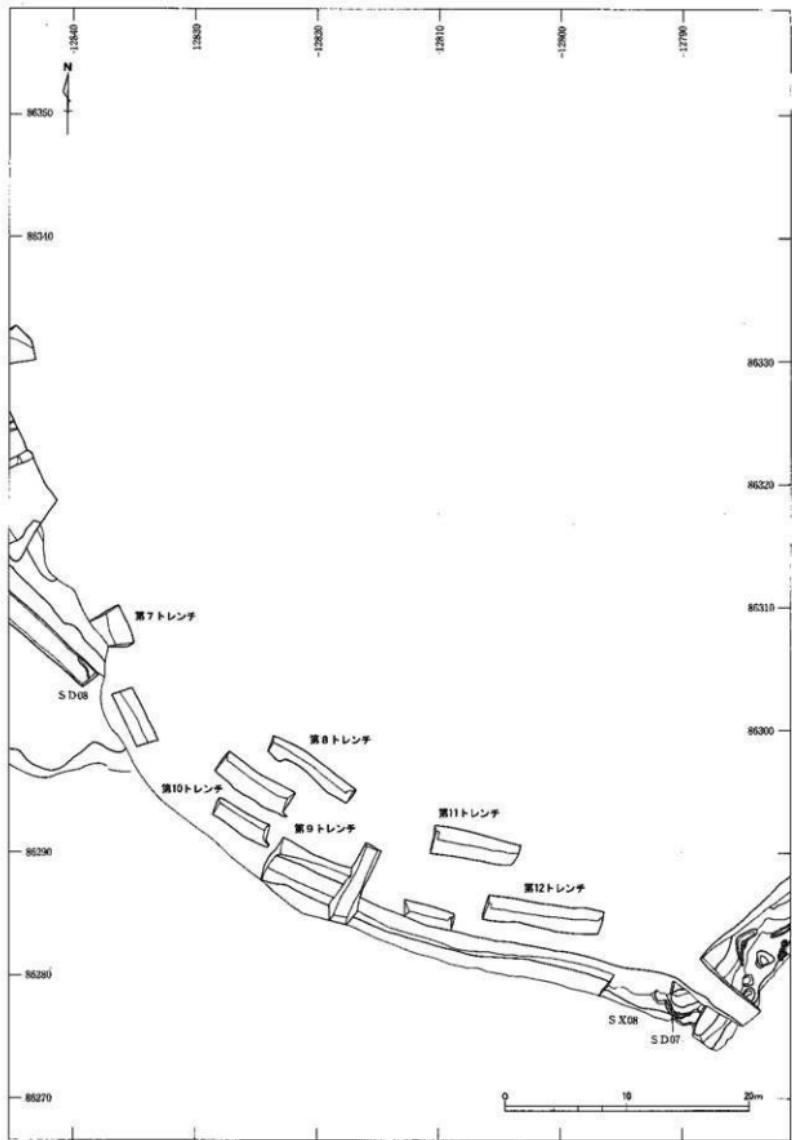
調査の成果

平成14年5月2日から同年11月29日にかけて調査を実施した結果、基壇状遺構1箇所、上壙状遺構1箇所、濠状遺構1箇所、平坦面2箇所、盛土状遺構2箇所、土坑、溝、ピット多数を確認した。調査地区北西側では、大規模な遺構を確認した。これらの遺構は、主に南東~北西方向を基本とする軸線を設定し、それに乗つ取つて規格的に配置されることを確認した。調査地区内では主に珠洲、青磁などの中世の遺物が出土している。特に調査地区南東端部では、平成13年度本調査地区同様に遺物が集中的に出土した。

土星の西側には濠状遺構を新たに確認した。調査地区沿いの排水路により破壊を受けているものの、平坦面や盛土状遺構を周囲から区画する意図を持つと思われる。南東側では平成12・13年度の調査地区から続く平坦面を確認した。これにより丘陵周囲には平坦面が巡り、通路として機能していた可能性がある。



第14図 平成14年度 本調査地区全体図〔1〕 (1/400)



第15図 平成14年度 本調査地区全体図〔2〕 (1/400)

第3章 遺構

第1節 横穴

1. 第1号横穴 (SX01)

遺構図面・図版

図面04・05、図版06・07。

概観

調査地区中央北側に位置している。南側で第3・4号横穴と隣接している。標高は約14.9mである。主軸は北38度西を向き、南東方向へ開口するものである。調査開始前は埋没していた。斜面部の表土を除去したところ、玄室奥壁側の天井部の一部が確認された。

構造

小型の横穴である。前側が消失し、玄室の床面と奥壁側のみ残存している。残存全長は0.5mである。

玄室奥壁側のみ残存しており、玄室の残存長は0.5mである。幅は、入り口側で0.56m、奥壁側で0.48mを計る。奥壁側隅部は丸く、周溝は認められない。床面の標高は、奥壁側で15.02m、入り口側で14.9mを計り、開口部に向かって低くなる。天井部は崩落して残存していない。奥壁側の天井部の床面からの高さは約0.3mを計る。

後造部については確認できなかった。墓前域は斜面に沿って縦長の長方形を呈する。南側へ向かって傾斜しており、東側は改変を受けて削平されている。長さ0.6m、北側での幅は0.5m、南側は0.4mを計る。第1・3・4号横穴前面に位置していることから、これら横穴共用のものと思われる。

遺物

確認していない。

2. 第2号横穴 (SX02)

遺構図面・図版

図面04・06・07、図版07。

概観

調査地区中央部北側、横穴群の最も北側に立地している。斜面中腹に位置する。南側の調査地区中央部に位置する第1号墓より約9m北側の所で確認された。標高は約15.5mである。主軸は北110度東を向き、南東方向へ開口するものである。調査前は埋没していたが、表土を除去すると前底部の輪郭と玄室入口が確認

された。天井部の殆どが崩落しており、床面の一部と壁の一部が残存していた。

構造

両袖式の横穴。梢円形の平面の玄室に羨道を持たず、前底部と思われる平坦面につながる。残存全長は1.74mを計る。玄室は後世に大きく改変されている可能性もある。

玄室床面は、長さ1.4m、幅は、奥壁で1.15m、奥壁側で1.37m、中央部で1.54m、前壁側で1.47mを計る。隅部は丸い。周溝は認められない。標高は、奥壁側で15.4m、中央部で15.35m、前壁側で15.4mを計る。奥壁側は前傾した後、丸くなつて天井部へ移行すると思われる。天井部中央から崩落しており玄室形状は不明である。床面からの高さは、奥壁側で0.7mを計る。

前底部は縦長のコの字形を呈している。長さ2.7m、前方での幅は、上部で2.3m、床面で1.8mを計る。

遺物

珠洲の擂鉢が出土している。

3. 第3号横穴（S X03）

遺構図面・図版

図版08・09、図版06・08。

概観

調査地区中央北側に位置している。北側で第1号横穴と南側で第4号横穴と隣接している。標高は約14.7mである。主軸は北68度東を向き、東北東方向へ開口するものである。調査開始前は埋没していた。平成11年度の試掘調査において、斜面部の表土を除去したところ、玄室入り口側の開口部の一部が確認された。さらに周辺の堆積土を除去したところ、玄室奥壁側の天井部や、玄室入り口側の基底部が確認された。玄室奥壁側の堆積土と天井部の間にはわずかに空洞が確認された。

規模

両袖式の横穴である。ほぼ円形の平面形態の玄室にごく短い羨道がつく形態である。残存全長は約1.7m、幅は、奥壁側で1.2m、中央部で1.4m、前壁側で1.2mを計る。隅部は丸くなり、ほぼ円形に近い形となる。床面の北側半分には溝があり入り口部まで延びている。開口部付近には貼床として敷かれた暗灰色土が見られる。床面の標高は、奥壁側で14.76m、中央部で14.75m、前壁側で14.72mを計り、ほぼ水平である。奥壁は前傾した後、ドーム形の天井部へ移行する。床面からの高さは、奥壁側で0.76m、中央で崩落しているものの約1.0mを計る。羨道部は玄室の中央部に付く。泥岩質の岩盤を検出する際に、堆積土中より長さ0.4m、幅0.7mの羨道部と思われる土層の変化を確認した。天井部は玄室天井部から下がることなく開口部に達している。崩落や後世の改変を受けていると思われる。羨道部として部分は僅かであり、玄室が玄門部を介して前底部へとつながる形態と思われる。前底部は斜面に沿って縦長の長方形を呈する。南側へ向かって傾斜しており、東側は改変を受けて削平されている。長さ0.6m、北側での幅は0.5m、南側は0.4mを計る。第1・3・4号横穴前面に位置していることから、これら横穴共有のものと思われる。

遺物

堆積土中から骨片1点が出土している

4. 第4号横穴（S X04）

遺構図面・図版

図面04・10、図版06・08。

概観

調査地区中央北側に位置している。北側で第3横穴と隣接している。標高は約15.2mである。主軸は北42度東を向き、北東方向へ開口するものである。調査開始前は埋没しており、平成11年度の試掘調査の際確認されている。斜面部の表土を除去したところ、玄室入口の一部が確認された。

構造

小型の横穴である。前側が消失し、玄室の床面と奥壁側のみ残存している。残存全長は0.6mである。

玄室の残存長は0.6mである。幅は、入り口側で0.5m、奥壁側で0.5mを計る。周溝は認められない。床面の標高は、奥壁側で15.35m、入り口側で15.24mを計り、開口部に向かって若干低くなる。床面の形状は隅丸方形で、天井部はドーム形である。奥壁側の天井部の床面の高さは0.4mを計るが、若干崩落していると思われる。横穴内部は直径2~5cm程度の礫が充填されていた。床面には天体的に黄褐色上が敷かれている。なお、狹道部は確認できなかった。前底部は斜面に沿って縱長の長方形を呈する。長さ0.6m、北側での幅は0.5m、南側は0.4mを計る。第1・3・4号横穴前面に位置し、これら横穴共有のものと思われる。

遺物

確認以外の遺物は出土していない。

5. 第5号横穴（S X05）

遺構図面・図版

図面04・11、図版06・09。

概観

調査地区中央部北側に位置する。第4号横穴の南東側約2mに位置する。標高は約13.8mである。主軸は北36度西を向き、南東方向へ開口するものである。調査開始前は土砂に埋没しており、現地表面より下位から確認された。第3号横穴前底部から下部の上層堆積状況確認のため、試掘坑を設定したところ玄室の奥壁の一部と床面を確認した。

構造

小型の横穴である。前側が消失し、玄室の奥壁側のみ残存している。残存全長は0.7mである。幅は、入り口側で1.0m、奥壁側で0.7mを計る。奥壁側隅部は丸く、周溝は認められない。横穴床面は梢円形で、中央部がやや低くなる。床面の標高は、奥壁側で13.24m、入り口側で13.2mを計り、直前で岩盤の層が急激に落ち込んでいる。奥壁は外膨らみして玄室内へ丸く移行し、天井部はドーム形と思われる。貼床は確認できない。天井部から床面の高さは奥壁側で0.72mを計る。狹道部、墓前域についても、確認できなかった。

遺物

確認していない。

第2節 開削地

平成13年度に丘陵西側斜面で行った試掘調査により、複数の平坦面と盛土を伴う平坦面、基壇状の遺構を確認した。周辺には土壘状の高まりと、北側斜面にはさらに大規模な平坦面が存在を確認した。これらを総称し開削地とした。平成14年度の本調査では周辺一帯の測量調査と、表土の掘削により柱穴、礎石などの検出を行うことで、建物址の存在を確認し、遺跡の年代や性格を特定することを主眼に行った。

その結果、前後の宅地化や植林、丘陵上の鉄塔建設による崩落土の堆積等の変化を受けていることにも関わらず、良好な遺存状況であることが分かった。

これらの遺構は、平坦面 S X11・13、土壘状遺構 S X12、濠状遺構 S D10、基壇状遺構 S X10、盛土状遺構 S X09である。

1. 平坦面 S X13

遺構図面・図版

図面14・15、図版17。

位置と現況

平坦面 S X13は、平成13年度の試掘調査によって発見され、平成14年度本調査を行った遺構である。平成14年度調査地区北西側にあたり、遺構群の最も北側の斜面中腹に位置する。南東側の調査地区中央部に位置する平坦面 S X11より約10m北西側の所で確認された。標高は約20.0mを計る。

座標値の概数は、X = 86349.50、Y = -12877.70である。

地形的には平坦面 S X11の北西側に位置し、比高差約5mと高くなり、平坦面前方に比較的急角度の斜面を持つ。斜面は西側ほど急角度になり、濠状遺構 S D10と接する箇所では急激に下降する。

緩やかに北側方向へ上っていく斜面の中腹に、L字形に斜面を削平し構築している。現況は山林となっている。東側は既に古墳群の位置する丘陵地となっており急激に傾斜し丘陵頂部へ上っていく。明治期に作成されたと思われる地図においても、現地は山林であり、耕作地となっていた記録はない。現況は戦後の植林により樹木が生い茂り、一部自然の流水によって崩落しているものの、ほぼ水平である。清掃を行ったが礎石などの痕跡は確認できなかった。

また、南西側は近年も使用していると思われる山道があり、尾根方向へ蛇行しながら上った後、平坦面の北側斜面に沿って迂回し谷の奥へ登っていく。

構造

南東方向へ傾斜する斜面をL字形に北東方向へ向け開削し、斜面側へ盛土を行い平坦面を造り出している。平面形状は基準線に対して平坦面前面は直交し、山側は北側へ広がる不定台形となる。長軸約38m、幅は約7mから約20mを計る。面積は423.6m²である。南側約5m程は盛土により構築し、北側約5m程は山側を削りだしているものと想定している。平坦面の前面は主軸に対し90度に南西～北東へ開口するものである。

遺物

確認していない。

2. 平坦面 S X11

遺構図面・図版

図面14・15・27、図版15。

位置と現況

平坦面 S X11は、平成13年度の試掘調査によって発見され、平成14年度本調査を行った遺構である。平成14年度調査地区北西側にあたり、遺構群の中央部に位置する。北東側に位置する平坦面 S X13より約10m南東側で確認された。標高は約15.0mを計る。

座標値の概数は、X=86325.20、Y=-12861.10である。

地形的には谷部の入り口、丘陵裾部に当たる。盛土状遺構 S X10の北西側に位置し、比高差約1mをもつて一段高くなる。平坦面の北西側には土壘状遺構 S X12、濠状遺構 S D10があり、西側の宅地から約1mの比高差をもつて一段高くなる。南東側には基壇状遺構 S X10が位置する。現況は山林である。明治期に作成されたと思われる地籍図では山林の一部となっており、近代以降に地形の変化はなかったようである。

構造

丘陵の北東側の斜面をU字形に南西方向に開削し、この土砂により南東側の盛土を行って整形していると思われる。南東側で土層を観察したところ、盛土による整地層を確認している。南側隣部は、排水路などにより、一部乱れているもののほぼ旧形を保っていると思われる。平面形状は座標北に対し41度西に振った基準線に乗っ取り、長方形の形状である。長軸約36m、幅は約20mを計る。面積は720m²である。西側は濠状遺構 S D10、土壘状遺構 S X12により周囲より区画し、南西隅に基壇状遺構 S X10を配置している。中央北側には浅い落ち込みがあり、池状の遺構の存在も考えられたが、石敷き、配石遺構などが確認できなかつたため性格を特定するに至らなかつた。遺構内には樹木があり、遺構検出は限定された範囲で行わざるを得ず、検出した範囲では表土下に柱穴、礎石は確認することができなかつた。

遺物

本遺構の北側より珠洲が出土している。北西側からは砥石が出土している。南西側より五輪塔（水輪）が採集されている。図示した遺物は図面27—1059である。

3. 土壘状遺構 S X12

遺構図面・図版

図面14・18・22、図版16。

位置と現況

土壘状遺構 S X12は、平成13年度の試掘調査によって発見され、平成14年度本調査を行った遺構である。平成14年度調査地区北西側にあたり、遺構群の中央西側に位置する。平坦面 S X11の北西側に位置する。標高は約15.0~16.0mを計る。

座標値の概数は、X=86329.33、Y=-12875.16である。

地形的には谷部の入り口、丘陵裾部に当たる。北側に位置する平坦面 S X12より南西側の下方約4mに位

置する。土壘や濠と平坦面の間の斜面は急角度となっている。当遺構の西側には隣接して濠状遺構 S D10がある。南東側には基壇状遺構 S X10が位置する。現況は山林である。

確認した段階では谷からの流水を流すために、土壘の中央部南側を崩して一部排水溝が切られていた。その際の掘削土がすぐ脇に置かれたようで、形状が一部変更されていた。今回は、現況を実測した後に、試掘坑を設定して断面を観察し、記録を行った。

構造

土壘は基底部の幅は約4mで、平坦面S X11との比高差は約1mである。当遺構の西側には隣接して濠状遺構 S D10があり、濠の基底部から約2.5mの比高差がある。土壘の立ち上がり角度は約50度である。土壘の盛土は基底部に小礫と粘土を堅く突き壓め、その上に礫混じりの黒褐色土が逆台形に盛られている。確認段階の規模は長さ約16m、幅約3.2mを計る。南東側延長部分に当たる箇所を清掃したところ、小礫の密集箇所が長さ8mに亘って確認された。この周囲には礫の集中箇所が見られないことから、盛土は失われているものの、かつてこの範囲まで土壘が存在したものと思われる。この部分を含めると土壘の全長は約24mとなる。

さらに南東側の部分では、現況のみの観察ではあるが、盛土による高まりは確認できなかった。

遺物

盛土中から中世土師器、珠洲、青磁が出土している。図示した遺物は図面22-1016である。

4. 濠状遺構 S D10

遺構図面・図版

図面19、図版17。

位置と現況

濠状遺構 S D10は、平成14年度本調査を行った遺構である。平成14年度の調査中に、斜面に産地状の落ち込みが確認され、西井龍儀氏の指摘により清掃したところ濠であることが分かった。平成14年度調査地区北西側にあたり、遺構群の中央西側に位置する。土壘状遺構 S X12の南西側に位置する。標高は約14.0～15.0mを計る。

座標値の概数は、X=86329.68、Y=-12879.5である。

地形的には丘陵裾部に当たる。北側に位置する平坦面S X13より南側の下方約4mに位置する。濠と平坦面の間の斜面は急角度となっている。当遺構の東側には隣接して土壘状遺構 S X12がある。南東側には平坦面S X11が位置する。現況は山林である。

確認した段階では、集落内の排水路や、戦後の宅地化により濠の西側の肩部が削平されたこともあり、斜面に接する箇所のみが遺存している。

構造

濠は基底部の幅は約2mで、上面の幅は約5mを計る。現存する長さは約6mである。当遺構の東側には隣接して土壘状遺構 S X12があり、濠の基底部から約2.5mの比高差がある。濠の西側は比高差約1m程度の高まりとなっている。地盤図によると戦後に植林されるまでは畑であったようで、浅い起伏のある平坦面

にへと続いている。

宅地化の際、削平されており原形はとどめていないが、平坦面S X11や土累状遺構S X12は濠によって区画されたと思われ、旧形は平坦面周囲を巡るものであったと想定される。

遺物

確認していない。

5. 基壇状遺構S X10

遺構平面・図版

図面16・17・24、図版13・14。

位置と現況

基壇状遺構S X10は、平成13年度の試掘調査によって発見され、翌平成14年度本調査を行った遺構である。平成14年度調査地区北西側にあたり、遺構群の中央東側に位置する。平坦面S X11の南東側に位置する。標高は約14.5~15.5mを計る。

座標値の概要は、X=86322.62、Y=-12848.12である。

地形的には丘陵根部に当たる。南側に位置する盛上状遺構S X09より北側の上方約2mに位置する。S X10とS X09の間は一段高くなっている。試掘調査の際に上層断面を観察するとS X09の北側に平坦面S X11を盛りによって築造し、さらに斜面側には基壇状遺構S X10を構築したと思われる。現況は山林で、戦後の植林がなされている。

試掘調査の段階では、方形に盛土された塚状の形状をしていた。丘陵斜面側は、斜面上方からの崩落土が厚く堆積していると思われ、遺構上面は緩やかに斜面側へと続いている。本調査開始後、表土を除去したところ、泥岩類の岩片が厚く堆積していることが分かった。植林された木々は堆積土の上に植えられていることを確認した。部分的に試掘坑を入れたところ、堆積土の下に以前植えられていた木の樹根と、黄褐色砂質土からなる遺構上面を検出した。その後、試掘坑を拡張し、遺構上面の検出を行ったところ平坦な遺構面であることが分かり、丘陵斜面へは若干傾斜する程度でほぼ水平に移行することを確認した。その後、地元の聞き取り調査を行ったところ、丘陵頂部に鉄塔の基礎のある大穴があり、その基礎工事の際に凹た土砂が斜面を下って堆積したものであるとの知見を得ることができた。

今回は、現況を実測した後に、試掘坑を設定して断面を観察し、記録を行った。周囲に試掘坑を設定したところ、浅い溝が巡ることを確認した。遺構内には多数の樹木があり、遺構検出は限定された範囲で行わざるを得なかつたため、全体の把握には至らず、調査期間の制約から断ち割り調査は行えなかつた。

構造

北東側の丘陵の斜面をL字形に南西方向に開削し、この上砂により盛土を行って整形していると思われる。平面形状は座標北に対し41度西に振った基準線に乗っ取り配置されていると思われる。斜面方向へ若干広がる台形の形状である。長軸約14m、幅は約8m、高さは約1mを計る。面積は約100m²である。周囲は溝を巡らせて区画している。

遺構中央には浅い落ち込みがあり、風倒木によるカクランと思われる。遺構上面には石は散在する程度で

石敷き、配石遺構は確認できなかった。確認した範囲では、柱穴や礎石は見られず、建物跡の存在は明確にできなかった。

遺物

珠洲の擂鉢が出土している。図示した遺物は図面24-1039である。

6. 盛土状遺構S X09

遺構図面・図版

図面14・16、図版17。

位置と現況

半坦面S X09は、平成13年度の試掘調査によって発見され、翌平成14年度本調査を行った遺構である。半成14年度調査地区北西側にあたり、遺構群の南東側の斜面裾部に位置する。遺構群の中央部に位置する半坦面S X11より約4m南東側で確認された。標高は約13.5mを計る。

座標値の概数は、X=86302.7、Y=-12844.65である。

地形的には半坦面S X11の南東側に位置し、一段低くなり比高差約1mの段差がある。遺構面はほぼ水平で、試掘坑の土層断面では水平な堆積状況を示している。

現況は山林となっている。東側は院内古墳群の位置する丘陵地となっており急激に傾斜し丘陵頂部へ上っていく。明治期に作成されたと思われる地積図においても、山林と標記され、耕作地となっていた記録はない。東側は北東側方向へ上っていく丘陵斜面に接しており、戦後の植林により樹木が生い茂り、清掃を行ったが、地表面での観察では礎石などの痕跡は確認できなかった。

なお、調査地区西側には排水路が設置され一部削平されているものの、遺構の線に沿って迂回するようにならわれていることから、ある程度改変を免れている。

構造

丘陵斜面をL字形に北東方向へ向け開削し、南西侧へ盛土を行い半坦面を造り出している。平面形状は谷方向及び基準線に対して直交する方形の形状となる。長軸約30m、短軸は約15mを計る。面積は約450m²である。半坦面の前面は主軸に対し45度に南西へ向いている。

遺物

表上中より珠洲が出土している。

第3節 その他の遺構

1. 平坦面

遺構図面・図版

図面02・03・25・28、図版09。

平成12年度調査地区 平坦面S X06

本遺構S X06は、調査地区北側、丘陵東側斜面の裾部をL字状に削平し構築された遺構である。築造に当たっては、斜面側を削平し、幅1.5～3mの平坦面を築造している。斜面基部に沿って幅約60cmの溝を掘られており、排水路、側溝と思われる。平坦面は地山の整形後に、暗灰色粘質土が貼床状に敷かれ整地されている。平成13年度・14年度調査地区でも同様の遺構が検出されている。後世の改変により一部途切れているものの、全体として斜面周囲を巡っていた可能性が高い。

遺物は整地層直上から珠洲が出土している。図示した遺物は図面25—1048である。

平成13年度調査地区 平坦面S X08

本遺構S X08は、調査地区南西側、丘陵南側斜面の裾部をL字状に削平し構築された遺構である。平成11年度試掘調査において確認された。西側は平成14年度調査地区へ続くものである。長さ約28mに渡って検出され、北東側は斜面が削平されて消滅している。北東側は平成12年度調査地区へ続く可能性がある。築造に当たっては、斜面側を削平し、幅3.0～5.0mの平坦面を築造している。斜面基部に沿って幅約20～40cmの溝4条が掘られており、排水路、側溝と思われる。その他、土坑5基、小穴6基を確認した。調査地区南側は近年に敷設された排水路によって破壊されており、これ以上の広がりは確認できなかった。また、調査地区南西端部において、溝1条（S D03）が確認された。平坦面が埋没した後に作られたと思われる。南西側は平成14年度調査地区へと続いている。表土及び丘陵からの崩落土が厚く堆積しており、近年のカクランも一部に見られた。遺物は表土及び遺構覆土から大量に遺物が出土している。土器類では、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲、越前、瀬戸美濃、瓦器、青磁、白磁、越中瀬戸が出土している。土製品では土鍤がある。石製品では五輪塔（火輪）、砾石が出土している。図示した遺物は図面28—3001である。

平成14年度調査地区 平坦面S X08

本遺構S X08は、調査地区南東端部、丘陵南側斜面の裾部をL字状に削平し構築された遺構である。平成13年度試掘調査において確認された。西側は平成13年度調査地区へ続くものである。長さ約11mに渡って検出され、北西側は斜面が崩落したか、削平されて消滅している。築造に当たっては、斜面側を削平し、幅1.0～3.0mの平坦面を築造している。斜面基部に沿って幅約20～40cmの溝1条、他に幅約1mの溝が、丘陵南側斜面方向に沿ってが掘られており、排水路、側溝と思われる。平坦面は地山の整形後に、暗灰色粘質土が貼床状に敷かれ整地されている。南東側、南西側は近年に敷設された排水路によって破壊されており、これ以上の広がりは確認できなかった。また、平坦面の上層遺構として、斜面に沿う位置に縁を多く含む土層を確認した。平成13年度調査地区的南西隅でも確認されており、その続きと思われる。平坦面が崩落等により廃棄された以降のものと思われる。黒褐色土からなり時期としては中世以降のものと思われる。

遺物は整地層直上から珠洲が出土している。

2. 開削地 S X07

遺構図面・図版

図面03・22。

位置と現況

本遺構 S X07は、平成12年度調査地区中央部、丘陵東側斜面の裾部で検出された。当初は、斜面の崩落土が厚く堆積しており、現況では斜面に変化ではなく山林であった。調査が進んだ段階で、調査地区中央部の岩盤層の広がりと新たな横穴の存在の有無を確認するため、土砂の除去を行った。岩盤層が一端途切れ、谷地形と思われる水平に堆積した土層が現れた。検出範囲を広げたところ、大規模な谷状を呈しており、人為的か自然地形によるものか判断が分かれた。そこで谷の基底部に当たる箇所を発掘したところ、珠洲が多量に出土し、さらに斜面側にも埋没していることが分かった。今回は斜面崩落の恐れもあるため、基底部の一部を検出し概要の把握に止めた。土層の検出状態では斜面側に向かってさらに入り込むと思われる。

構造

規模は、推定で上端幅8.0m、下端幅3.0m、高さ約4.0mを計る。谷地形の基底部を削平し、幅3.0mの平面を築造している。自然の谷地形の基部を人為的に整形された遺構と思われる。

出土遺物

大量の珠洲が基底部より出土している。図示した遺物は図面22-1012である。

3. 土坑

遺構図面・図版

図面02・03・20・21。

土坑は10基検出された。時期的には、ほとんどが中世のものと思われる。調査地区による内訳は、平成12年度調査地区が1基（SK01）、平成13年度調査地区が5基（SK02～06）、平成14年度調査地区が4基（SK07～10）である。不正楕円形、楕円形を呈するものが多い。各土坑の個別の内容については、別表1に「山園町遺跡、土坑一覧表」としてまとめた。

4. 溝

遺構図面・図版

図面02・03。

溝は10条検出された。時期的には、殆どが中世のものと思われる。調査地区による内訳は、平成12年度調査地区が2条（SD01・02）、平成13年度調査地区が4条（SD03～06）、平成14年度調査地区が3条（SD07～09）である。各溝の個別の内容については、別表2に「山園町遺跡、溝一覧表」としてまとめた。

第4章 遺物

第1節 土器類

1. 弥生土器

弥生時代後期～終末期の土器である。

高杯 図面22-1001。高杯の脚部である。

壺 図面22-1002。壺の底部である。

甕 図面22-1003・1004。甕の底部である。1003は底部に穿孔されている。

2. 奈良平安時代の土器類

須恵器

杯A 図面22-1005・1006。高台の付かない杯である。

杯B 図面22-1007～1009。高台の付く杯である。

杯蓋 図面22-1010。杯蓋の天井部・口縁部片である。口縁端部が短く下方に折れるものである。

壺 図面22-1011・1012。1011は広口壺の口縁部である。1012は壺の底部である。

3. 中世の土器類

中世の土師器である。

土師器

皿 図面22-1013～1027。非ロクロ整形、手づくね整形によるものである。口縁部に一段の横ナデを施す。体・底部はナデや指圧によって調整する。口端部を丸くおさめるものである。1013～1015はやや大型のものである。口径は11.6～12cmを計る。1016～1027は小型のもので、口径は7.4～8.8cmを計る。1016は煤状のものが付着している。1025～1027は体部は垂直気味に立ち上がり、底部を平らに仕上げる。

3. 瓦質土器

中世において使われる焼しを施した火鉢などの土器を瓦質土器とした。平成13年度本調査地区から主に出土している。火鉢・風炉と思われる。いずれも頸片のため、今回は図示していない。

4. 珠洲

壺鉢口縁部 図面23-1028・1029。図面24-1038～1041。図面25-1042。1028は口径32.9cmを計る。オロシ目幅は0.6cmで、条数は4条である。1029は口径34.2cmを計る。オロシ目幅は2.4cmで、条数は10条である。1038は口径37.6cmを計る。オロシ目幅は2.0cmで、条数は9条である。1039は口径38.7cmを計る。オロシ目幅は2.6cmで、条数は10条である。口縁端部内面に櫛目波状文が付く。1040は口径39.0cmを計る。オロシ目幅は2.0cmで、条数は9条である。口縁端部内面に櫛目波状文が付く。口縁部には波状文を施す。1041は口径36.9cmを計る。オロシ目幅は1.6cmで、条数は6条である。口縁端部内面に櫛目波状文が付く。

1042は口径30.1cmを計る。オロシ目幅は2.0cmで、条数は8条である。口縁端部内面に櫛目波状文が付く。

壺鉢底部 図面23-1030～1037。1030は底径12.5cmを計る。オロシ目幅は3.2cmで、条数は12条である。底部外面の調整は静止糸切りである。1031は底径11.85cmを計る。オロシ目幅は3.0cmで、条数は12条である。1032は底径12.9cmを計る。オロシ目幅は3.2cmで、条数は10条である。1033は底径12.2cmを計る。オロシ目幅は3.6cmで、条数は15条である。1034は底径11.35cmを計る。オロシ目幅は2.0cmで、条数は10条である。

1035は底径11.4cmを計る。オロシ目幅は3.0cmで、条数は10条である。1036は底径11.55cmを計る。オロシ目幅は0.9cmで、条数は8条である。1037は底径12.1cmを計る。オロシ目幅は2.0cmで、条数は9条である。

壺口縁部 図面25-1043～1049。1043～1046は頸部がくの字に折れ端部は外傾する。1046は口縁端部がやや下方に突出させている。1047～1049は口縁端部が丸く肥厚させて巡るものである。1047は叩き目を頸部より直下の体部外面に綫彫状に施す。1048は2耳壺か3耳壺と思われる。肩部に鰐耳を2乃至3カ所付けるものである。

鉢・壺類底部 図面25-1050・1051。鉢乃至壺の底部と思われる。底部外面の調整手法は静止糸切りである。1050は底径9.25cmを計る。1051は底径9.65cmを計る。

壺口縁部 図面26-1052～1057。図面27-1058～1062。1052は口径39.3cmで鋭く外反し、口端部はやや尖る。1053は口径39.6cmで鋭く外反し、口端部はやや尖る。1054～1058は口縁部で鋭く屈曲し、口端部は下縁状に肥厚する。1056は肩部に記号文が付く。1059～1062は口縁部が短く屈曲し、口端部は方頭・円頭状に肥厚する。

灯明代形製品 図面27-1063・1064。類例が少なく、全体が判明しないので今回は灯明代形製品とした。1063は灯明代形の底部に当たると思われる。側面に穿孔されており、外面の一部に煤が付着している。1064は脚部とした。

5. 中世陶磁器

白磁 図面27-1065。碗の底部である。内面は釉はげ、鋭くとがる高台を持つと思われる。

青磁 図面27-1066~1069。1066・1067は碗の口縁部である。1068・1069は碗の底部である。1069は内面に幾何学紋様が付く。

瀬戸 図面28-1070~1073。1070は碗の底部である。鉄輪が掛かる。1071~1073は皿の底部である。灰釉が掛かる。1072・1073は見込みに菊の印花が付く。

6. 中近世陶磁器

瀬戸美濃 図面28-1074・1075。1074は碗の口縁部である。1075は碗の底部である。

越中瀬戸 図面28-1076。皿の底部である。

肥前 図面28-1077。京焼風唐津の碗である。

第2節 その他の遺物

1. 土製品

土錘 図面28-2001。土師質の樽形の土錘である。平成11年度本調査地区で出土したものである。

2. 石製品

五輪塔 図面28-3001~3002。3001は平成13年度本調査地区で出土した火輪である。凝灰岩製で端部が欠損している。3002は平成14度調査地区で出土した地輪である。砂岩製で一部が欠損している。

磁石 図面28-3003。3003は平成14度調査地区で出土したものである。滑石製と思われ、褐色を呈する。長側面はすべて使用されている。端部は片方が残存し、使用されている。

第5章 結語

1. 調査の成果

調査成果の概要

谷内（2）地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う今回の調査は、平成11年度より14年度にかけて、山園町、院内地区中央部の丘陵斜面及び周辺地を対象として行われた。

山園町遺跡は住宅団地造成の際に遺物が出土し周知の遺跡であった。さらに院内社の参道において中世地下式塚が発見、調査されており、遺跡範囲は、丘陵周辺部を含む谷部のほぼ全域に広がるものと思われる。

調査の結果、弥生時代に始まり、奈良平安時代を経て、中世に至る集落遺跡であることが確認された。出土遺物は中世のものが主体である。中世全般に渡って見られ、遺跡が中世末まで営まれていることを確認した。遺構では中世段階に築造されたと思われる大規模な平坦面や盛土状遺構があり、その配置には規格性が伺われる。

また、今回の調査により山園町横穴群が新たに発見された。確認できたのは5基からなり、古墳時代の横穴を改変し、中世に至って再利用された可能性がある。

これらの遺構、遺物については次項において検討したい。

弥生・古墳時代の遺物について

この時代については、平成12年度試掘調査、平成13年度の本調査地区より若干の遺物が出土している。出土数が少ないとから、主要な時期とは思われないが、丘陵上の院内古墳群との関連が想定される。また、谷部や周辺地において古墳群が確認されており、この時期の遺構、遺物が存在する可能性も考えられる。

奈良平安時代の遺物について

この時期の遺構は確認されていない。分布調査や今回の平成12年度試掘調査、平成13年度の本調査地区より、遺物が出土している。全体の中ではわずかな割合であるが、この時期においても継続して集落が存続していたことを窺わせる。

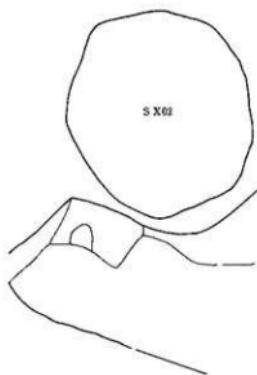
2. 横穴

立地条件

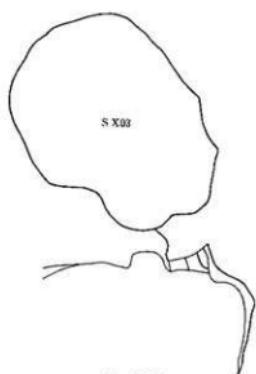
今回の調査では、横穴5基は標高約15～17mの、丘陵斜面の比較的低い箇所で検出した。谷部の平坦部に面しており、現地形との比高差は少ない。一部は現地表面より埋没している。これまで周辺で調査された例では、平成4年に調査された参道地区の中世地下式塚がある。標高約21mの院内社参道中程に位置している。谷部の平坦面から約9m高い地点にある。平成7年に工事中に発見され調査がなされた院内東横穴墓は、標高約19～22mの斜面に位置している。谷部の平坦面から約10m高い地点にある。これらの横穴などは斜面の中程にあたり、谷部を広く望む高所に位置しており、今回の横穴とは異なる立地条件である。



第1号横穴



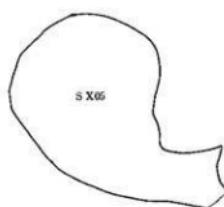
第2号横穴



第3号横穴



第4号横穴



第5号横穴



第16図 山田町横穴群一覧図 (1/40)

No	名 称	標 高	玄室長軸	玄室短軸	玄室高さ	主 軸 方 向
01	第1号横穴	15.2m	0.6m	0.6m	0.6m	北-35度-西
02	第2号横穴	14.7m	1.7m	1.2m	1.4m	西-25度-北
03	第3号横穴	15.5m	1.4m	1.2m	1.2m	東-32度-北
04	第4号横穴	14.9m	0.4m	0.4m	(0.4m)	西-42度-北
05	第5号横穴	13.8m	(0.7m)	0.7m	1.3m	西-35度-北

第1表 山園町横穴群一覧表

横穴の構造

当遺跡の横穴は、平成11年度、12年度の調査地区において第1～5号横穴を検出した。これらについては第1表と第16図でまとめてみた。

当横穴の構造は、単質構造の玄室のみである。玄室の形態は3号横穴は玄室がほぼ遺存しており、ドーム状を呈する。1・2・5号墓は遺存状態が悪く、玄室の形態は不明瞭である。1・3・4号横穴前面には墓道と思われる平坦面を確認した。古墳時代の横穴に通有の狹道部と思われる構造は見られない。

これらの横穴の中には、第3号横穴のように円形の床面を持ち、古墳時代の横穴墓の構造と近似するのも見られる。検出状態では狭道部は失われており、後世に改変を受けていると思われる。周開の小型の横穴は、形態からも占墳時代の横穴墓とは異なることから、改変に伴い付随的に構築されたものと思われる。

横穴が検出された丘陵東側は、泥岩層からなる安定した土層が分布し、横穴が構築しやすい環境にあり、周辺部に複数の横穴が存在する可能性がある。

横穴の時期

山園町横穴群は、玄室内より遺物の出土は極めて少ない。平成11年度の調査の際、第1号横穴前面において珠洲が出土している。第3号横穴からは玄室内覆土中より珠洲の鉢形が出土している。口縁部の特徴から、吉岡氏の編年でⅣ期相当のものと思われる。この他、横穴周辺より珠洲を主体とした遺物が出土しており、Ⅴ期相当のものがある。このことから古墳時代に築造された横穴墓が、中世段階に築造乃至改変を受け、中世を通じて利用されたものと思われる。

県下の中世横穴墓

富山県下には、県西部を中心に横穴墓が多数分布している。それらの大半は古墳時代末～飛鳥時代に築造されたものである。この中で明確に中世の所産と思われるものは、氷見市藪田葉郎横穴墓群がある。この中の1号穴は古墳時代後期の横穴墓を改変し、玄室内部に五輪塔、宝篋印塔等が多数安置され、火葬骨を伴つ

ている。出土遺物から15世紀代とされている。

この他、中世墓としては、形態は異なるものの高岡市山岡町遺跡参道地区の中世地下式墳、氷見市脇方谷内出中世墓がある。高岡市山岡町遺跡中世地下式墳は、県内では類例を見ない地下式墳の形態をもつ墓制である。出土遺物から中世後期、15世紀代のものとされている。氷見市脇方谷内出中世墓は、斜面の岩盤を削って茶壇を構築し、石造物を配置する形態の中世墓である。鎌倉時代末に供養塔を配置したことに始まり、室町時代前半には墓所として性格が変化していったとされる。これらの背景として、平安時代末から浄土信仰が広く普及する一方で、支配者階級には禅宗が浸透していたとされる。特に山岡町遺跡の中世地下式墳は、その葬法から禅宗との関連性が窺われる。これらの事例は、一般的な墓制とは異なり、当時の有力者による建築の墓制であると思われる。今回検出した横穴群については、明確に墓とする根拠が少ないとから横穴墓としなかった。今後の調査例の増加により検討される課題としておきたい。

3. 開削地

立地状況

谷地形の内、丘陵西側の開折谷の裾部に位置している。この開折谷は周囲を丘陵尾部に囲まれており、眺望の良い地形に位置している訳ではない。唯一、平坦面から南東方向を見ると、遠く立山連峰の薬師岳を望むことができる箇所に位置している。

調査の課程で、戦後の宅地化や植林、丘陵上の鉄塔建設による崩落上の堆積等の改変を一部に受けていることを確認した。しかし、丘陵西側の調査地区では排水路が設置され一部削平されているものの、平坦面の縁に沿って迂回するように作られていることから、ある程度改変を免れており、調査地区周辺は、良好な遺存状況であることが分かった。特に、谷部奥の平坦面は丘陵斜面を削り、谷部前面を埋め立て、整形して築造している。建物址の存在が可能な規模であることが分かった。

また、土壘の西側に濠状の遺構があることを確認した。また、前面の平坦面との比高差が約5mあり、急な傾斜面となっている。土壘や濠の存在もあることから、周囲と区画する意図と共に防衛的な性格も伺える。

遺構の構造

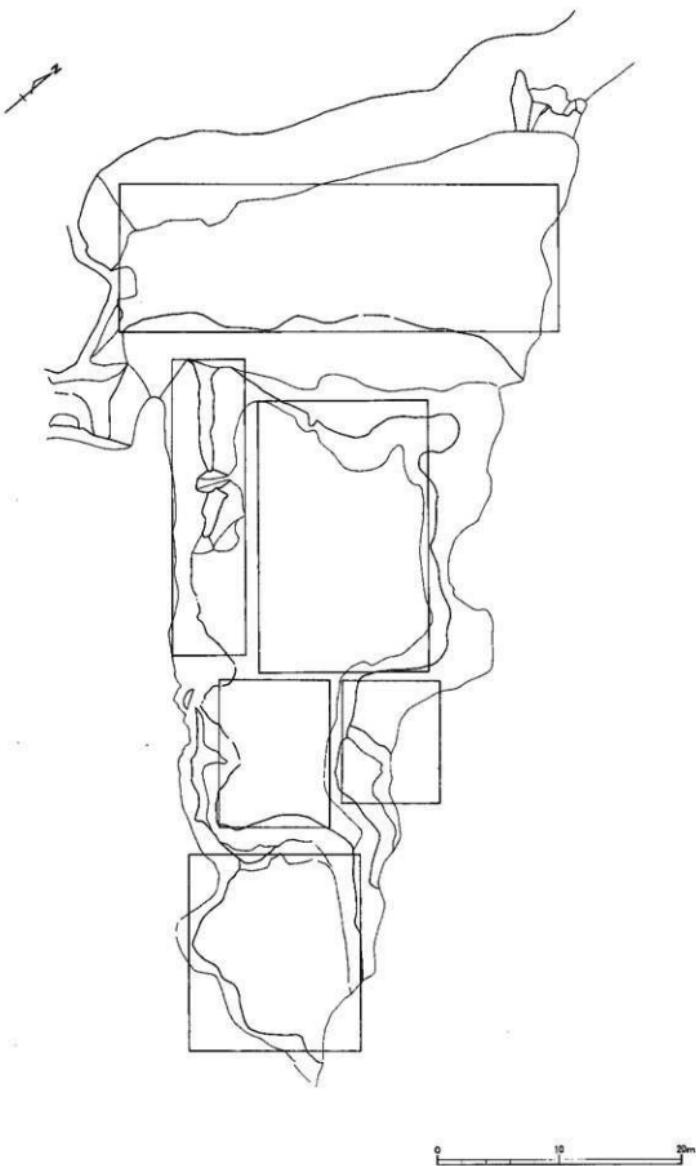
これらの平坦面や基壇状遺構は、規格的に配置されており、基準となる主軸は座標北に対し約41度西側に振る角度をとる。この軸に対し平行かつ直交するように各遺構が配置されていると考えられる。

一番下段の盛上状遺構からある程度の段差を持ちながら、奥の平坦面へと続いている。中央の平坦面には基壇状遺構や土壘を配し、一定の空間が確保されている。今回の調査では確認できなかったが、何らかの建物や構築物が存在した可能性が高い。

遺物の出土状態

遺物の出土量が少なく、散発的な出土遺物には中世全般に渡る。主要な時期が不明確なもの、13世紀前半から14世紀の遺物を中心として、調査地区全体で中世を通して継続的な営みが想定される。

宗教的な遺物としては、五輪塔があり、火輪・地輪と思われる。出土状態から現位置は止めていないと思われるが、周囲に墓地や供養塔的な遺構の存在が考えられる。



第17圖 開削地造構群概略図 (1/400)

4. 遺物

出土遺物の時期

出土した遺物の時期は大きく分けて3つの時期に分かれる。①古代の土器、②13世紀～14世紀の上器・陶磁器、③中近世陶磁器である。古代の土器は丘陵上の院内古墳群との関連が考えられる。近世陶磁器は、中世造構群が廃絶した後のものと思われる。今回の調査では13世紀～14世紀の上器が最も多く出土しており、これらの遺物について考えてみたい。

遺物の出土状況

遺物の出土量では丘陵南側に当たる平成12年度の試掘調査地区、平成13年度の本調査地区が群を抜いて多い。ただし、他の調査地区においても中世全般に渡る遺物が出土していることから、丘陵部も含めた開発行為が考えられる。そして集落の中心が丘陵南側に面した谷部にあることを想定している。

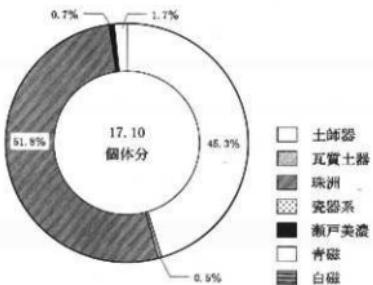
土器・陶磁器の構成比

第18・19図、第2・3表は、中世における土器・陶磁器類の種類・用途別の構成比率である。計量方法は口縁部計測法を用いた。計量方法は宇野隆夫氏による方法を用いた。

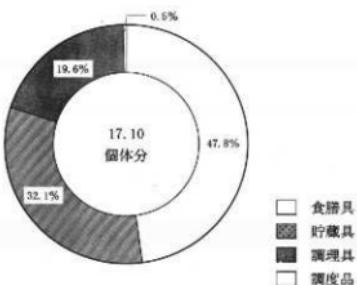
第18図・第2表は中世遺物の種類別構成比率である。土師器45.3%、珠洲51.8%、瓦質土器0.5%、瀬戸美濃0.7%を占める。瓷器系土器、青磁は確認したが数値に現れない。

第19図・第3表は中世遺物の用途別の構成比率である。内訳は、食膳具47.8%、調理具32.1%、調度品0.5%、貯蔵具19.6%を占める。

中世においては、食膳具比率が高くなるほど、格上の遺跡である比率が高いとされる。また、中世の城館や寺院等に關する遺跡は、中世土師器の且の占める割合が高いとされる。今回の調査地区においては、中世土師器をはじめとする食膳具と珠洲等の貯蔵具・調理具の割合が拮抗している。とりわけ食膳具の比率が高い傾向は見受けられない。今回の調査地区が丘陵部に限定していることを考慮し、遺跡の性格を行なう判断は谷部の今後の調査に委ねたい。



第18図 中世土器・陶磁器類の種類別構成比率



第19図 中世土器・陶磁器類の用途別構成比率

種類	器種	破片数	個体数
土師器	皿	53	7.75 [45.3%]
瓦質土器	火鉢	11	0.08 [0.5%]
珠洲	桶鉢	129	3.36 [37.9%]
	壺・甕	561	5.49 [62.1%]
	小計	690	8.85 [51.8%]
瓷器系	甕	2	* [* %]
瀬戸美濃	椀	5	0.13 [100.0%]
	皿	4	* [* %]
	小計	9	0.13 [0.7%]
青磁	椀	7	0.29 [1.7%]
白磁	椀	1	* [* %]
総計		773	17.10 [100.0%]

*印は存在するが、個体数の比率が数値として表れないもの

第2表 中世遺物の種類器種別組成表

用途	種類	破片数	個体数
食膳具	土師器	53	7.75 [94.9%]
	瀬戸美濃	9	0.13 [1.5%]
	青磁	7	0.29 [3.6%]
	白磁	1	* [* %]
	小計	70	8.17 [47.8%]
貯蔵具	珠洲	561	5.49 (100.0%)
	瓷器系	2	* [* %]
	小計	563	5.49 [32.1%]
調理具	珠洲	129	3.35 [19.6%]
調度品	瓦質土器	11	0.08 [0.5%]
	総計	773	17.10 [100.0%]

*印は存在するが、個体数の比率が数値として表れないもの

第3表 中世遺物の用途種類別組成表

6. おわりに

今回の調査では、中世段階における大規模な開発行為による遺構群を確認することができた。丘陵斜面地という限られた範囲ではあるが、鎌倉時代末から南北朝時代を中心とした遺物により、これらの時期に築造されたものと思われる。調査地区内は丘陵の周囲を巡る形となっているが、各調査地区において出土遺物には特に集中する箇所が見られなかった。このことから、拠点を変えながら營まれていたわけではなく、丘陵周辺全体が中世を通じて人的活動があったと思われる。

複数の横穴は、参道地区の中世地下式壙と隣接している。中世地下式壙は背景に中世寺院との密接な関連があるとの説があり、遺跡内において寺院や付随する遺構が存在する可能性がある。また、開削地を構成する平坦面の存在や五輪塔も見られることから供養塔、墓所の存在も考えられる。

遺跡の性格を決定する遺物は少なく断定できないものの、これらのことから、調査地区周辺は中世段階に作られた信仰に関する場であり、その関連遺構であった可能性がある。さらに、丘陵西側に見られる土塁や濠、急斜面に築かれた平坦面などは防御的性格が見受けられることから、中世末期の戦乱の中で変貌を遂げた状況を窺わせる。

当遺跡の位置する二上山は、古代に始まり、中近世には山岳宗教の隆盛があり、射水神社や二上山養老寺を代表とする信仰の対象であったとされる。また、中世末から戦国時代には守山城をめぐる興亡の歴史がある。二上山全域や周辺地域を含めた寺院や城跡などの調査の進展により、当遺跡の性格や位置付けが明確になると思われる。

別表1

山園町遺跡、土坑一覧表

番号	地区・座標	平面形	規模	備考
SK01	平成12年度本調査地区 X = 86344.44 Y = -12771.34	円形	長軸 1.10m 短軸 0.80m以上 深さ 60cm	北西側は未確認。 出土遺物；なし。
SK02	平成13年度本調査地区 X = 86344.44 Y = -12771.34	不整梢円形	長軸 1.28m以上 短軸 1.00m 深さ 46cm	東側をカクランに切られる。 出土遺物；なし。
SK03	平成13年度本調査地区 X = 86344.44 Y = -12771.34	不整梢円形	長軸 1.27m 短軸 0.73m 深さ 15cm	南側でSD04を切る。 出土遺物；珠洲。
SK04	平成13年度本調査地区 X = 86344.44 Y = -12771.34	不整合形	長軸 1.53m 短軸 1.35m 深さ 37cm	出土遺物；珠洲。
SK05	平成13年度本調査地区 X = 86344.44 Y = 12771.34	不整円形	長軸 0.96m 短軸 0.89m 深さ 69cm	出土遺物；珠洲。
SK06	平成13年度本調査地区 X = 86344.44 Y = -12771.34	隅丸長方形	長軸 0.96m 短軸 0.83m以上 深さ 52cm	南西側は未確認。 出土遺物；なし。
SK07	平成14年度本調査地区 X = 86344.44 Y = -12771.34	不整梢円形	長軸 0.75m 短軸 0.40m 深さ 15cm	S X10上で検出した。 出土遺物；なし。
SK08	平成14年度本調査地区 X = 86344.44 Y = -12771.34	不整円形	長軸 0.89m 短軸 0.82m 深さ 35cm以上	S X10上で検出した。 出土遺物；なし。
SK09	平成14年度本調査地区 X = 86344.44 Y = -12771.34	不整形	長軸 0.72m 短軸 0.67m以上 深さ 10cm	S X10上で検出した。 出土遺物；なし。
SK10	平成14年度本調査地区 X = 86344.44 Y = -12771.34	不整円形	長軸 1.26m 短軸 0.82m 深さ 26cm	北東側は未確認。 出土遺物；なし。

別表2

山園町遺跡、溝一覧表

番号	地区・座標	方 向	規 模	備 考
S D01	平成12年度本調査地区 X = 86645.50～ 86651.14 Y = -12771.34～-12774.00	北北東～南南西	長さ 5.60m以上 幅 0.43～0.85m 深さ 6.5～54.8cm	S X06上で検出した。北北東側で調査地区外へ延びる。南側でSD02と繋がる可能性有り。出土遺物；なし。
S D02	平成12年度本調査地区 X = 86639.00～ 86645.00 Y = -12773.00～-12774.00	南北	長さ 6.22m 幅 0.48～0.70m 深さ 2.8～19.4cm	S X06上で検出した。北側でSD01と繋がる可能性有り。 出土遺物；珠洲。
S D03	平成13年度本調査地区 X = 86290.00～ 86297.00 Y = -12766.00～-12775.64	北東～南西	長さ 11.23m以上 幅 0.38～1.28m 深さ 5.9～36.0cm	S X08上で検出した。各所でカクランに切られる。南西側で再度掘り直した形跡有り。 出土遺物；珠洲。
S D04	平成13年度本調査地区 X = 86283.78～ 86287.08 Y = -12777.52～-12781.78	北東～南西	長さ 5.27m以上 幅 0.40～0.86m以上 深さ 6.3～18.0cm	S X08上で検出した。北東側でSK03を、南西端部でピットを切る。中央でピットに、北東側でカクランに切られる。 出土遺物；なし
S D05	平成13年度本調査地区 X = 86285.20～ 86287.08 Y = -12779.68～-12782.82	東北東～西南西	長さ 3.51m 幅 0.34～0.48m 深さ 9.9～54.4cm	S X08上で検出した。 出土遺物；なし。
S D06	平成13年度本調査地区 X = 86282.84～ 86285.80 Y = -12783.75～-12785.67	東北東～西南西 北北西～南南東 (屈曲する)	長さ 4.32m 幅 0.18～0.62m 深さ 2.5～7.2cm	S X08の南西側、斜面裾部で検出した。 ピットに切られる。 出土遺物；なし。
S D07	平成14年度本調査地区 X = 86276.58～ 86278.20 Y = -12789.31～-12800.26	北西～南東 西北西～東南東 (屈曲する)	長さ 2.91m以上 幅 0.27～0.44m 深さ 4.8～18.1cm	S X08上で検出した。西側端部でカクランに切られる。 出土遺物；なし。
S D08	平成14年度本調査地区 X = 86304.00～ 86306.25 Y = -12838.00～-12839.60	北西～南東	長さ 2.30m以上 幅 0.38～0.80m以上 深さ 4.0～14.0cm	S X09上で検出した。北側、南東側でトレンチ外へ延びる。 出土遺物；なし。
S D09	平成14年度本調査地区 X = 86282.84～ 86285.80 Y = -12783.75～-12785.67	北北東～南南西 東～西 (屈曲する)	長さ 2.30m以上 幅 0.78～1.15m以上 深さ 4.0～14.0cm	S X10の裾部外周で検出した。S X10に付随する様と思われる。 出土遺物；なし。

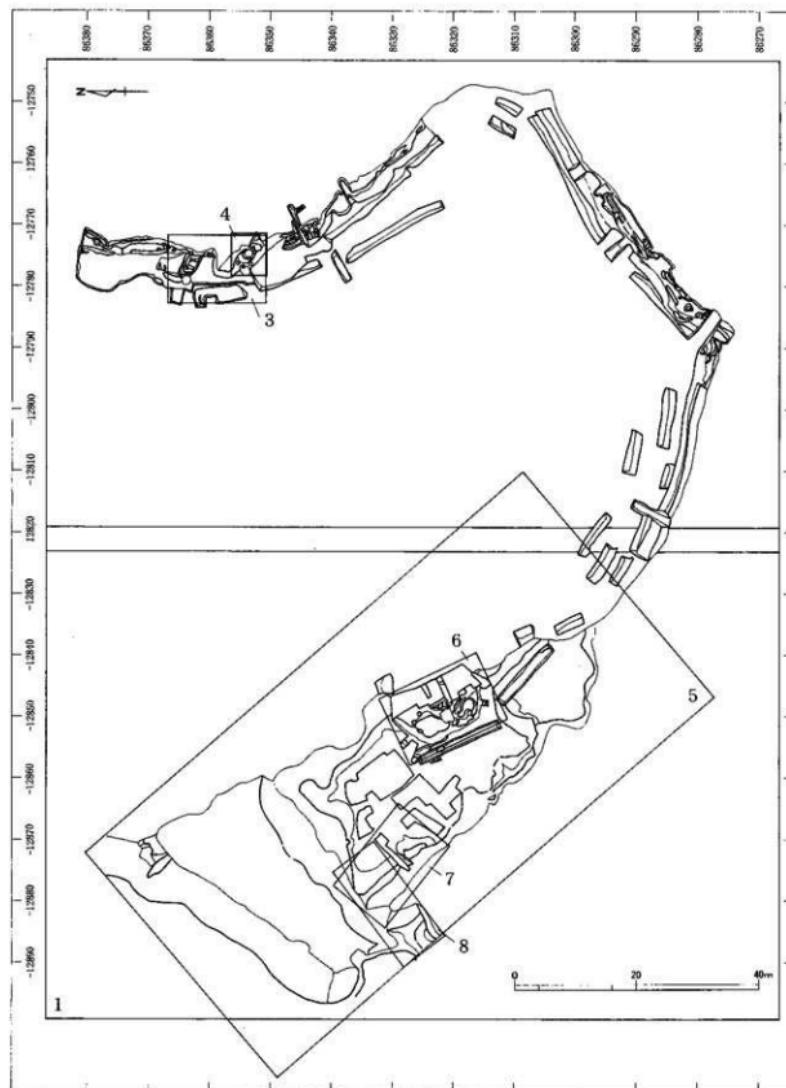
報告書抄録

ふりがな	名古屋市埋蔵文化財調査報告					
書名	山岡町遺跡調査報告					
副書名	急傾斜地崩壊防止工事に伴う平成11~14年度の調査					
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告					
シリーズ番号	第10回					
編著者名	荒井陸					
編集機関	高岡市教育委員会					
所住地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号					
発行年月日	西暦 2004年3月26日					
ふりがな 所取遺跡	所在地 市町村 山岡町・院内	コード 遺跡番号 016202 202139	北緯東経 36°43'34" 137°02'00"	調査期間 010410 010427	調査面積 53.5m ²	調査原因 急傾斜地崩壊防止工事
所取遺跡名	種別 集落跡	主な時代 奈良平安時代 中世	主な遺構 盛土状遺構、平坦面 土壘、土坑、溝	主な遺物 土器、須恵器、珠洲 越前、青磁、白磁	特記事項	
山岡町遺跡						

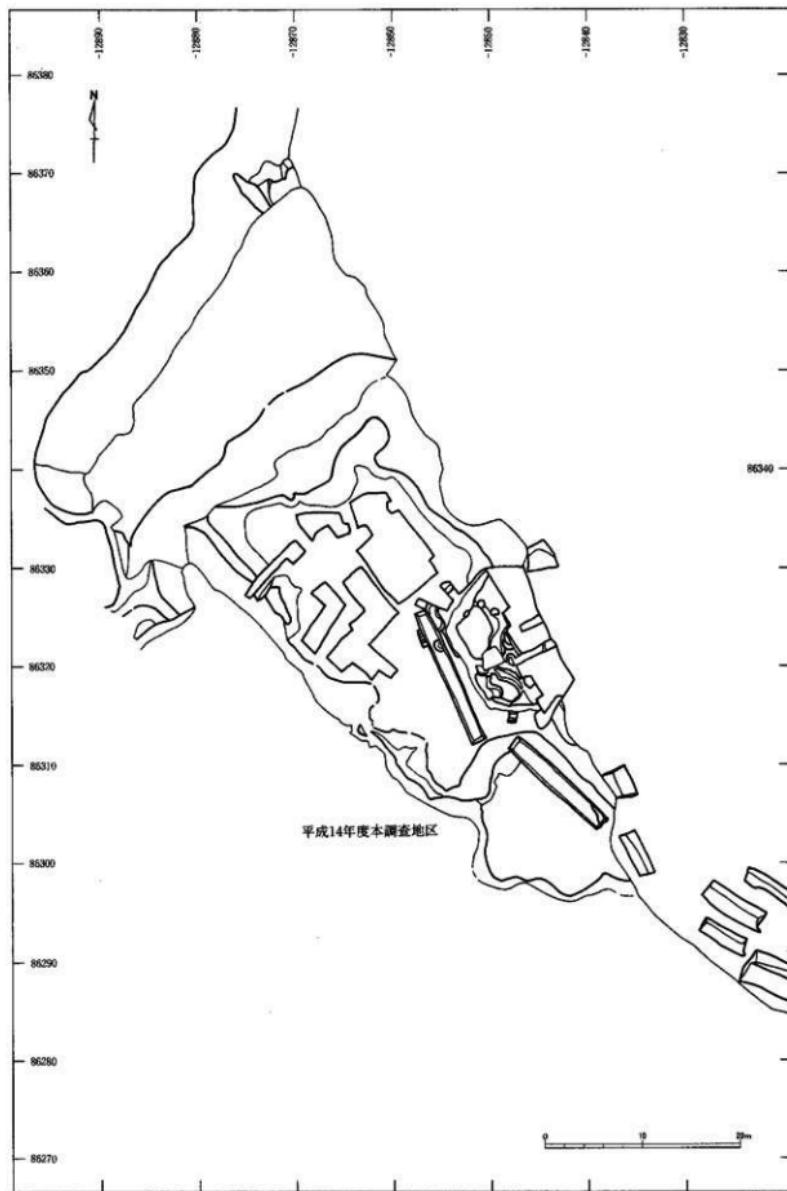
参考文献

- 石井 達也 1991 『中世の城と考古学』 新人物往来社
- 宇野 達夫 1997 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 第一法規出版
- 江崎 武 1986 「中世地下式壙の研究」『古代探査』II 平野田大学出版会
- 大野 究 1989 『脇方横穴群』 氷見市教育委員会
- 大野 究 2000 『脇方谷内中世墓』 氷見市教育委員会
- 大橋 康二 1988 『前陶瓶』 ニューサイエンス社
- 高慶 千他 1999 『富山県上市町黒川上山古墳群発掘調査 第4次調査概報 伝承真興寺跡』 上市町教育委員会
- 高慶 千他 2000 『富山県上市町黒川上山古墳群発掘調査 第5次調査概報 伝承真興寺跡』 上市町教育委員会
- 京口良志他 (弘源寺総合調査団) 1994 『越中二上と四春寺』 桂賞房
- 坂井誠一他 1979 『角川日本地名大辞典16-富山県』 角川書店
- 酒井重洋他 1985 『富山県氷見市藪田農場中世墓発掘調査報告書』 氷見市教育委員会
- 坂口 仁 1988 『美濃焼』 ニューサイエンス社
- 高岡 錆他 1988 『上山研究会研究紀要昭和62年度』 富山県立二上工業高校二上山研究会
- 高橋重雄他 1994 『日本歴史地名大系16-富山県の地名』 平凡社
- 豊島 耕他 1978 『二上の歴史』 二上郷十帖編纂委員会
- 西井 龍儀 1983 『二上周辺の古墳』 『昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報』 高岡市教育委員会
- 日沖剛史他 2001 『頸城ヶ原横穴墓群調査報告書III』 高岡市教育委員会
- 宇野隆太他 1991 『城輪出土の土器・陶磁器』 北陸中世考古学研究会
- 鶴川重徳他 2000 『中世北陸の石塔・石仏』 北陸中古考古学研究会
- 古河英明他 1991 『たかおかー歴史との出会いー』 高岡市
- 松村栄吉他 1979 『医王は語る—医王山文化調査報告書』 福光町・医王山文化調査委員会
- 渡 春他 1984 『富山県右動山信仰遺跡遺物調査報告書』 氷見市教育委員会
- 渡 春他 1989 『国指定史跡右動山文化財調査報告書一八代仙ダム計画闘争一』 右動山文化財調査団・水見市教育委員会
- 森本 正敏他 1996 『越中志懐』 富山新聞社
- 森本 正敏他 1996 『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告』 富山県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査事務所
- 横田賛次郎・森田 勉 1978 『太宰府出土の輸入中国陶器について』『九州歴史資料館研究論集』4

図 面



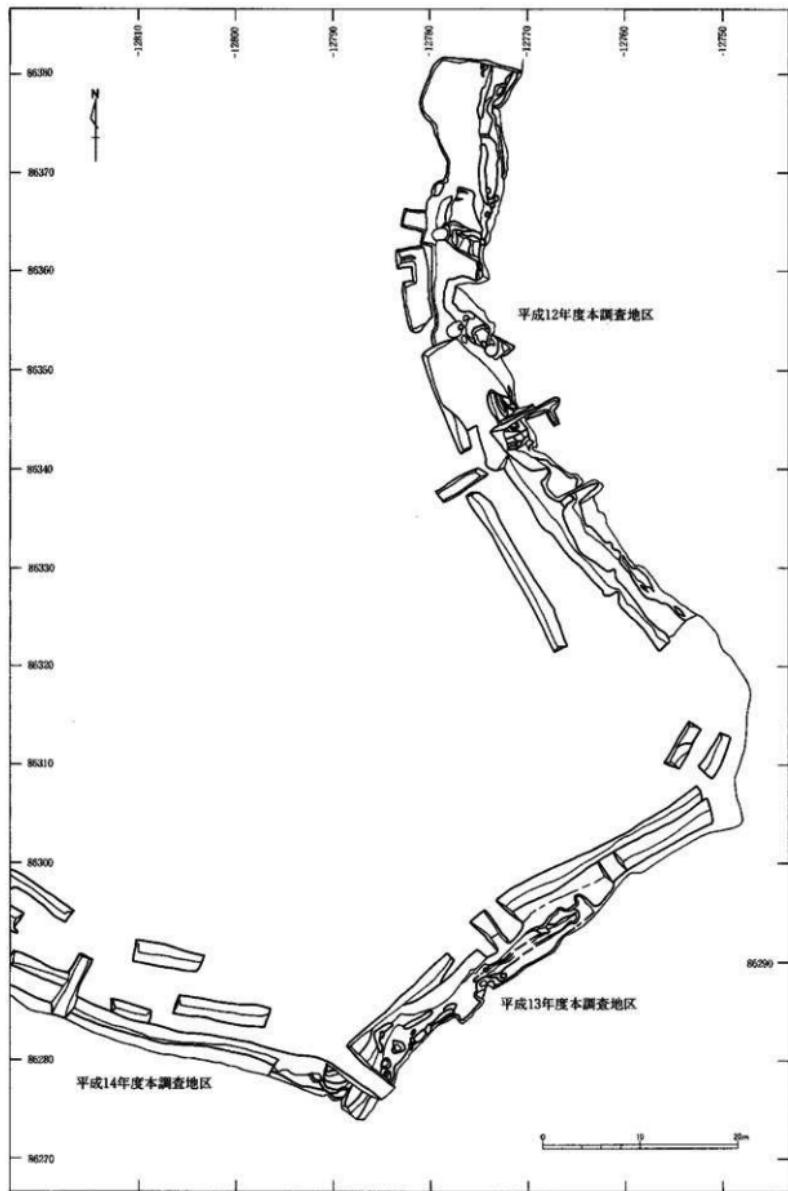
図面〇一 遺跡実測図



調査地区全体概略図〔1〕

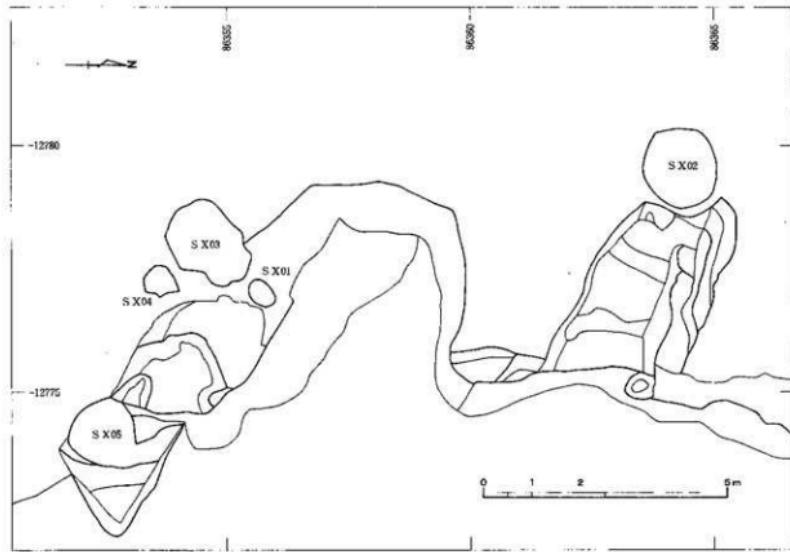
縮尺 1/500

図面〇三 遺跡実測図



調査地区全体概略図〔2〕

縮尺 1/500



1. 第1～5号横穴 (SX01～05) 平面図

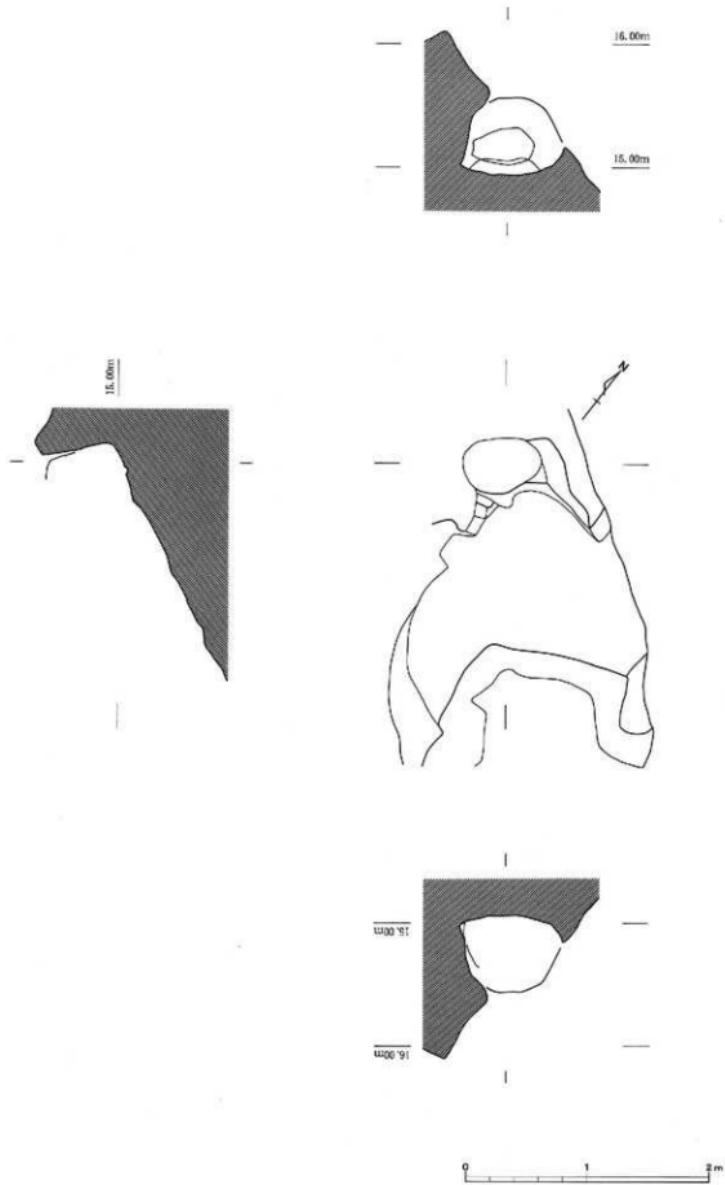
縮尺 1/100



2. 第1～5号横穴 (SX01～05) 立面図

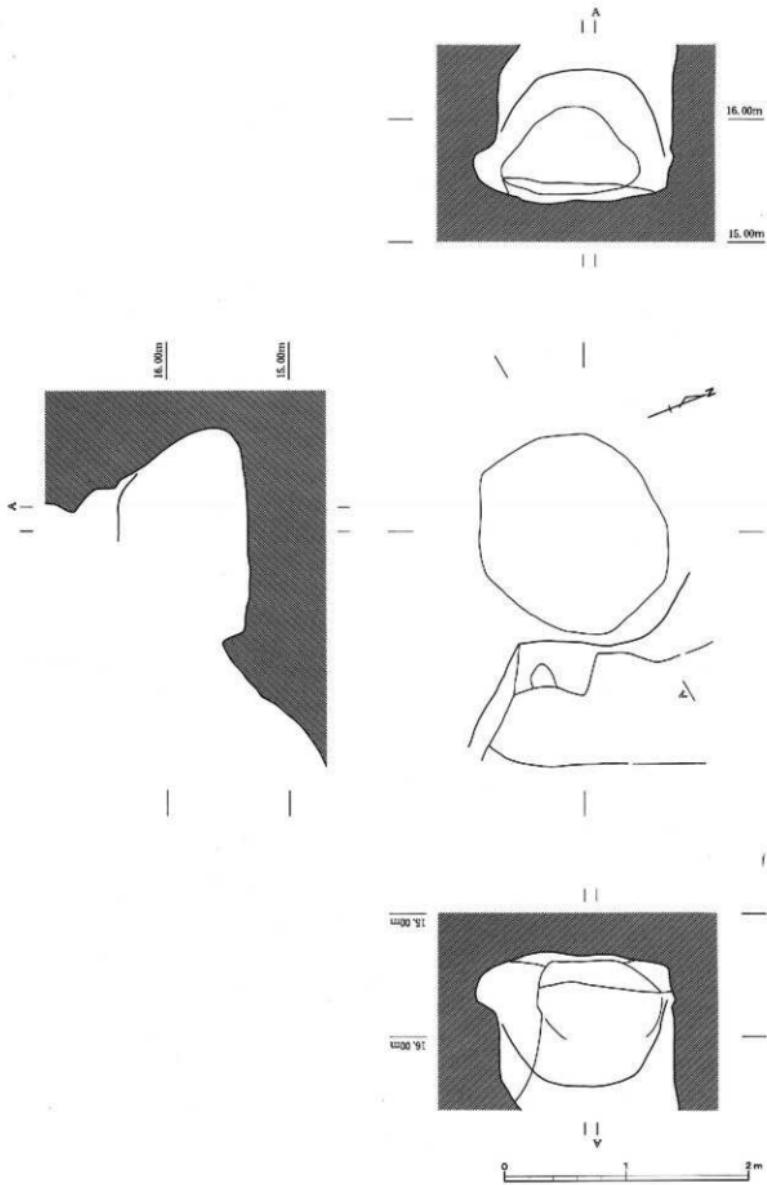
縮尺 1/100

図面〇五　遺構実測図



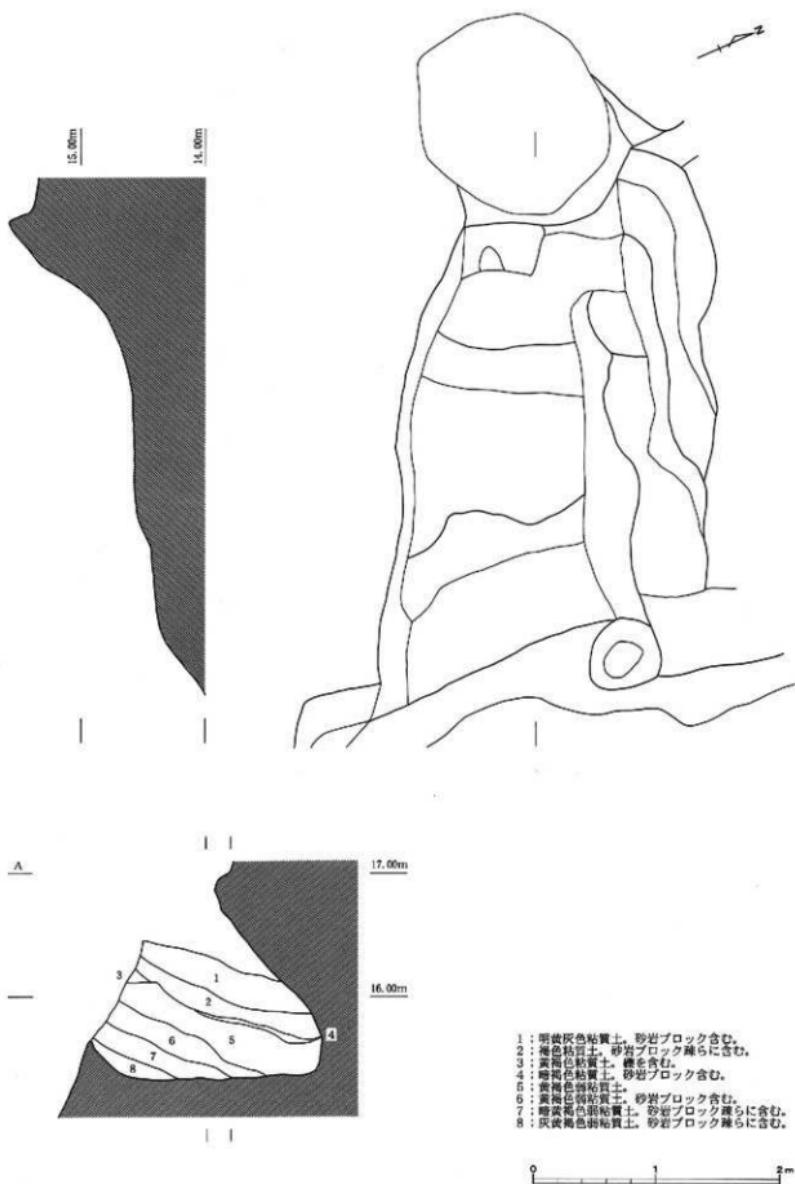
第1号横穴（S X01）実測図

縮尺 1/40



第2号横穴(S-X02)実測図〔1〕

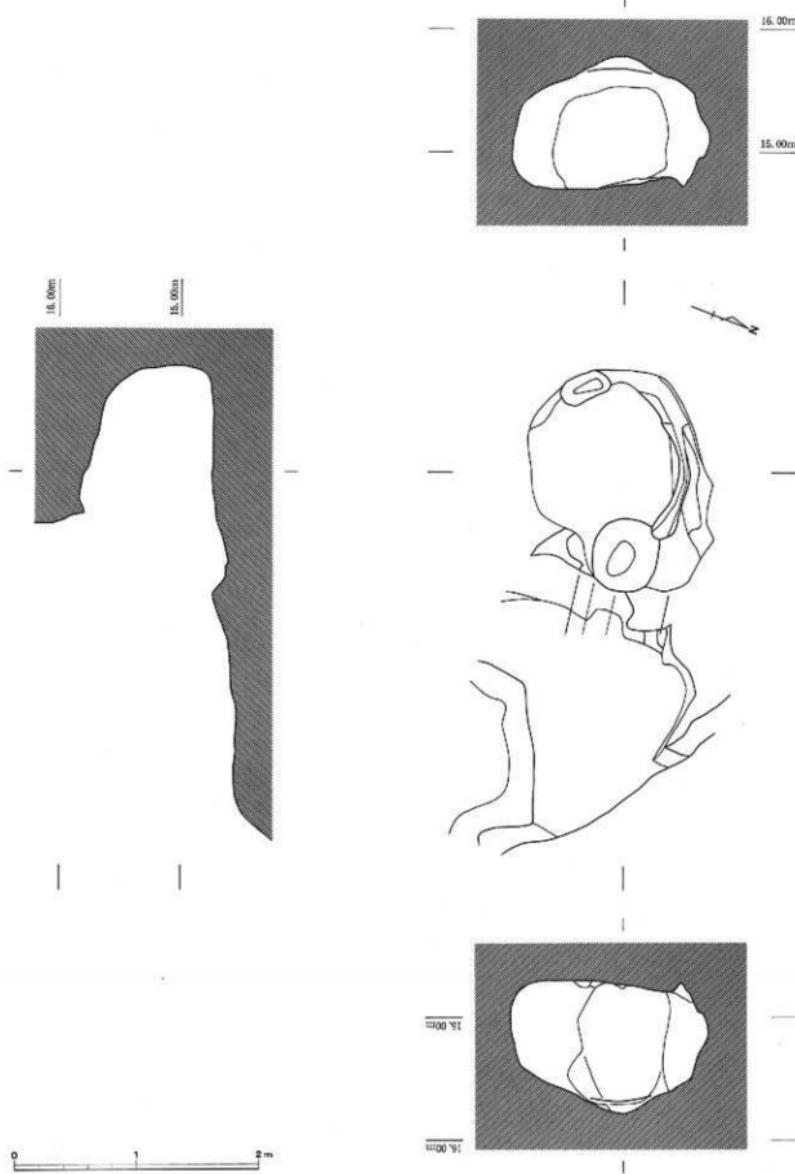
縮尺1/40



第2号横穴 (S X02) 実測図 [2]

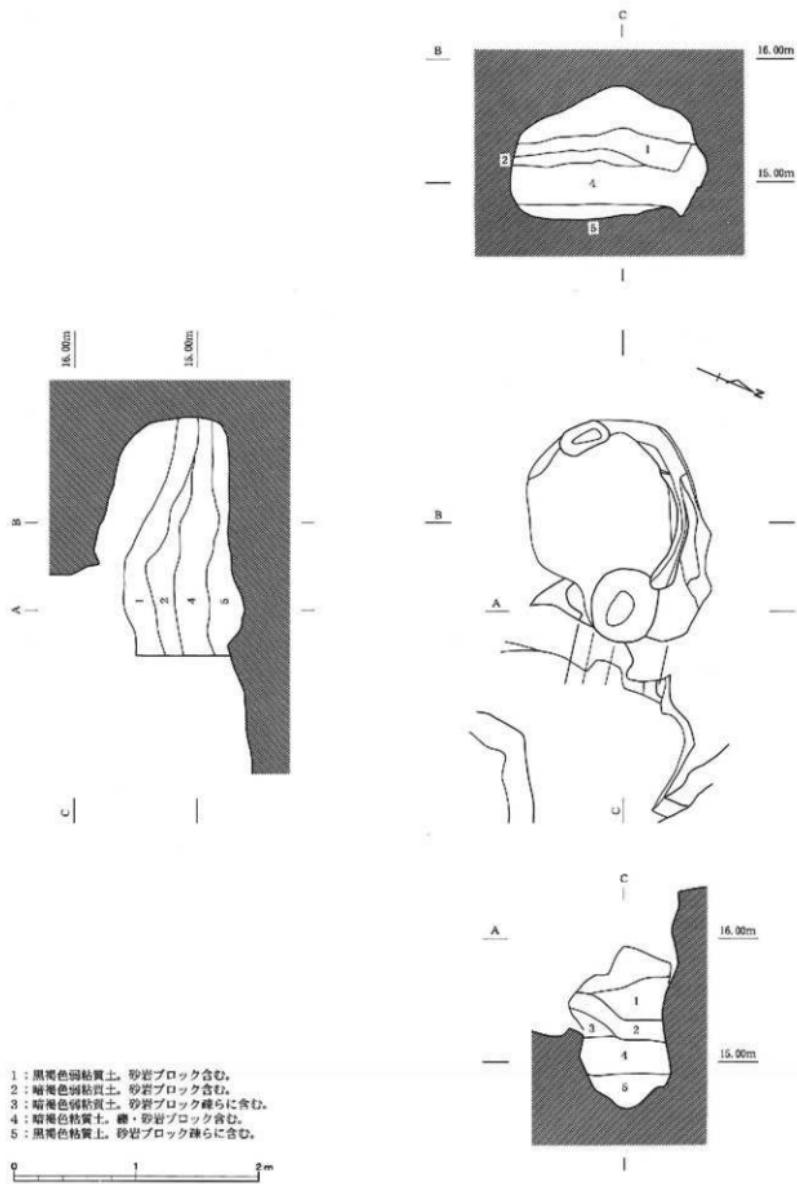
縮尺 1/40

図面〇八
遺構実測図



第3号横穴(SX03)実測図〔1〕

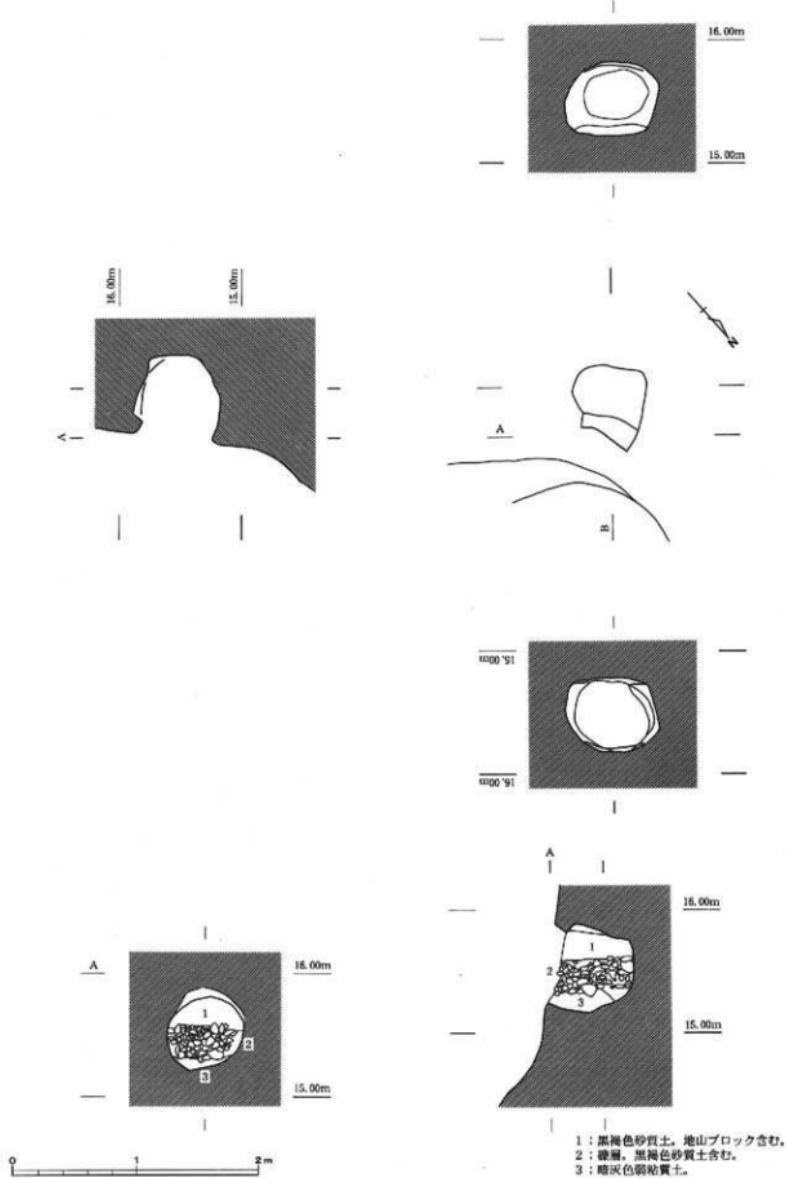
縮尺1/40



第3号横穴 (SX03) 実測図 [2]

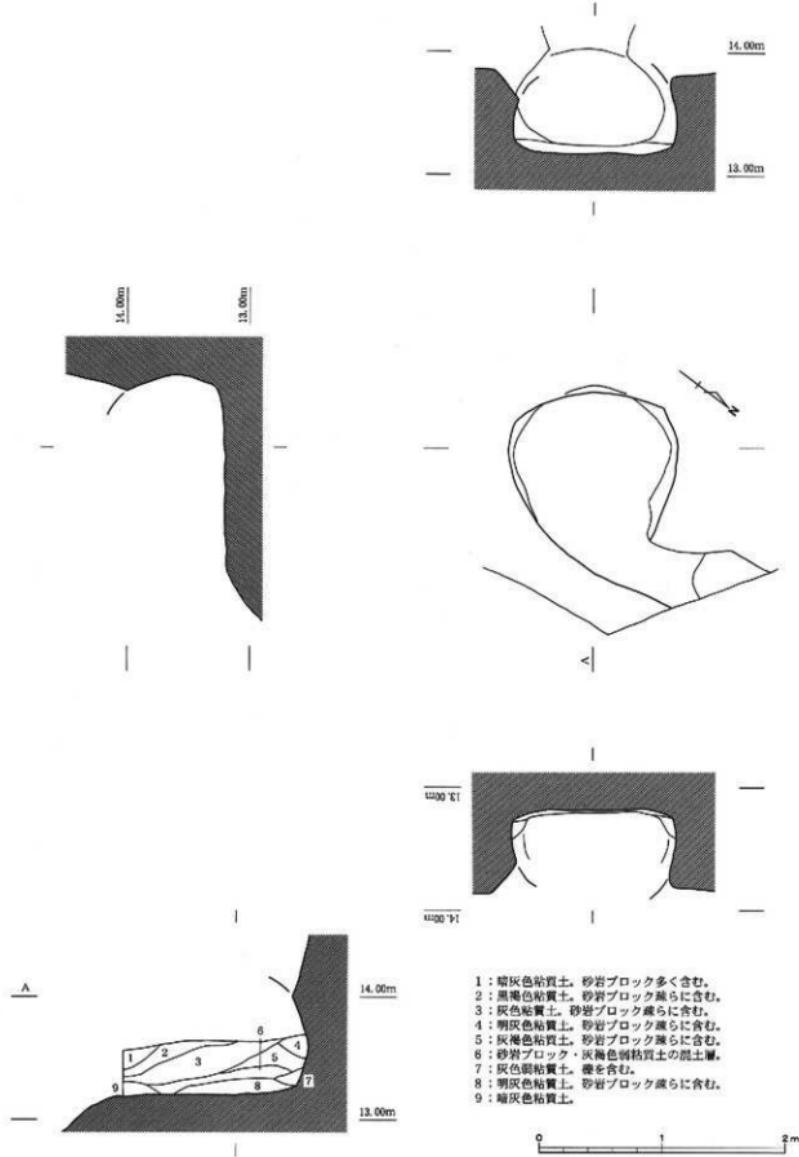
縮尺 1/40

図面一〇 遺構実測図



第4号横穴(S X04)実測図

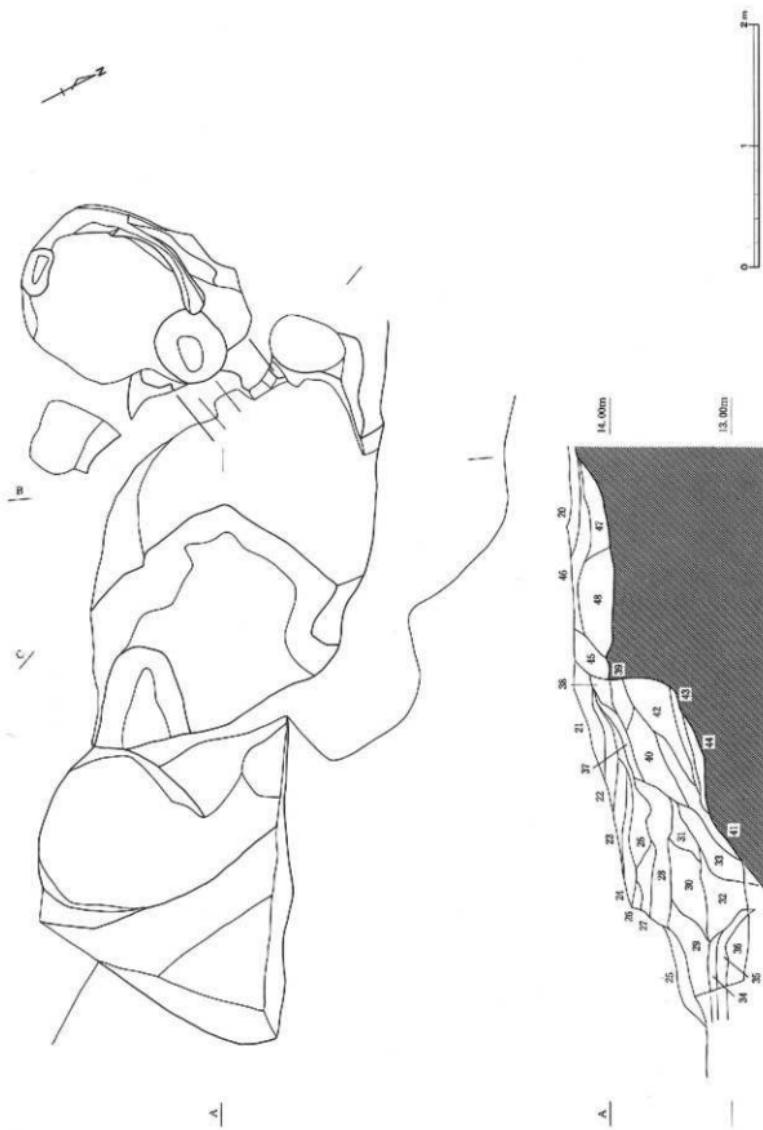
縮尺 1/40



第5号横穴 (S X05) 実測図

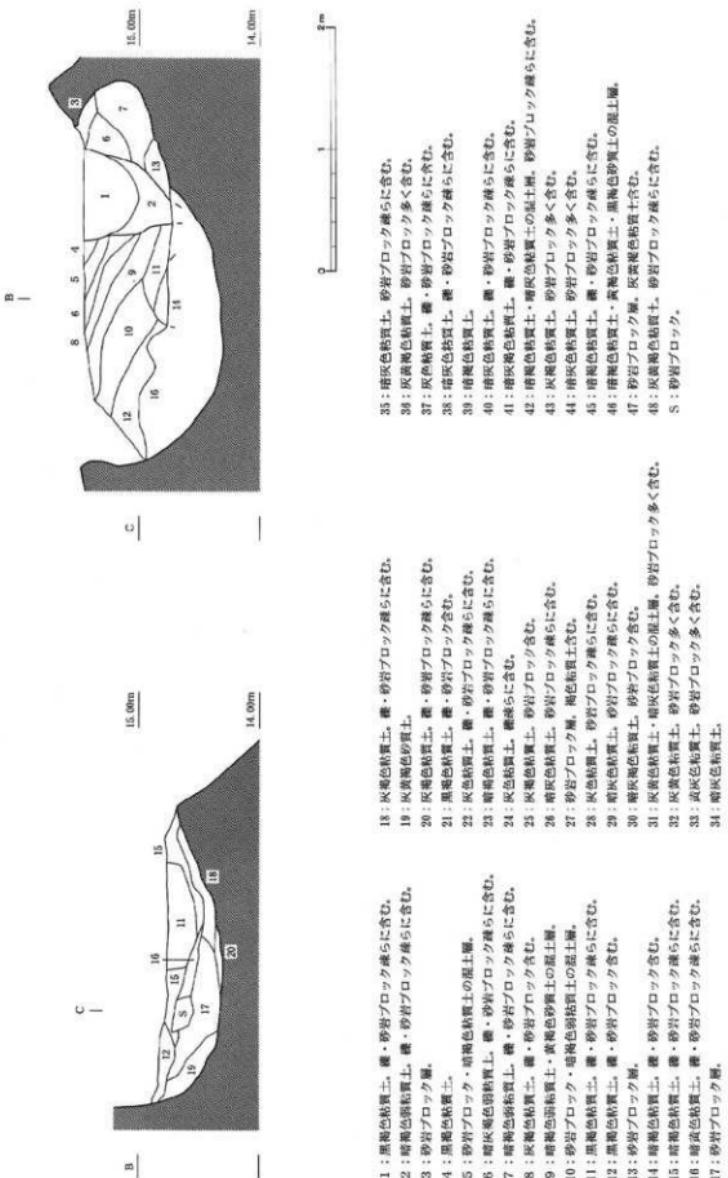
縮尺 1 / 40

図面一二 遺構実測図



第1・3・4号横穴(SX01・03・04)前底部実測図〔1〕

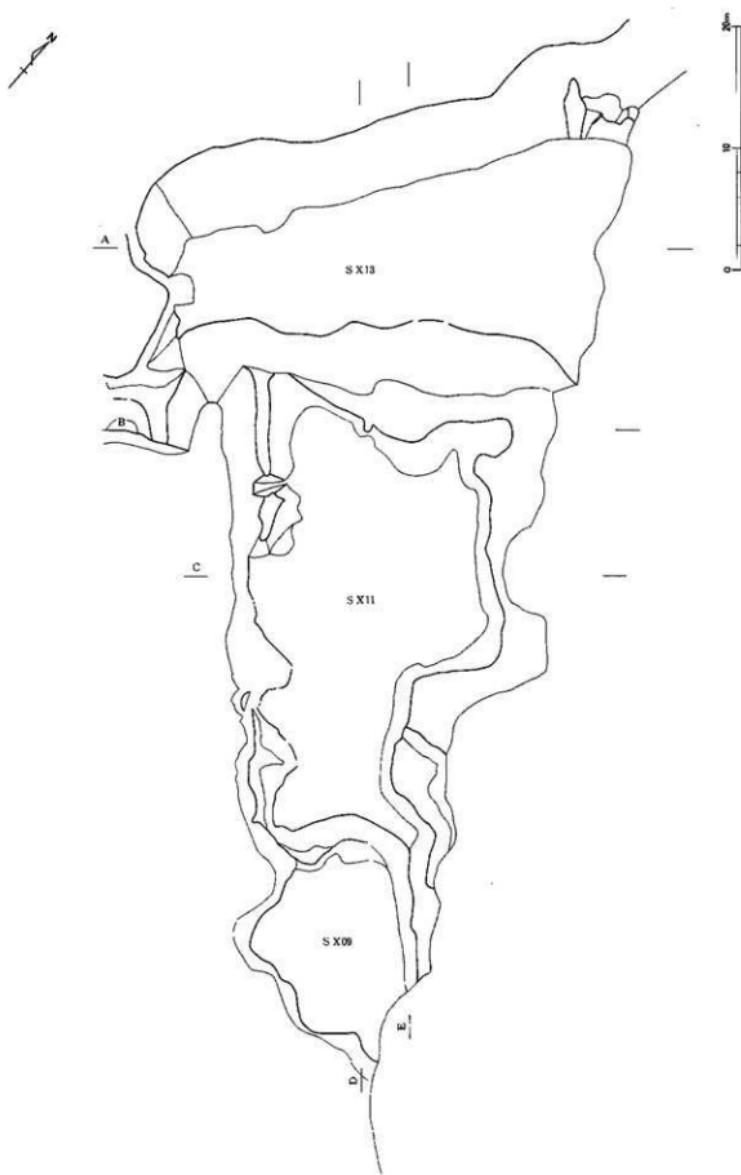
縮尺1/40



第1・3・4号横穴(SX01・03・04)前底部実測図(2)

縮尺1/40

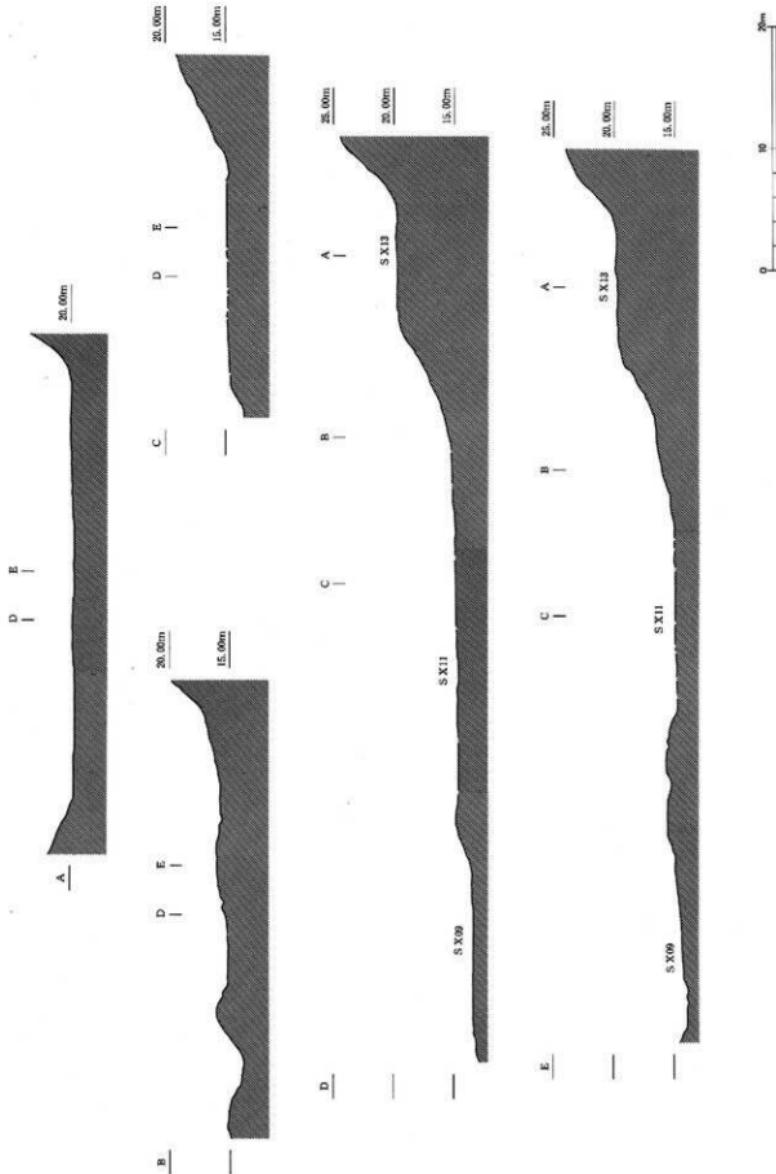
図面一四 遺構実測図



平坦面 SX09・11・13実測図〔1〕

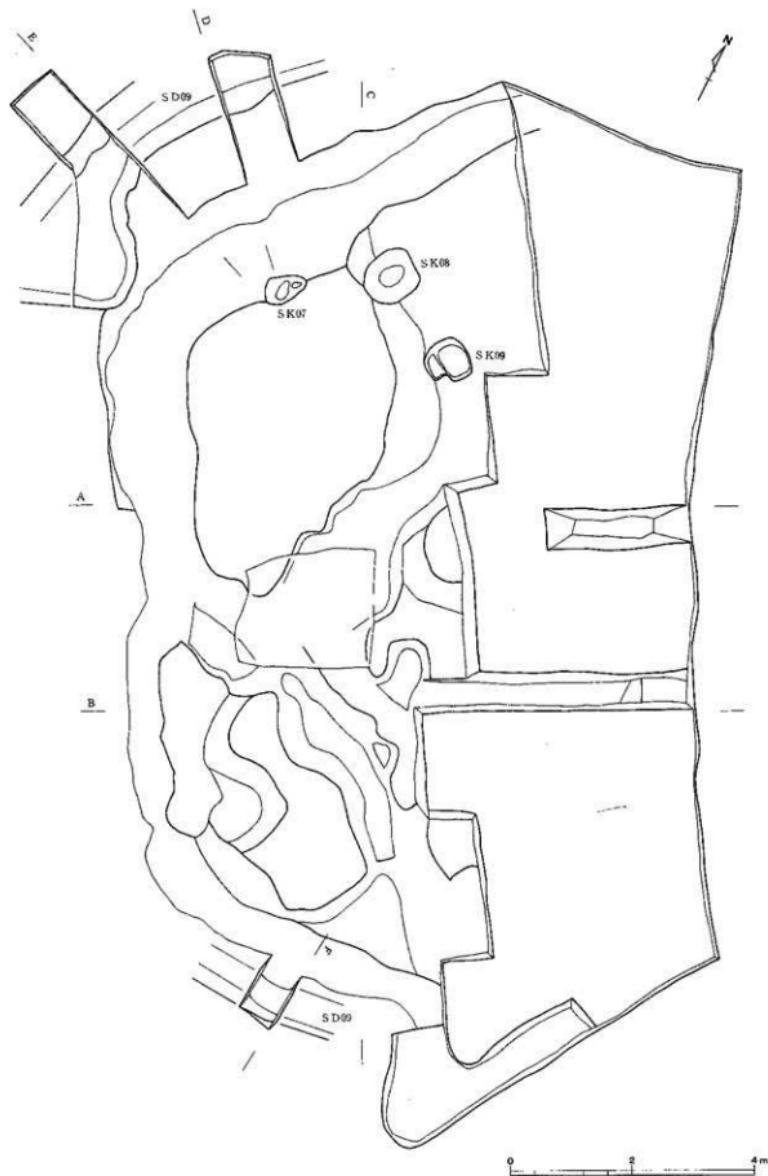
縮尺 1/400

図面 H 遺構実測図



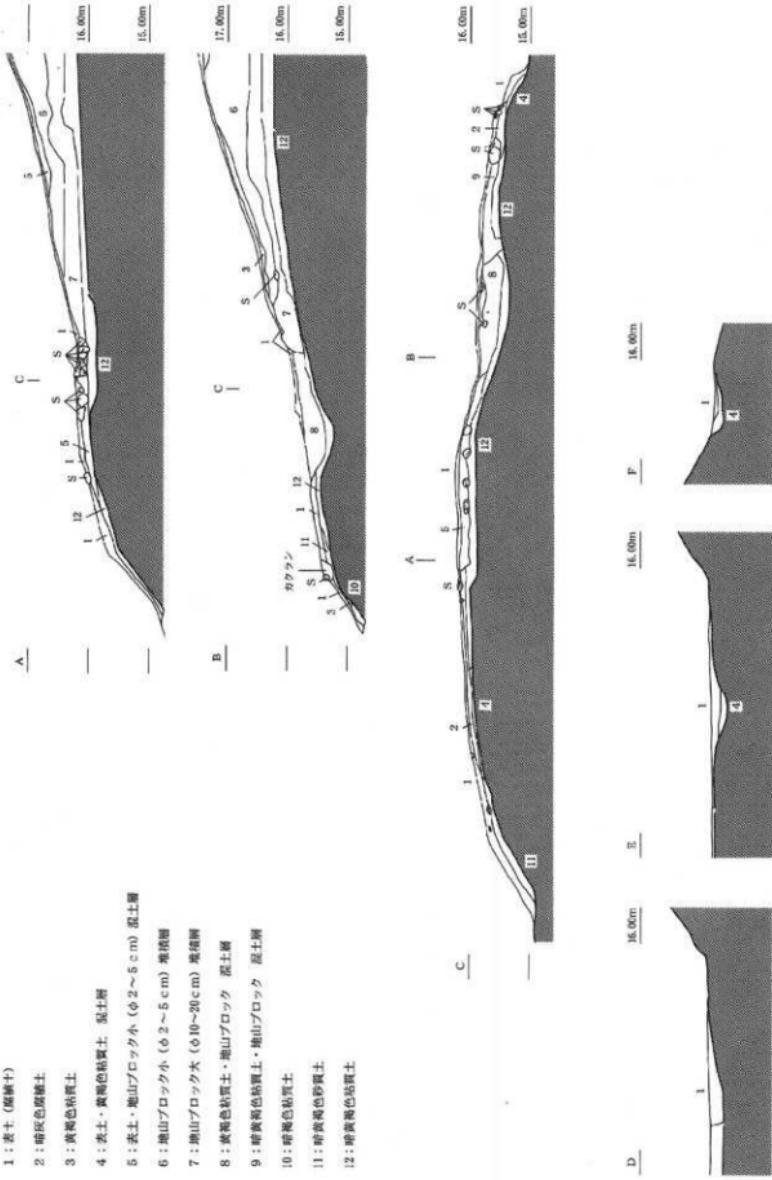
平担面SX09・11・13実測図(2)

縮尺1/400



基壇状造構 SX10・溝 SD09実測図(1)

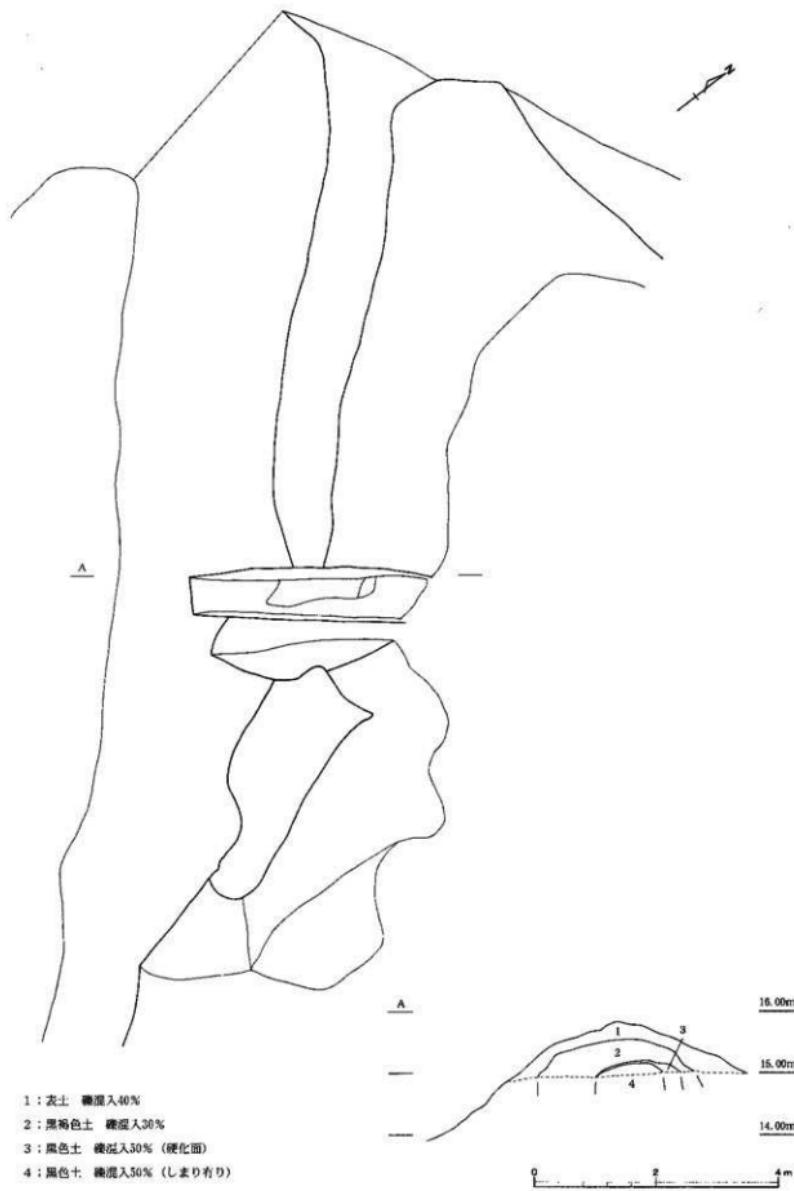
縮尺 1/80



基壇状造構 SX10・溝 SD09実測図 (2)

縮尺 1/80

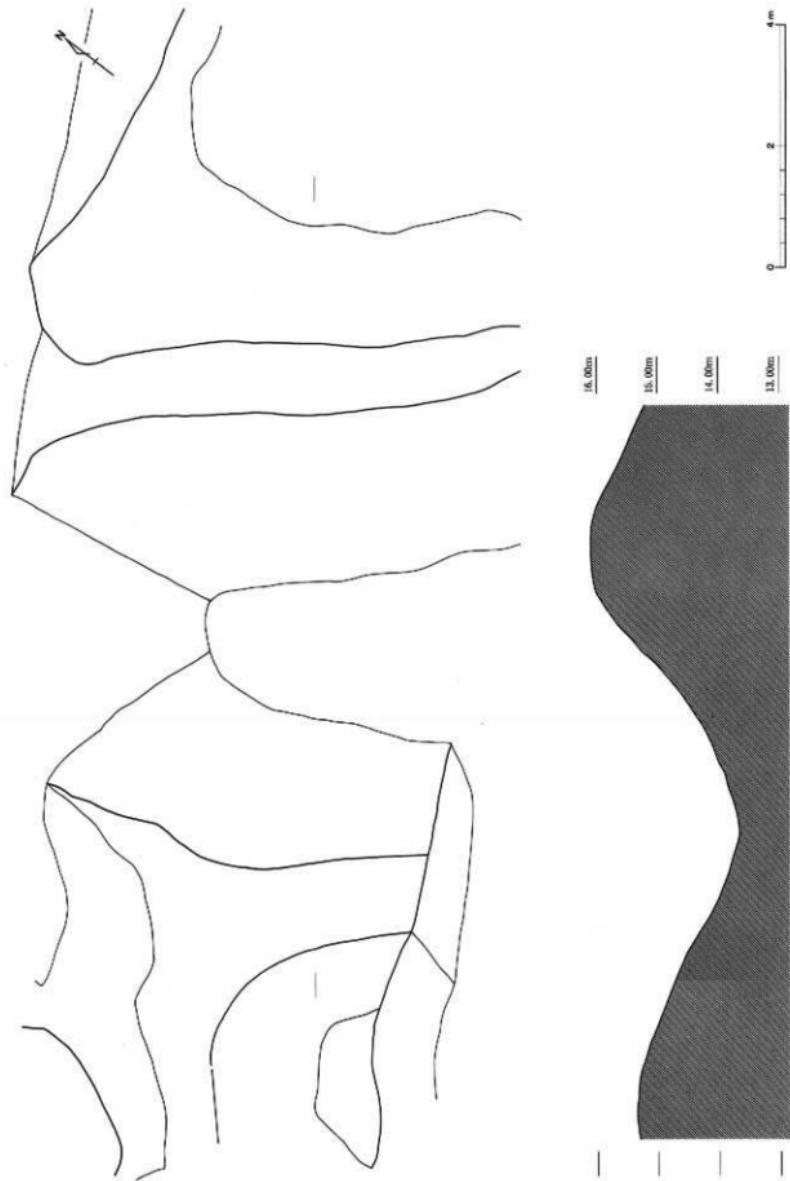
図面一八 造構実測図



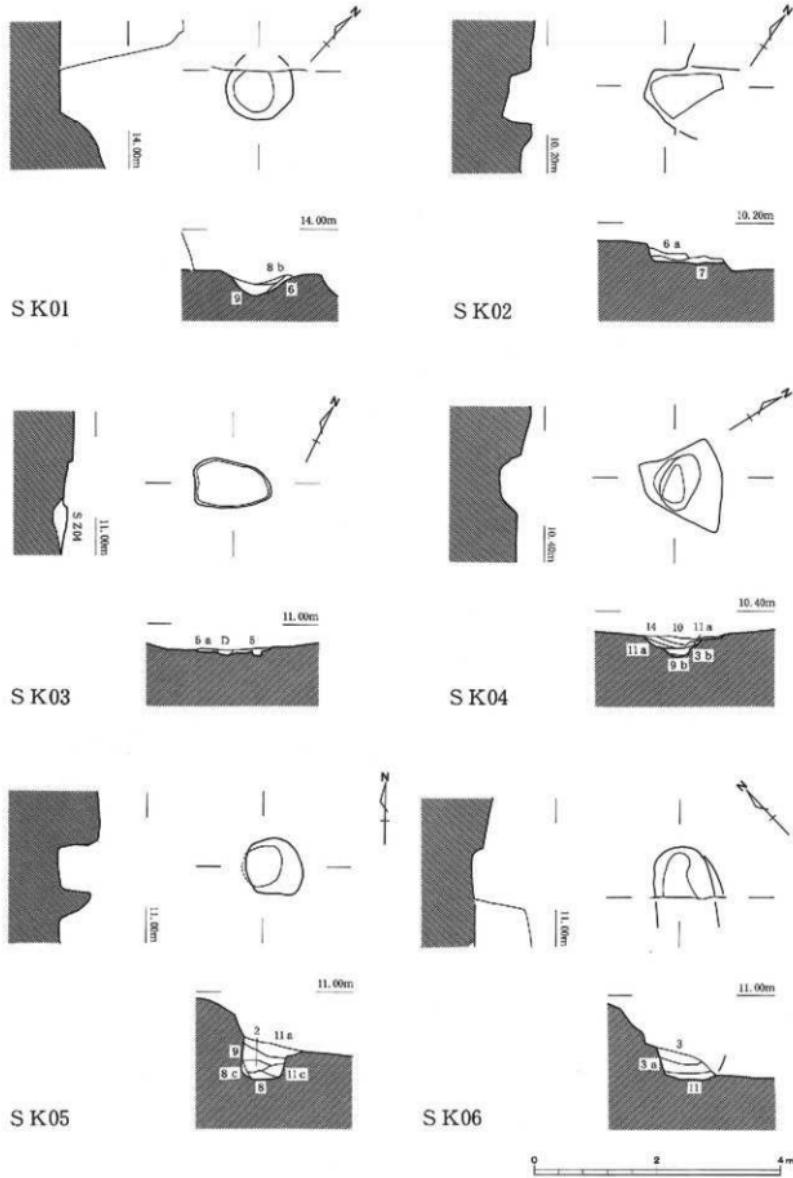
土壌状造構 SX12 実測図

縮尺 1 / 80

図面一九 遺構実測図



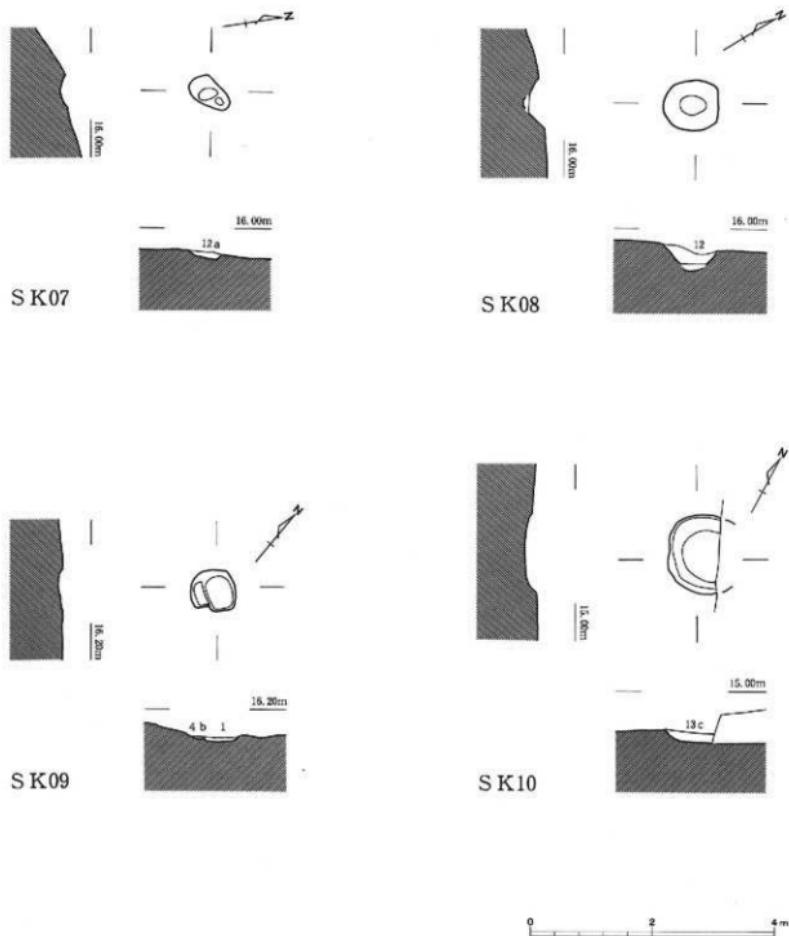
図面二〇 遺構実測図



土坑実測図〔1〕：SK01～06

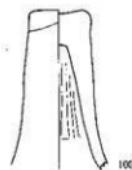
縮尺 1/80

図面二
遺構実測図

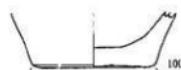


- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1 : 黒色粘質土（炭化物からなる） | 8 : 灰褐色粘質土 |
| 2 : 黒褐色粘質土 | 9 : 灰黄褐色粘質土 |
| 3 : 灰褐色砂質土 | 10 : 灰黄褐色砂粘質土 |
| 4 : 灰褐色粘質土 | 11 : 灰黄褐色砂質土 |
| 5 : 灰褐色弱粘質土 | 12 : 混灰褐色粘質土 |
| 6 : 黑色粘質土 | 13 : 灰色粘質土 |
| 7 : 黑色砂質土 | 14 : 淡黄色シルトブロック |

- | |
|---------------|
| a : 繭を含む |
| b : 炭化粒を含む |
| c : 地山ブロックを含む |
| d : カクラン |



1001



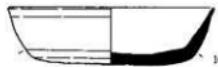
1002



1003



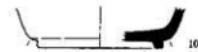
1004



1005



1006



1007



1008



1009

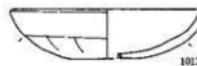
1010



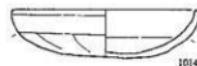
1011



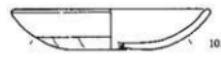
1012



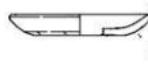
1013



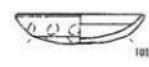
1014



1015



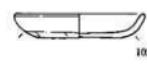
1016



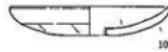
1019



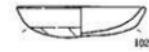
1022



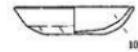
1025



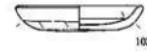
1017



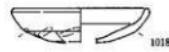
1020



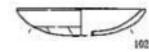
1023



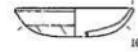
1026



1018



1021



1024



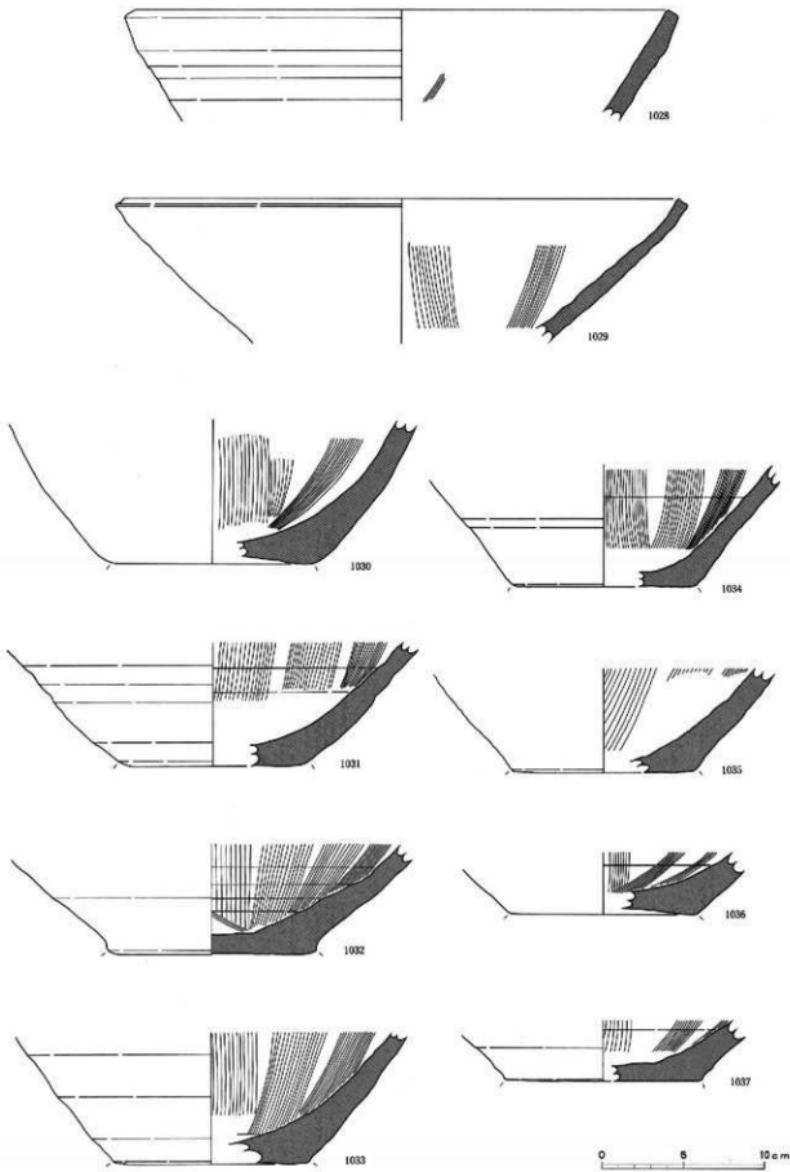
1027

0 5 10 cm

土器類=弥生土器：1001～1004、須恵器：1005～1012
土師器（中世）：1013～1027

縮尺 1/3

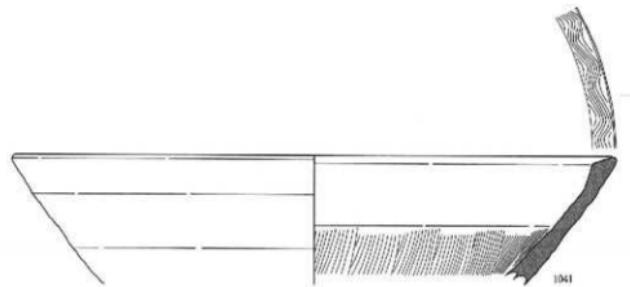
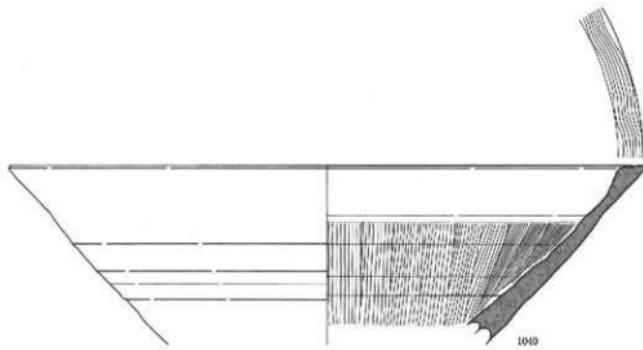
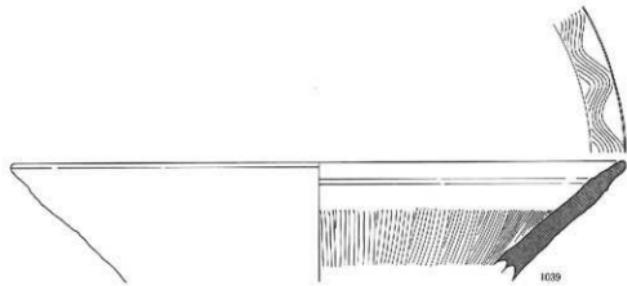
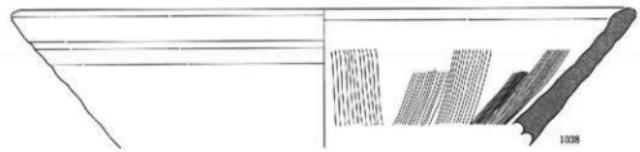
圖面二三 遺物実測図



土器類=株洲

縮尺 1/3

圖二四 遺物實測圖

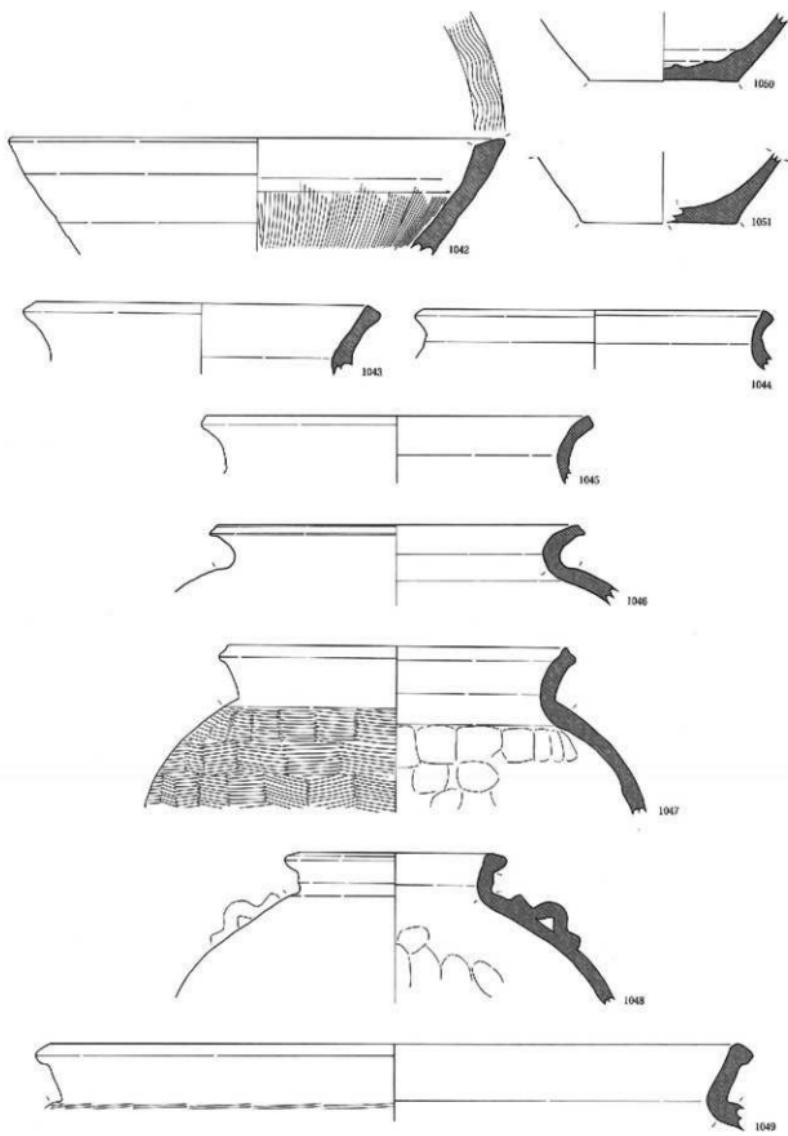


0 5 10 cm

土器類=珠洲

縮尺 1/3

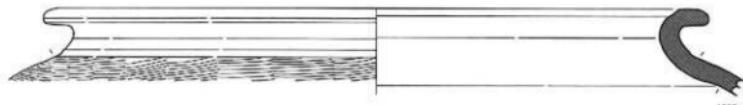
図面二五 遺物実測図



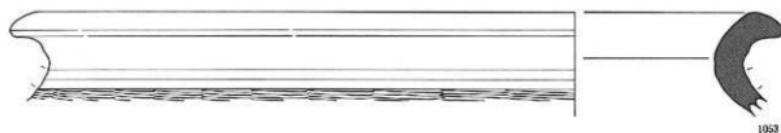
0 5 10 cm

土器類=珠洲

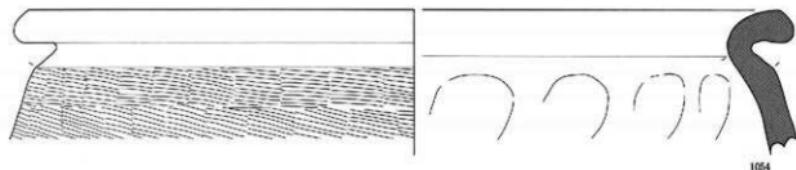
縮尺 1 / 3



1052



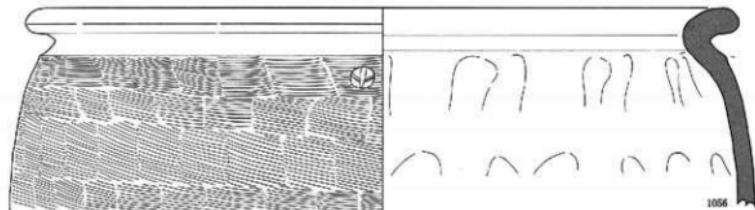
1053



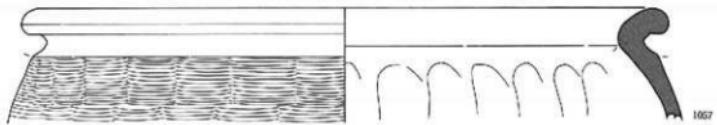
1054



1055

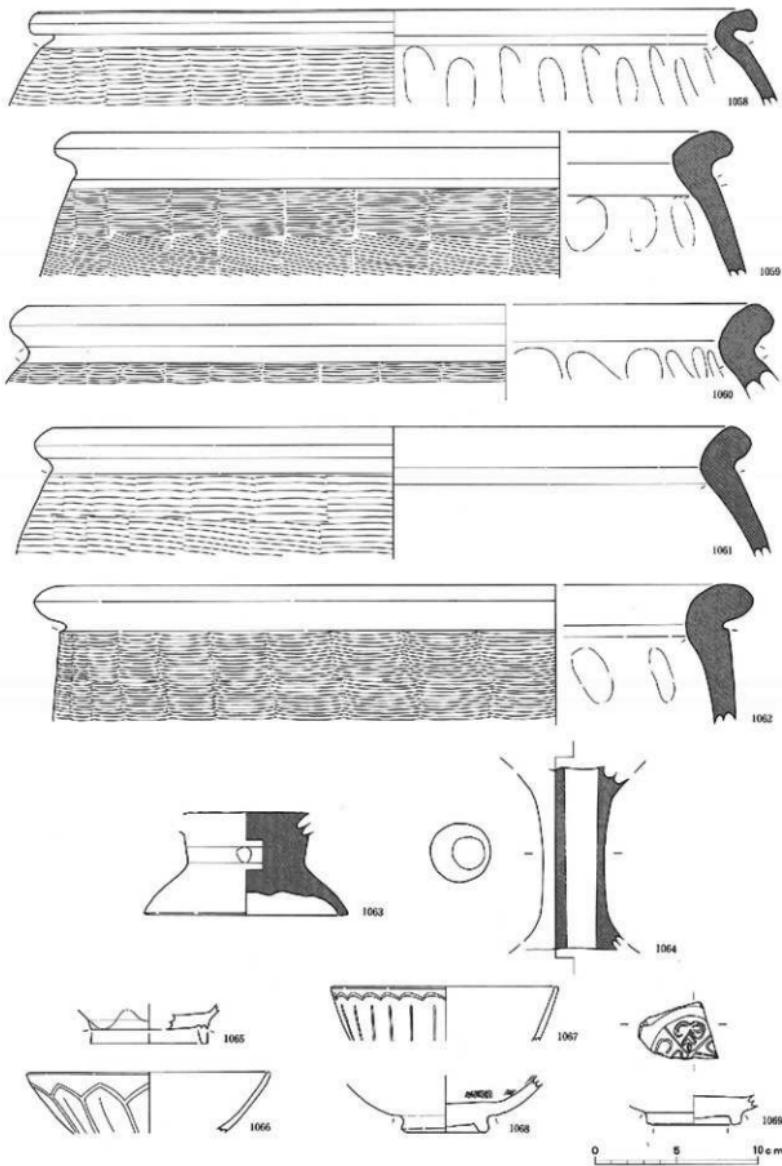


1056



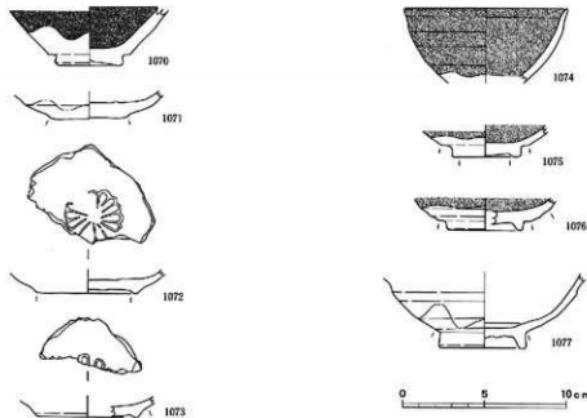
1057

0 5 10 cm

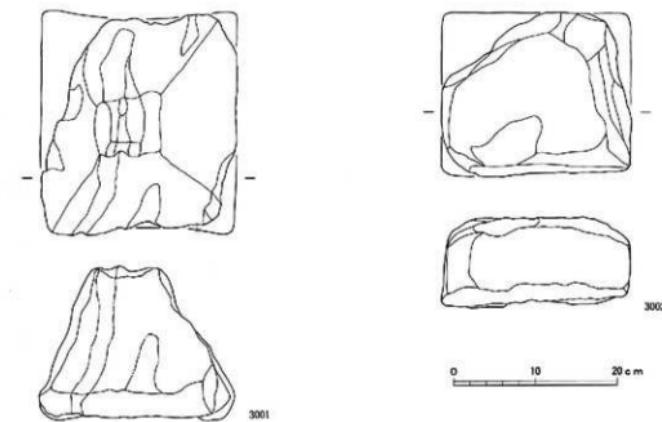


土器類=珠洲；1058~1064。中世陶磁器；白磁1065。青磁1066~1069

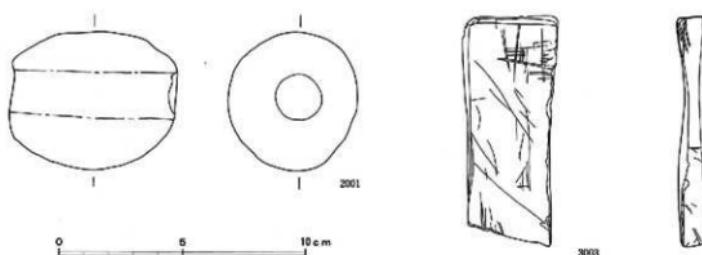
縮尺 1/3



縮尺 1/3



縮尺 1/6



縮尺 1/2

土器類=中近世陶磁器(縮尺 1/3)

土製品=土鍾: 2001(縮尺 1/2)、石製品=五輪塔: 3001・3002(縮尺 1/6)、砾石: 3003(縮尺 1/2)

図 版



1. 遺跡遠景（南）



2. 遺跡遠景（南東）



1. 遺跡全景（南東）



2. 遺跡全景（北西）



1. 平成11年度調査地区
現況（北）



2. 平成11年度調査地区
全景（北）



3. 平成11年度調査地区
遺物出土状況（南）



1. 平成12年度試掘調査地区現況（南東）



2. 平成12年度試掘調査地区全景（南東）



1. 平成12年度本調査地区全景（東）



2. 平成12年度本調査地区全景（北）



1. 第1・3~5号横穴全景（南東）



2. 第1・3~5号横穴全景（北東）



1. 第1号横穴全景（南東）



2. 第2号横穴全景（東南東）

圖版〇八 遺構写真



1. 第3号横穴近景（東）



2. 第4号横穴全景（北東）



1. 第5号横穴全景（北東）



2. 平坦面 SX 06全景（南）



1. 平成13年度試掘調査地区現況（南西）



2. 平成13年度試掘調査地区全景（南西）



1. 平成13年度本調査地区全景（東北東）



2. 平成13年度本調査地区全景（南西）



1. 平成14年度本調査地区全景（南西）



2. 平成14年度本調査地区全景（南東）



1. 基壇状遺構 SX10現況（北西）



2. 基壇状遺構 SX10全景（北西）



1. 基壘狀遺構 SX10南側土層斷面（西）



2. 基壘狀遺構 SX10北側土層斷面（南西）



1. 平坦面SXII現況（南東）



2. 平坦面SXII全景（南東）

圖版一六
遺構寫真



1. 土壘状遺構 SX12全景（南東）



2. 土壘状遺構 SX12全景（南東）



1. 盛土状遺構 SX09
現況（北）



2. 平坦面 SX13現況
(北西)



3. 塗状遺構 SD10現況
(南東)



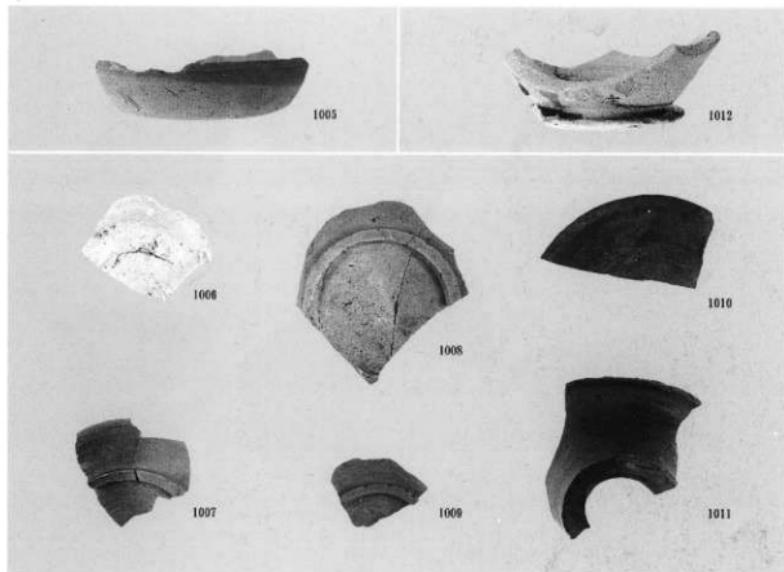
1. 平成12年度本調査
地区遺物出土状態（北）



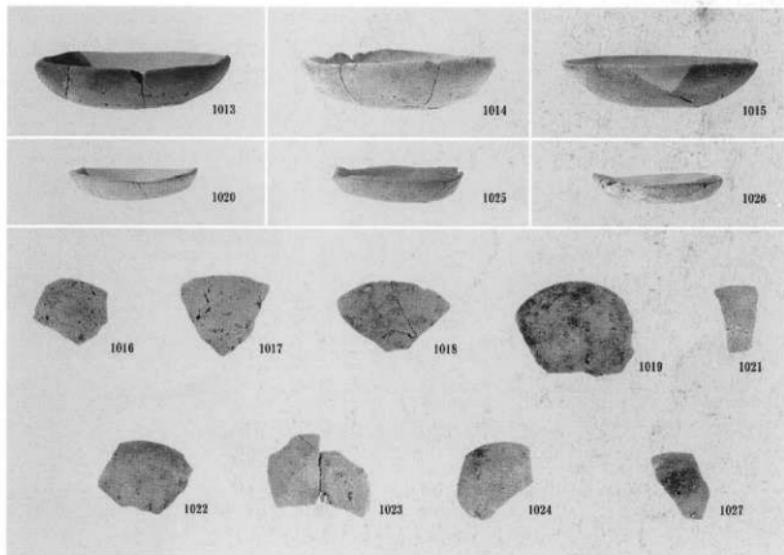
2. 平成13年度試掘調査
地区遺物出土状態（南）



3. 平成14年度本調査
地区調査風景（西北西）

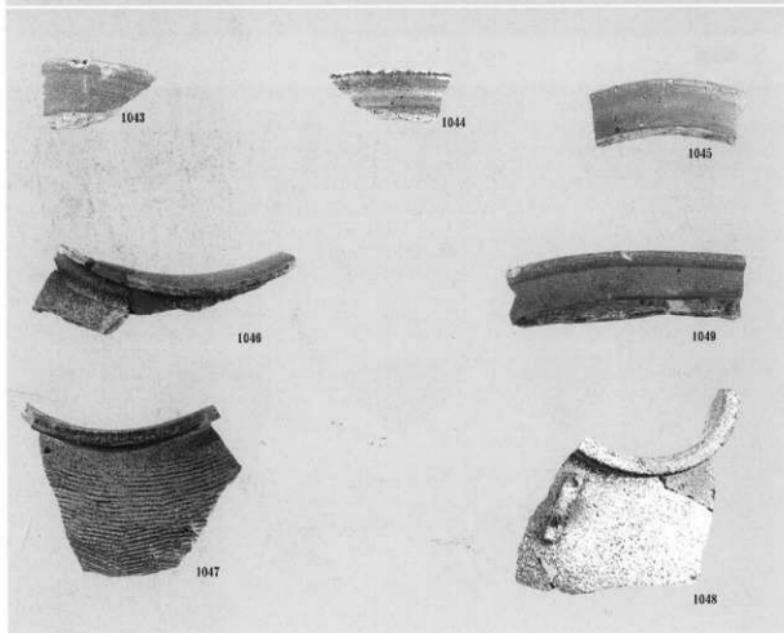
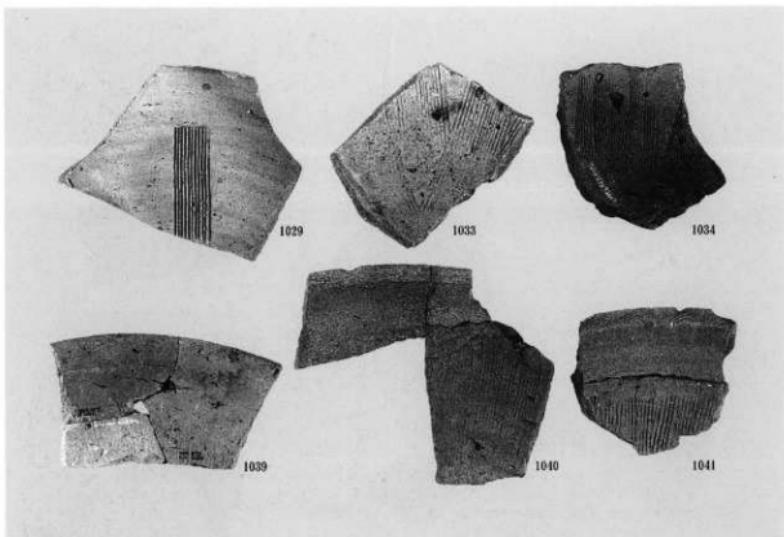


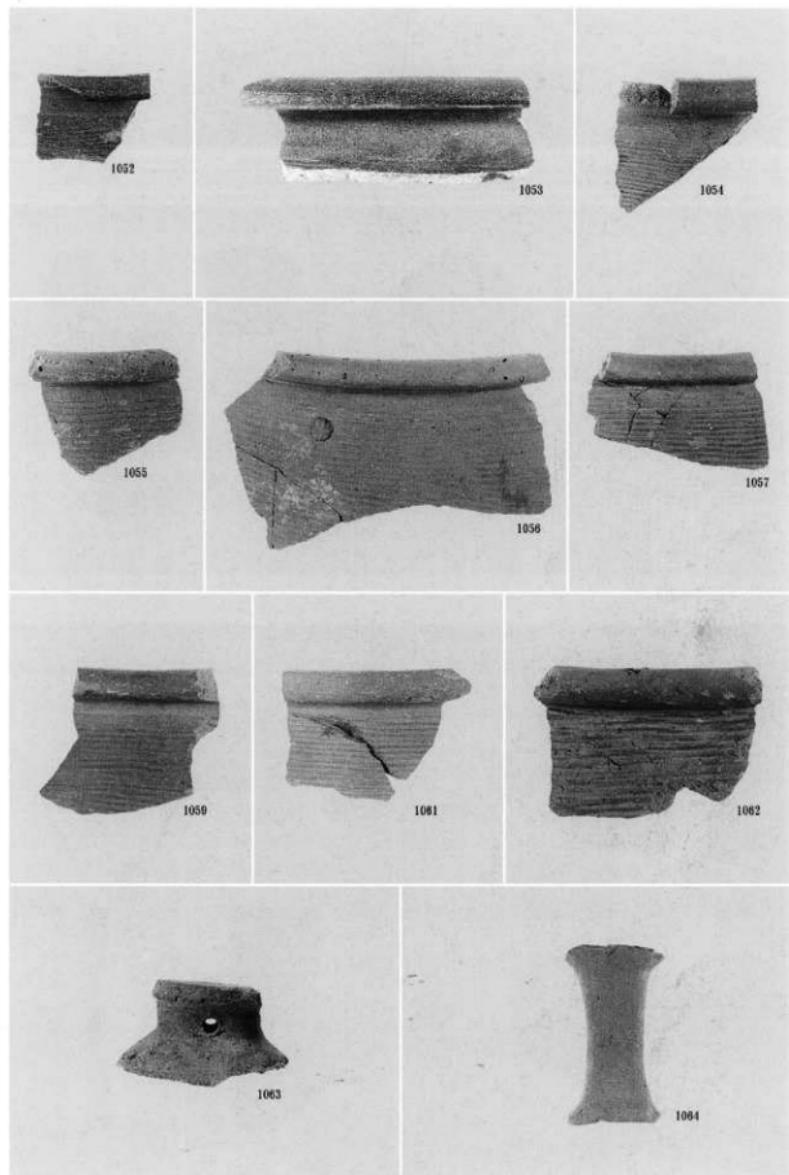
1. 須惠器

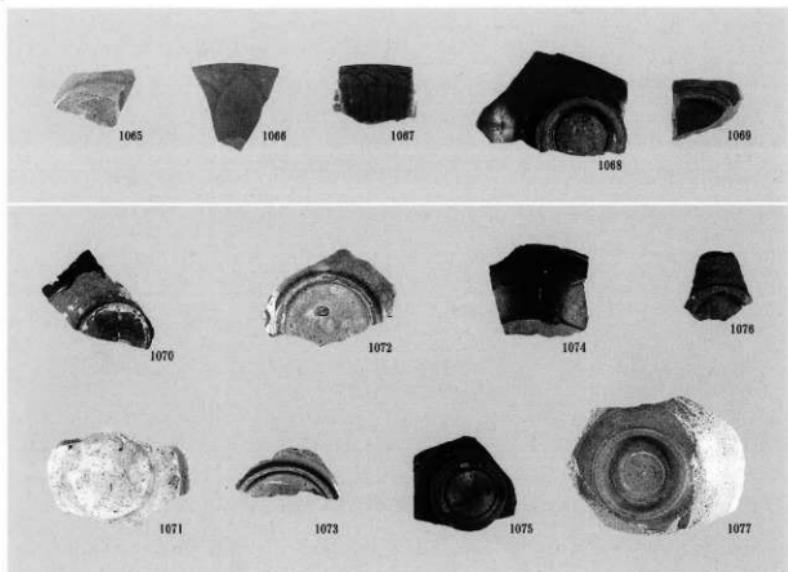


2. 土師器（中世）

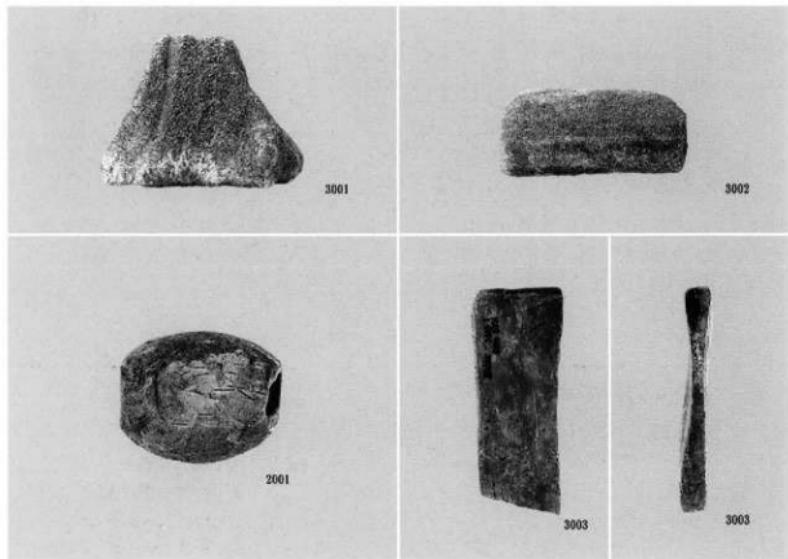
圖版二〇
遺物寫真







1. 中近世陶器



2. 土製品・石製品

高岡市埋蔵文化財調査報告第10冊

山園町遺跡調査報告

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

2004年3月31日

印刷所 株式会社チューエツ

富山県富山市上本町3-16 上本町ビル
